
俺のネギま生活（仮）

厨二病患者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺のネギま生活（仮）

【Nコード】

N0960R

【作者名】

厨二病患者

【あらすじ】

事故で死んだ俺はテンプレよろしく異世界に転生することになった。

転生した先はネギまの平行世界。

そして目覚めた場所は何故か中国の仙人たちの暮らす地域だった。

チートですが西洋魔術じゃなくて道術やら五行思想やらを学ばせてみました。よければ皆様読んでみてください。

諸注意

この小説は作者の拙い文才と自己満足によって構成されています。原作と違うとか解りづらいついとか言われてもどうにも対処できないので、そのところをご了承できない方はブラウザの戻る押すことを推奨します。

ブローグ的な説明回（前書き）

処女作で初投稿ですが、よろしくお願いします。

ブローグ的な説明回

俺の名前は大樹。今年二十歳になる。つってもここで俺の人生は終わらしい。なんてったって目の前には車に撥ね飛ばされたい、地面にボロキレのように倒れた自分が見えるからだ。

事の始まりは今日の昼間のこと。俺は趣味の散歩を楽しんでいた。年寄りくさい？知ってるよ。いつもの公園に向かって歩いていると、目の前の道路には急に飛び出した女の子が。

テンプレっぱいなあとか思って急いで助けに行ったら、対向車線のトラックを見逃したらしい。助けようと思って俺が車に轢かれたら世話無いなあ。（以上回想終わり）

つーわけで、如月大樹の二十年の人生はここで終わった…と書いていたんだ。

「で、目の前にいる貴方は誰様？」

「現実逃避を終えたのか、以外に早かったな」

現実逃避を終えて、目の前にいるさっきの女の子を抱きかかえている人に意識を向ける。間違いなく俺は死んだはずだ。繰り返しになるが、目の前にはボロキレ状態の俺。もちろん血まみれ。というか俺が俺を第三者視点で見てる時点で普通じゃない。そんな状況で死体の方じゃなく俺のほうに話しかけてくる相手、こりゃ普通じゃないだろ。

「俺か。俺は神様。わかってると思うが、お前は今死んだばかりだ」
「やっぱりか」

「随分物分りがいいな。詳しい事情を説明しようと思うが聞くよな

「？」

「当たり前だ」

なんでもこの人は神様で、女の子は娘らしい。子供が退屈していたので人界散策に連れて行ったら迷子になってしまい探していた。ようやく見つけたら目の前で俺が車に飛ばされていたっていうわけらしい。んで、神様が原因で一般人を事故に合わせたなんて申し訳ないから、適当に能力をつけて異世界転生をすることでお詫びしたいらしい。

「なんで異い世界転生がお詫びになるんだ？」

「いやー、このままだと死因調べられたときに俺らが原因ってわかるから。あと人界では二次創作で異世界転生が流行ってるみたいだし。こういう創作物って願望が出やすいんじゃないのか？」

「…OK、理解した。異世界転生で手を打ってやる。飛ばされる世界とくくれる能力を教えてくださいよ」

「お前本当に理解が早いな。んつと…転生先は『魔法先生ネギま！』のパラレルワールドだ。原作どおりの世界だとストーリーに縛られることになるからお詫びにならるので、パラレルワールドにさせてもらう。だから原作ブレイクしようが何をしようが一切問題ないぞ。」

そいつは重畳。確かに、異世界に行ったところで原作どおりに進めるしかないんじゃない。俺にうまみがない。俺の選択肢が自由になつてこそその異世界だ。

「さて次は能力だったな。これらのカードから選んでもらう」

といって神様はカードを数枚取り出し、ババ抜き的要領で俺の前に突き出した。

「このカードにはそれぞれ特殊能力やら才能が書いてある。主に戦闘方面だ。今からこいつを三枚引いてもらう。内容はお楽しみつてやつだ。…心配するな、不老は与えてやる。ある程度長く生きてもらわないと俺のワビにならん。ただし不死はだめだ、死があるからこそ限りある生が楽しめると俺は考えてるからな」

「くじ引きで決める能力つてどうよ…」

「そうわがままを言うな。どのカードで貰える能力も極めればかなり使えるぞ」

「わかった、引かせてもらう」

そう言つて俺は三枚カードを引いた。

「マナ吸収」「闇の加護」「魔力具現化」

「ほう、なかなかいい能力を選んだな。『マナ吸収』は大気にあるマナをほぼ無制限に吸収できる。ただしあくまでタンクにしかならん。出力を制限するのは自分の力量だから注意することだな。『闇の加護』は闇や影を操作する才能だ。魔法を使うときにこれらの属性魔法が使いやすいってところか。他の才能が皆無とは言わないが、使いやすい属性を鍛えたほうが結果としては強くなれるかな。あとこの闇は魔力を吸収することもできるぞ。『魔力具現化』は単純な構造のモノを魔力を使って具現化、物質として固定する能力だ。」

なんとまあ説明文っぽい台詞だな。ありがたいから何も突っ込まないが。しかしこの能力、アバウトな能力が多いな。だからこその成長性、か。俺の使い方次第でいくらでも方向性がかわる。頭の見せ所だな。

「よし、理解したな。転生先の時代は適当に昔にしてやる。修行するもよし、隠遁生活するもよし。好きに生きる。俺はもう干渉でき

ないからできるだけ長生きして楽しんできてくれ。その他質問は？」

「特にない。いろいろありがとう、神様。その女の子からあんまり眼を離すなよ？」

「言われなくても。それじゃあ、そのドアを開ければ転生完了だ。

よし、聞くことは全部聞いたし、後は習うより慣れろでいいか。精一杯楽しむとしますかねえ。

ドアを開けて一歩踏み出す。こうして俺のネギま生活が始まった…

ブローグ的な説明回（後書き）

こんな感じの書き出しです。

第1話（前書き）

連投です。やっぱり書くのは難しい…

第1話

大樹です。今俺は山籠りをして体を鍛えたりマナを吸収したりして能力に慣れています。

ドアを通過した後で振り返るとドアは影も形もなくなって、周りには木しか見えませんでした。能力の確認のため、とりあえず『マナ吸収』を試してみました。この『マナ吸収』はものすごいチート能力です。なんと使うことで疲労回復、肉体能力の向上、寒さ暑さなどの緩和、空腹も感じません。気分は霞を食べて生きてる仙人のようですね。

とは言え、何も食べない生活も味気ないというものです。なので、体を鍛えつつ狩りをしてみようと思いました。幸い動物もそこそこ見かけましたし。身体能力を上げている状態なら草食動物にも簡単に追いつき、肉食動物に襲われても殴り合いができました。正直張り合いがありません。

…というより、野生で生活してて考えるのを忘れていましたが。こはいつでどこなんでしょう。いくら歩いても森から出れないので他の人間と会ったことはありません。時代考証もできないので結局仙人生活をしているしかありません。原作がどうこう以前の問題ですね…

SIDE ????

最近この森に異分子が紛れ込んだとの噂を聞いた。この仙界の森に異分子が入ることなんて今まで聞いたこともないので仙界の暇人どもが大騒ぎし、たまたま近くにいたワシに現場検証をしろと天帝様から命令が下った。確かに雷神であるワシに危害を加えるなんて斉天大聖であるあのサルか次郎真君といった武神でないと無理じゃか

らのう。異分子が例えどんな妖怪であろうとワシが負けることなんてあるはずもない。

さて、報告であった場所はこの辺りじゃが。…ふーむ、たしかに異分子じゃな。報告されてからそう時を経えていないのにこれほどの仙気を吸収しているとは。その辺の神仙がちょっかいを出しても返り討ちに遭うのが関の山じゃろうなあ。これほどの仙気を吸収しておるならワシが多少暴れてもついてこれるんじゃないやろなあ…。よし、小手調べに一当てしてみるとするかのう。久しぶりに腕が鳴るわい。

S I D E E N D

S I D E 大樹

「その小僧、名はなんと云うんじゃ？」

「俺は如月大樹。爺さん、ちょっと聞きたいんだがいいか？」

「いいじゃろう、ただし、その前にちつといいかのう…」

相変わらず森を歩いていると、野生の変な爺さんが現れ話しかけてきた。この世界にきて初めての人だ。とりあえず人間がいる時代であることがわかり一安心。ただ気になるのが爺さんの服装。洋装じゃなく道士服？とも言うのか。この服装から察するにこの地は東洋、おそらく現代でいう中国の近辺なんだろうな。これで時代さえわかれば…

と、冷静に考えている時が俺にもありました。

現れた爺さんは会話もそこに俺に電撃を放つてきやがりました。身体能力を上げていたのだからうじて避けることができましたが。つかこの爺さん、動きが尋常じゃなく早い。雷撃を放ったときはある程度距離があったのにもう目の前にいやがるっ…

SIDE END

雷撃を放ち眼くらまし代わりにしたあと、老人は瞬動で間合いを詰めてきた。そのまま格闘をしかける。対する大樹はいくら身体能力を底上げしてようと数日前まで一般人だったのでかろうじて反応するのが精一杯だった。正拳突きを必死に避け、距離を取ろうとするが袖をつかまれ投げられる。

「甘いわ小僧。動きは早いが体捌きが素人じゃな」

「当たり前だっつーの！こちらら身体強化しただけの一般人、肉体言語の相手なんかしてられっか！」

受身を取りつつ冷静に考える。身体強化しただけじゃこの爺さんの攻撃は避け続けるのが難しい。距離を取ろうとしても投げられたり、最初のような電撃を食らうといささかまずい。

（このままじゃジリ貧だ、こっちからも攻撃するしかない。魔力を具現化しようにも近接じゃ相手にならないのはわかりきっている。魔法を使おうにもまだ魔法は知らない。と、なると…）

数秒思考しつつ打開策を思いつく。

「…闇よ、全てを飲み込み押しつぶせっ！」

そう言うで大樹の陰から漆黒の闇がひろがり老人を飲み込もうと動き出す。突然現れた闇に老人はとっさに電撃を放つが、闇は電撃を飲み込み無効化する。そのまま老人を飲み込もうとする闇に老人は多少焦っている様子だ。

「おい爺さん、あんたの電撃は無効化したぞ。この闇は飲み込んだモノを無に返す。これで攻撃手段は封じた。いい加減肉体言語じゃなくて人間らしく会話をしようぜ？」

「ほう、この程度でワシを無力化したと。小僧はそう言うわけか？」

「いいや、無力化したとは思っちゃいない。ただ、話し合いをする余裕が作れたのは事実だろ」

「…いいじやろう。手加減したとは言え下界で雷帝とも呼ばれるワシの電撃を避けるし、その闇も人間技ではない。かといって小僧みたいない仙人の話は聞いたことがない。小僧はいたい何者じゃ？」

ようやく戦闘態勢を解除し、老人から闘気が引く。質問の中で、大樹にはいくつか気になる単語を聞いた。

「爺さん、今『下界で雷帝と呼ばれてる』って言ったよな？」

「言ったのう。それがどうした？」

「…もしかして、九天応元雷声普化天尊だったりするの？」

「ほう、よくわかったのう」

…とんだ大物だったらしい。道教における雷神、生死や禍福などの全ての権限を持つ高位の仙人が目の中の老人だというのだ。

「さて、ここは仙域じゃ。只人は足を踏み入れることはできんはずなんじゃがの。それにその闇を操る技術も謎じゃし、手加減してるとは言えワシの攻撃を避けるし。小僧はいつたいどこから来て、何者なのかのう？」

「とりあえず、落ちついて話したい。どこか場所を移さないか？」

「それならワシの洞府ならどうじゃ？ちと移動するが、茶ぐらいなら出せるぞ」

かくして大樹は道教と出会う。

第1話（後書き）

文体が統一されてないですがご容赦ください。

第2話（前書き）

会話文っぽくならないよう気をつけてみましたが、これが限界っぽいです。

地の文ってどうやって増やしたらいいんだろう。力量不足を感じます。

第2話

爺さんの洞府に向かった俺は、彼に進められるまま卓につき、身の上話をしていた。

「で、九天応元「長いから老師でいいぞ」…じゃあ、老師。今のが俺がこの仙域に来た経緯なんだが、本当に信じるのか？」

大樹は自分が異世界で一度死んだこと、その後神様に出会い特殊能力をもらいこの世界に転生してきたことを話していた。相手も神仙（しかも雷帝のようなメジャーな神である）だったため常識じゃ考えられない話にも耐性があると思ひ、一切を包み隠さなかったのだ。

「まあ、本当かどうかは半信半疑じゃが、身体能力のワリに素人のような動きや、闇を展開した能力、仙域に突然現れたことの説明はつくからのう。それに仙人っていうのは、暇をもてあましたヤツが多くてな。退屈しのぎになればなんでもいいという考えが大半なんじゃ。事実ワシが小僧のところに行つたのも天帝様からの命令だったんだじゃが、半笑いじゃったからのう」

「…仙人もいろいろあるんだな」

と、世間話をしている大樹と老師。そうしているうちに話が途切れたとき、洞府に來客を知らせる音が鳴った。

「おい雷の。顔を見せにきてやつたぞ」

「その声は猿か。なんじゃ騒々しい」

（おいおい、仙人で猿なんて、一人しか浮かばねえぞ）

大樹の背に嫌な汗が流れる。姿を現した來客は予想通りの姿をして

いた。頭に金の環をはめ、火眼金睛の眼をした猿。

（やっぱり孫悟空かよ…）

「騒々しいとはひどい言い草だな。久しぶりに訪ねてきた友人に対する言葉じゃないぞ」

「ふん、どうせ仙域の異変を調べたという話を聞いて面白がって見に來ただけじゃろうが。暇な猿め」

「なんだと…。久しぶりに殴り合いでもするか、雷の？」

「上等じゃ、猿。今度こそ決着をつけてやろう」

対面したばかりなのに険悪な空気を放つ二人に大樹は頭を抱えなくなった。雷帝と武神の殴り合いなんて誰も関わりたくないから当たり前だ。しかし、この場にいるのはこの二人と大樹のみ。しかたがないので大樹は仲裁に入る決意をする。

「老師、その辺でやめにしてください。お二人はともかく俺は巻き込まれたら怪我じゃすまないと思うのですが」

そう言うと老師と孫悟空がこちらに視線を向けるが、すぐさまお互いを見やりまた口論を始めた。

「おい、雷の。老師とか呼ばせてるがいったいいつ弟子を取ったんだ。そもそも俺と同じ眼なんざ珍しいにもほどがあるぞ」

「そつえば説明しておらんかったな。その小僧がつい最近仙域に現れた異分子じゃよ」

（ん？孫悟空と同じ眼だと。そつえば、転生してから自分の見た目を確認してなかったな。）「老師、弟子になった覚えはありませんがとりあえず鏡はこの洞府にありますか？」

「鏡ならあっちにある。それと弟子云々の件じゃが。小僧の能力は

ワシら神仙が自らの気を循環させているのと非常に似通っておるんじゃない。神仙とは似て非なる能力は非常に興味深い。どうせ行き場もないんじゃない、生活と能力の修行の面倒を見てやるからワシに弟子入りしろ」

「わかりました。俺としても生活の面倒を見てもらえるのはありがたいです。老師に弟子入りさせてもらいます。これからよろしくお願いします。老師」

生活の面倒を見てもらえるという部分に惹かれた大樹はその場で拳を突き合わせ礼をし、弟子入りを了承する意を告げた。そして鏡を見に行った大樹。

鏡を覗き、右目だけが白目の部分が赤に、黒目の部分が金色になった以前の世界の自分とは似ても似つかない姿をした自分に仰天した大樹であった。

一方、再び二人で話を始めた雷帝と孫悟空。話してる内容は先ほどとは違い剣呑な空気はなくなっていた。ただ、大樹が聞いていたら焦ってでも止めただろう。雷帝による大樹の修行に孫悟空が加わりたいたいという内容だったからだ。

「雷の、小僧の修行に俺も加える。話を聞くに仙としての資格（気を巡すことができる力。大樹の場合はマナ吸収だが）もあるんだろう。となると、久方ぶりの新たな神仙候補だ。どうせなら徹底的に鍛えてみようじゃないか」

「とか言って猿よ。お主退屈を紛らわしたいだけじゃろうが」

「ふん、何とでも言え。道術は雷帝。武術は俺が教えよう。あと泰山府君にも声をかけるぞ。アイツは道術とは別の術にも詳しいからな。」

「そりゃ面白そうじゃ。耐え切れるかのう」

爺と猿による大樹魔改造計画が練られていく。大樹の明日はどうなるか、それは彼らのみぞ知る。

第2話（後書き）

独自設定

仙人：気を吸収し循環させることによる不滅の存在。

孫悟空は中国では武神として名高い神様で、ここで武術の師匠として登場させてみました。

九天応元雷声普化天尊は文中にもあったように道教における高位神で雷を司る他、かなりの権限を持っています。

泰山府君は道教では冥界の王とされ、陰陽道の主祭神です。

ネギまのオリ主もので西洋魔法の能力っていう話は結構見かけますが、東洋系の術設定をあまり見たことなかったののでやってみました。見捨てないで読んでくだされば幸いです。

第3話（前書き）

ユニークアクセスが1000人を超えました。つたない小説ですが読んでくださった方々、ありがとうございます。より精進しますの
でよろしく願います。

第3話

SIDE 大樹

俺が二人の老師に出会ってからかなりの年月が経った（10年までは数えていたが、それからは面倒になってやめてしまった。外の世界ではいつの間にか万里の長城ができたり、黄巾の乱があったあの科挙があったあの、果ては騎馬民族によって大陸が統一されたのだといった情報がごくたまに入ってきたから都合1000年以上研鑽を積んだようだ）

あのあと現れたもう一人の神仙、泰山府君も加わり日々修行ばかりしていたな。雷帝老師からはより効率の良いマナの吸収法や仙術による肉体強化、闇を使った戦闘技術を、泰山府君老師からは陰陽術を、斉天大聖老師からは基本的な体捌きから中国拳法、果ては大気の動き、地面の振動から周囲の動きを読むと言う武術の奥義までを文字通り叩き込まれるというウルトラスペシャルハード&デンジヤラスコースだ。（一日の終わりに老師達と順番に組み手をする事によって、だ。あの爺どもは常に俺の限界一步上の動きで攻撃してくるため、覚えたことを必死に運用するしかない。死に掛けたら仙丹を使って強制蘇生してのエンドレスだった）

おかげで今じゃ音よりも早い斉天大聖老師の如意棒の連続突きを避け、天尊老師の雷は陰陽術によって散らせる。才能の有無なんかより、長い年月の反復が以下に重要かってことだな。

んで、ようやく今日。三人の老師達が皆伝を下さるらしい。いい加減この生活にも飽きてきたところだからいいタイミングっちゃいいタイミングだ。

S I D E E N D

九天応元雷声普化天尊の洞府の奥に呼び出された大樹は、そこにいた三人の老師に向かって礼をとった。

「老師方。如月大樹が参りました」

「うむ、顔を上げよ、大樹」

「よく来たな」

「今日呼んだ理由は昨日言ったとおりですが、まずは氣を楽にしていってください」

三人がそれぞれ声をかける。その声色には弟子に対する氣遣いがあるふれていた。

大樹はそれを聞き立ち上がり、ようやく氣を楽にした。修行の日々によって彼らに対する敬意は常に持っていたため、言われるまでは緊張していたのである。

「それで大樹よ。今日この時をもってお主を仙術、武術その他いろいろの免許皆伝とする。それに伴い、神仙の一員として改めて歓迎する。天帝様にも仙号を与える旨を伝えたら快く了承してもらった。以後は好きな号を名乗り、洞府を開くなりするがよいぞ」

「ありがとうございます、天尊老師。斉天大聖老師も、泰山府君老師も、未熟な私に技術を授けてくださいました。この恩は返しきれません」

「いいぞ、大樹。俺は暇つぶしが先行していたからな。思ったより

楽しめたし、何より俺の武術の全てを授けたとも思っている。こんな弟子に会えたことで俺は十分満足だ」

「私もですよ、大樹。陰陽術をあそこまで受け継いだのは貴方が始めてです。私たちの術を散らせるのは貴方くらいでしょう。いままですぐ頑張りましたね」

それぞれがねぎらいと祝いの言葉をかけてくれる。よくよく考えると1000年以上も修行をつけてくれたこの三人はこちらの世界での親同然であるため、大樹は不覚にも涙ぐんでしまった。

「ところで大樹よ。お主これからいったいどうするんじや？ 出会ったころに言っておった『原作開始』じゃったか。それまではまだだいぶ間が開いているようじやが。もしお主が洞府を開くというならワシらができる限り手伝うぞ？」

「そうですが老師。私はこれから仙域を脱し世界を見て回りしたいと思います」

「そうですか…、理由を聞いても？」

泰山府君が理由を問うので大樹は素直に答えることにした。

「はい。この仙域は太平で居心地が良すぎます。老師たちにはお世話になりましたがこのままですと出る切欠がつかめなくなりそうでこれがいい機会ですので外の世界に出ていろいろ見聞するつもりです」

「そうですか。寂しくなりますね」

「まあ、弟子が旅立ちを決意してるならそれについては俺からは何も言うことはないさ」

「そうじやな。我ら神仙は自らの意思によって引き起こす事には自ら責任を負うことを旨としておる。長きに渡りワシらとともにいたお主ならそれも重々承知の上で行動できるじゃろって」

そういうと三人。そして旅立つに弟子に餞別を贈ろうという話になったらしい。いったん解散しそれぞれの洞府に戻っていった。

数刻後、三人が再び大樹の元に集まり、それぞれが持ってきた餞別を渡し始めた。

「まずワシからじゃな。これはワシが作った指輪じゃ。嵌めることで身体能力、主に反射神経を高めることができる。ありがたく受け取れ」

九天応元雷声普化天尊からは身体能力活性の指輪を。

「次は俺だ。この八角棍をやろう。流石に如意棒は携帯できる重さじゃないから、重量以外はほぼ如意棒と同じ性能だからめったなことでじゃ壊れないぞ」

齊天大聖からは八角棍を。

「最後は私ですね。私からはこの仙丹を授けましょう。この仙丹は飲んだ生物を不老長寿にする効果があります。永遠に近い年月を一人で過ごすのは、それこそ仙人のようにならなければただの地獄ですからね。貴方が自分の永い時間につき合わせてもいいと思った人に飲ませるといいでしょう」

泰山府君からは不老長寿の仙丹を。

それぞれからの饒別に大樹は感激した。どれもこれも仙界の術を駆使して作ったものばかりで原作のレアアーティファクトに勝るとも劣らない一品ばかりだ。

「ありがとうございます、老師」

「うむ。それでは気をつけていくのじゃぞ」

「気が向いたらいつでも戻って来い。組み手の相手ならいつでもしてやる」

「貴方の行く末に幸あらんことを」

こうして、大樹は仙域を出て世界を巡ることになった。

「さーで。もう昔過ぎて原作のことなんざさっぱり覚えてねえな。今が1200〜1300年くらいか？とりあえずシルクロードを通ってヨーロッパにでも向かうかね。時間なんざ腐るほどあることだし、焦らずゆっくりむかうとしようかあ」

第3話（後書き）

キングクリムゾンしちゃいました。修行編に時間かけてもしょうがないと思ったもので。

今の大树は遠距離は仙術による雷と能力による闇や影、重力。近距離は中国拳法と棒術で闘います。魔法攻撃は五行相剋で、物理攻撃はほぼ回避できるっていう設定の裏づけをこの回でやったつもりです。

次回はエヴァとの出会いでも書いてみようかと思っています。それでは今回はこの辺で。

第4話（前書き）

エヴァとの出会い編です。

第4話

仙域を出た俺はシルクロードを通って西に向かい、数年かけてヨーロッパへたどり着いた。

この時代のヨーロッパは中世真つ只中で魔女狩りの時代だったが、俺は東からきた商人ということで町から町を渡り歩いていた。事実中国をはじめ、シルクロードの途中で宝石などの商品になりそうなものを集めていたからな。

そんな中、俺はある噂を聞いた。曰く「スコットランドのとある城で、一夜にして使用人を含む全ての住人が死んだ」というものだ。そしてその城には今年10歳になるという姫君もいたらしい。

…これはやはりエヴァのことなのだろうな。やはりここはネギまの世界なんだと改めて痛感したというか…。

いや、今まで仙人と修行に明け暮れていたって時点でファンタジーの世界だったのは理解していたが、やっぱり原作キャラクターの存在を感じると、改めて理解してしまうというか。

ともかく、この噂を聞いてしまった以上俺はエヴァを助けたくなくなてしまった。前の世界でもそうだったが、どうやら俺は女子供には甘いらしい。とは言っても、あの薬味は嫌いだったな。言動が常識に過ぎてたし…。

今となってはほとんど覚えていない原作の薬味を思い出しつつ俺はエヴァを探すため欧州の村々を巡ることにした…

SIDE エヴァンジェリン

私が吸血鬼になってから十数年がたちました。あれからいろんな村に逃げましたが、最後は成長しない私を不審に思った村人から逃げるため夜逃げを続け、気付いたらこの森の中にいます。

教会に連絡をとった村もあつたらしく騎士団に追われたり、得体の知れない人たちに追われることも。それでもお父様たちを殺したあの男に復讐する為に必死に逃げましたが、もう限界みたい。さつきから山狩りをしている気配を感じる。今の私は不死身なだけの子供。この山狩りから逃れるのが難しいことくらいいくらなんでもわかってしまう。

それでも移動を続けていると、周囲の人の気配が濃くなってきた。追っ手もどうやら包囲を終えたみたい。

お父様、お母様、使用人のみんな。ごめんなさい、私はここまでのようです。

諦念の二文字が私の頭を埋め尽くすと自然と涙が出てきた。泣いたってどうにもならないことくらいわかってるのに。

でも、わたしはまだ死にたくない。無残にも殺された両親の仇を討ってない。私をこんな風にした恨みを晴らしてない。諦めと復讐が私の中でせめぎあっていると、茂みの中から今まで見たこともない服装をした男がでてきた。とうとう見つかってしまった。

それが私と大樹の出会いだった。

S I D E E N D

ようやく見つけた。エヴァンジェリンの噂を聞いてから十数年。長かった。よくよく考えたら逃げ回ってるんだから簡単に見つかるわけなかったな。俺の見通しの甘さだ。

どうやらエヴァンジェリンは逃げ続けていたが教会やら魔法使いやらに連絡が行き大規模な山狩りに遭っているらしい。崖から下を見下ろすと松明が明かりが森のそこらじゅうに目に付く。これは早く保護しないとまずい。

俺は魔力の感知を全開にし人間とは異なる魔力を探る。

…ようやく見つけた。後は保護するだけだ。崖から飛び降り探った気配の元に急ぎ向かう。まだ山狩り連中は見つけていないようだ。急げっ。

ようやく気配の元にたどり着いた俺はぼろぼろの服をきた金髪の少女を見つけた。やはりエヴァンジェリンだったか。それにしてもどんだけ弱ってるんだこいつ。見た目十歳の子供を追っかけまわして何が楽しいのか、俺には理解できないな。

「見つけた。君が今搜索されている魔女か？」

「…あなたは誰？」

「俺は大樹と言う。率直に問おう。君はまだ生きていたのかな？」

「もうだめだよ、私はどこに行っても追われたもの。追われるだけなら生きていたって「俺が聞いているのは周りがどう思ってるかじゃない。君がどうしたいか、だ」…本当に助けてくれるの？」

「ああ、君が生きる意志を持つ限り助けよう。俺の名に誓って」

「…私、まだ生きていいいの？」

「くだいな、人が許可するからじゃない。大事なことは君自身の意志だ。死にたがってる者を助ける趣味はおれにはないからな」

「……たい」

「聞こえないな。はつきりと言った」

「…生きたい。生きていたい！私まだ何もできてない！お父様達の仇も取れてない！私自身の楽しいことなんて一切見つかってない！まだ生きてこれから先のことだって考えたい！」

「…いいだろう。その意志、聞き届けよう。九天応元雷声普化天尊よ、我が命ずる。周囲に天雷を落とせっ！！」

霊符にマナを通し、周囲に特大の雷を落とす。これで山火事でも起こして逃げるとしよう。

「さあ、雷が眼くらましになる。今のうちに逃げるぞ」

「あ、ありが」礼は無事に逃げ出してからだ。今は急ごう」は、は

いつ！」

言うが早い。俺はエヴァを抱えてその場から高速で逃げ出す。ただ一般人ならこれに追いつけるはずもない。仮に追いついてくるやつらがいるとしたら、ご立派な魔法使い共だけだ。だったら返り討ちにしてやるさ。お姫様をいたぶる馬鹿どもには雷帝の弟子が天罰をくれてやるとしよう…

第4話（後書き）

こんな感じに仕上げてみました。どうでしょうか。

個人的な考えですが。薬味坊主やMM連合の正義の魔法使いたちって自分の意思で物事の決定をあんまりしてないと思うんですね。だから自分や相手の意志を尊重するように書いていくつもりです。

それでは、見てくれる人に感謝をこめて。

第5話（前書き）

大樹、エヴァに自己紹介の後選択肢を与えるの巻

会話文ばっかです（汗

第5話

エヴァンジェリンを連れて包囲を抜けた大樹はさらに森の奥へ移動した。これから夜も更けるためこれ以上奥地に搜索の手は伸びないだろうと考えたのだ。

そこで多少開けた場所を見つけた大樹は抱えたエヴァンジェリンを降ろし夜営の準備を始めた。薪を拾い集め、陰陽術で火をつける。夜の森の中でそこだけ仄ほのかに光る。

「さて、ここまで来ればとりあえずは大丈夫だろう」

「なぜ私を助けてくれたの？」

「まあ、その前に自己紹介としようか。お互い名前も知らないんじゃないだろうか。俺は如月大樹という。こちらに倣うならタイジュ・キサラギだ」

「…私の名前はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエルです」

「エヴァンジェリン、か」

「長いからエヴァでいいよ、タージュ」

「タージュじゃなくてタイジュなんだがな」

「言いづらいよ」

「東方の発音はこつちじゃ言いづらいか。ならタージュでかまわんよ」

「タージュ、タージュ……覚えたよ」

「それは重畳。で、だ。早速だがエヴァ。君は噂の吸血姫で間違いないのかな？」

それを聞いたエヴァンジェリンはビクツと身をわずかに震わせた。

「そう身構える必要はないぞ、エヴァ。仮に俺が君を狙うハンターだとしたらあそこで助けたりはしないさ」

「…何でタージュは私を助けたの？」

「ふむ。何故か」

そう言われた大樹は腕を組み思案する。

「…そうだな。大勢で弱いものを囲み狩ろうとするのが許せなかったから、とでもしておこうか」

「私、吸血鬼だよ？化け物って周りに言われたから弱いものなんかじゃないよ」

「そうかな。俺には独りで泣いている女の子にしか見えないが。そ

れにエヴァは化け物だと言うが何かしたのかな？」

「…何もしてないと思う」

「なら、俺にとってエヴァはただの女の子だな。悪さをしたわけでもなく、自衛でもない。ただただ自分達と違うというだけで他の存在を駆逐するヤツのほうが人間としてどうかと思うがな」

姿勢を崩し、一息つく。エヴァンジェリンもようやく警戒を解いた。二人の間に落ち着いた空気が流れ始める。

「…エヴァ。助けたときに復讐がどうか言っていたが。詳しく聞いていいか？」

問いかける大樹にエヴァは口を開く。

十歳の誕生日の日、気がつけば城にいた両親、使用人、その他全ての人間が死んでいたこと。

生きてる人を探していたら見知らぬ男がいて、自分が吸血鬼になったと聞かれたこと。

それから自分が意識を失い、再び眼が覚めたら男がいなくなっていたこと。

敵討ちのため、男を捜しに旅にでたこと。

旅先で、成長しないことが周りに知られるたびに襲われそうになり逃げたこと。

長いエヴァの語りが終わった。

「…大変だったな」

「どこに行っても長くて数年で追われたの。私はまだ吸血鬼に成り立てだからたいした力もないし。関係ない人を怪我させたくないから抵抗しないで逃げてた。そしたらどんどん追い方が激しくなつてとうとう囲まれたのがついさっき。もう何もする気力もなくなつてあそこで死ぬんだなあって思ってたらタージユが来てくれたんだよ」

そうして見た目に合った笑顔を浮かべる。

「ありがとう、タージユ。タージユは命の恩人だよ」

「たいしたことはしてないさ。たいしたことをするのはこれからだ」

「…どういうこと？」

「エヴァ。君に選択肢をあげよう。一つは『この地を逃げ東方へ行く』というものだ。シルクロードの果てに俺の師匠がいる。そこなら周り是不老の存在ばかりだ。エヴァでも仲間と認めてくれるはずだ。紹介しよう。その年齢で復讐に生きることもない。平穩無事な生活に戻る選択だ」

「ちょっと待って、タージユ。今不老って言ってたけどもしかして…」

「ああ、言い忘れていたな。俺も不老の『化け物』だよ。吸血鬼ではないがね」

「そうだったんだ。…一つってことはまだあるの？」

「ああ。もう一つは『俺と行く』ことだ。俺は世界を見て回る旅をしている。手始めに東方からこの地に着たばかりでね。このまま旅を続けるつもりだ。旅の途中で君の復讐相手にも会えるかもな。こちらは平穩無事とは言えない旅となるだろう。まあ、できる限り守るつもりだし、自衛の手段も教えるが」

「できる限りって。絶対じゃないんだね」

「ああ。始めに危険があると伝えているからね。判っていてこちらを選ぶなら、そこには『意志』があるってことだ。危険が嫌ならもう一方を選べばいいだけさ。さて、どうするエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。選択肢は示した。あとは君の意志でこれからが決まる」

「タージュはついて来いって言うてくれないの？」

「自分から他人の未来を背負えるほどの人間じゃないんだよ、俺は」

言っと大樹は立ち上がる。

「焦って決める必要はないさ。今日はここで夜を明かすから明日までゆっくり考えるといい」

「タージユ、立ち上がったどうしたの？」

「何、人が大事な選択をしているところに無粋な客が来たようだからね。ゆっくり考えられるよう追いつてくるのさ。…そこで聞いているんだろ。出て来いよ、俺が相手をしてやるから」

第5話（後書き）

いかがでしたでしょうか。次回はバトルパートの予定です。うまく書けるといいんですが。

PVとユニークがすでに昨日より多くなってびっくりしています。今日は書けるだけ更新するつもりです。

お気に入りに入れてくれてる人がいるだけで頑張れます。これからもよろしく願います。

第6話（前書き）

バトルパートです。台詞少なくすると描写が足りなくなっ
てこれが
精一杯：

第6話

「…出てこいよ、俺が相手をしてやるから」

立ち上がって振り返った大樹は茂みに向かって殺気を放った。

「っ！…いつから気がついていた？」

「仙術を極めた俺には周囲の敵意を感じ取ることができるのさ。俺に気付かれなくなったらまずはその殺気をどうにかしろ」

そう言うのと、大樹の視線の先からロープを来た男が出てくる。寸前までそこに人がいることに気がつかなかったエヴァは、ビクリと身構えたが、大樹から視線を向けられまた気を落ち着ける。

「心配するなエヴァ。さっき言っただろう、『無事に逃がしてやる』と。何人いようが俺には敵わんさ」

「なっ、貴様いつ伏兵に。認識障害は完璧だったはずだっ！」

「同じことを二度も言わせるのは二流のやることだよ、魔法使い殿。何度も言わせないでくれ」

「…気付かれていたなら話は早い。仲間の魔法使いが近くに伏せている。そこにいる吸血姫エヴァンジェリンを我々に引き渡せばお前

は見逃してやる。さあ、我々正義の魔法使いにその化け物を寄越すのだ！」

それを合図に二人の周囲から敵意の混ざった魔力が立ち込める。どうやら包囲は終わっているようで、エヴァはおろおろしながら大樹を見つめている。

一方、大樹はやれやれといった表情で男を見つめた。

「言うに事欠いて助かるために子供を差し出せ、か。お前らは…二流決定、だっっ！」

言い終わると同時に瞬動で男の懐に入り込んだ大樹は掌底を打ち、男を吹き飛ばす。同時に逆の手でエヴァにむけ結界符を投げつけ、守護結界を張る。張った結界に周囲から魔法の射手が乱れ飛ぶが、結界の前に全て阻まれた。

「エヴァ！その結界の中に入っている。大丈夫、すぐに終わらせる」

そう言って手元の陰陽符から八角棍を呼び出し別の方向に突き込む。うめき声が上がリ気配がひとつ消えた。

「ちっ、結界に守られた吸血鬼は後にしろ！男を先に殺せっ！」

「甘いな、殺すと言った時には、もう相手を殺しているべきだ」とど

こかのマフィアも言っているぞ」

再び瞬動で接敵し足を払い、地面に倒した相手に震脚を叩き込む。胃液を吐き出し痙攣し意識を失ったようだ。そこに別の方向から数多の属性の魔法の射手が降り注ぐが、陰陽術で全てを散らす。

「な、魔法の射手を無効化しただと！」

「なんだあの術は！あんな技術はわれらの魔法にないぞっ！」

「全てのモノは五行に通じ、特定の属性で弱体化できるのさ。五行思想は西洋魔術に存在しないのかね？」

言っと大樹は雷令符を取り出し力を込める。

「さて、本当の雷というものをお見せしよう。急々如律令！雷令符よ、その力を示せっ！」

周囲に強力な電撃を放ち、魔法使い達を黒こげにする大樹。遠くの敵には雷、近くの敵には拳法と棒術、死角のない攻撃に魔法使い達はほとんど数を減らし、ついには一人になった。もちろん、大樹の体にはかすり傷ひとつない。反撃の魔法の射手は全て陰陽術で無力化され、接近戦に不得手な魔法使い達は大樹に近づくこともできなかったのだ。

「さあ、オシオキの時間だ。覚悟はしたかな？」

「くつ、貴様一体何者だ！なぜ吸血鬼をかばう！そのガキは化物の一員だぞ！」

「ふん、化け物か。自分と違う存在は全て異端とでも言うのかね。存在することが罪なんてことはこの世界にはないんだよ」

霊力を八角棍に込め、相手に突きつける。ヒィとうめき声を上げ、魔法使いは怯えだす。

「そして、自分より圧倒的な強さを持つ存在には怯えて声も出ないか。子供の喧嘩と同レベルだな。…もう休みたまえ」

言っと八角棍を顎先をかするように当てる。脳を揺らされた魔法使いは気を失い崩れ落ちた。

八角棍を符に戻し、エヴァのほうに向き直り、結界符を解除する。

「タージュ、みんな殺したの？」

「いや、殺すだけ自分が汚れる。無駄な殺生はしない主義だ。さて、見つかった以上これ以上の面倒は避けるべきだな。こっちへおいで、エヴァ。少し移動するぞ」

そういわれたエヴァは、少し思案顔をし、何かを閃いたようだ。
大樹の背中に周り、負ぶさる。

「…どうした、エヴァ？」

「それでも私はレディーなの。荷物みたいに抱えられるのは嫌よ」

「承知しました、お姫様（yes, your highness）」

そう言った大樹は背中に抱きついたエヴァを抱かかえた。所謂、お姫様抱っこの体勢である。

あっけに取られてなすがままにされたエヴァは自分の体勢に気付いて顔を真っ赤にして慌てた。

「なっ！タージュ、なにをするのっ」

「なに、レディーを称するエヴァには相応しいだろう？」

頭から湯気をだし真っ赤になったエヴァは黙ってしまった。おんぶは良くてもお姫様は恥ずかしすぎるらしい。

「さて、移動するからしっかりつかまっているよ」

SIDE エヴァ

追っ手をタージュが叩きのめしてから、私はタージュに…その…お姫様抱っこをされて移動した。しっかり捕まっていると言われたのでタージュの首に両手をかけて姿勢を固定する。

ずっと抱かかえて重くないのかな。もし重いつて思われていたらどうしよう。

そんなことを考えているうちに随分時間が経っていたみたい。タージュに声をかけられて地面に下ろされちゃった。

…もう少しこのままいたかったのは私の我侭なんだろう。

そのまま夜営の準備をしたタージュは、懷から紙切れを何枚かとりだし、周囲の木に貼り付けてた。

結界符、というらしい。何をしているのか聞いた。この符を周囲に張ることでその領域の中の存在を周囲から隠すらしい。これなら魔法使いにも見つからないからゆっくり休んで、明日答えを聞かせてくれと言われた。

そう、明日には答えを出さないといけない。タージュと別れて平穏無事な生活をするか、タージュについていき一緒に旅をするか。平穏無事な生活…吸血鬼になってから二度と取り戻せないと思っていただけ、また手に入るのだろうか。

でも、せっかくタージュに会えたのにまた別れるのは…すごく寂しい。抱っこしてもらえたとき、お父様を思い出してしまった。タージュはお父様よりも見た目はぜんぜん若いのに。変な私。

平穏な生活と、お父様みたいな人との繋がり。夜が明けたらどちらかを選ばないといけないんだ。
私は横になりながらずっと考えていた。

気付いたら寝ちゃったみたいで、朝になってタージュに起こされちゃった。よだれとかたらしでなかったかな。

近くの川で顔を洗つてくると言つて、タージュと別れる。
よし、決めた。私は…

S I D E E N D

「眼は覚めたようだな、エヴァ」

「うん、さっぱりしたよ」

「魚を捕つてきてある。朝食の後に答えを聞こうか？」

「ううん、今でいいよ。私はタージュについて行くよ」

「そうか。平穏無事な生活はいいのか？二度と終われることはない
と保証するが」

「もう一人は嫌なの。タージュは何年も一人でいた私を助けてくれた。また一人にはなりたくないよ」

「…そうか。じゃあ、これからエヴァは旅の友だな。改めてよろしくだ。エヴァ」

「こちらこそよろしくお願いします、タージユ」

大樹はエヴァを連れ、その後ヨーロッパを連れ歩く。真祖の吸血姫と火眼の従者の噂が魔法使い達に広がるのはもう少し先の話。

第6話（後書き）

大樹は エヴァンジェリンに 父性フラグを立てた！

実はヒロインはもう決めていたり。というか元々エヴァを連れる予定は無かったんですが。

エヴァは今後大樹の盟友として原作開始まで進める予定。

今回はエヴァの修行パートかな。原作では西洋魔術に合気柔術だったけど、さてどうしよう…

第7話

S I D E 大樹

エヴァが俺と共に旅をすると思った。逃亡者生活が長かったみたいだし、東方可選を選ぶと思っただが。どうやら一族を殺されて以来よっぽど人の温もり、繋がりに飢えていたみたいだな。しよっちゅう俺の背中によじ登って甘えてくるようになった。かわいいもんだ、もし子供がいたらこんな感じなのかね。

もつとも、甘やかしてるだけじゃエヴァのためにならない。例えば見た目がどれだけ幼かろうと、エヴァは吸血鬼だ。何もしなくとも追っかけてくる無粋な連中が湧いてくるだろう。俺にできることは、エヴァが自分の意志を貫けるような力をつけさせることだ。俺がいなくともエヴァが生きていけるように。まあ、投げ出すつもりは全くないが、万が一だつてあるかもしれないだろ。

S I D E E N D

S I D E エヴァ

タージュと共に旅を始めてからある日のこと。タージュが私に修行を付けてくれるようになった。

「いいかいエヴァ。俺は君を守っていくつもりだが、どうしてもで

きないことだつてあるだろう。想定外の事態なんてたやすく起こりえるんだからね」

そうなのかな、タージュが誰かに負けたりするのなんて想像できないんだけど。それだけタージュの戦闘力はすさまじいと思った。初めて助けてくれたときのあの動きはともきれいだったもの。

いろんな方向から飛んでくる魔法の射手を、時には避け、時には霊符でちらして無力化していた。そして一瞬で近づき一撃で倒す。まるで御伽噺のようだったから。

そうタージュに伝えたけれど、タージュは苦笑していた。

「そうじゃなくても自分の身くらい自分で守れるようにならねばな。俺に守ってもらうだけのお姫様じゃないだろう、エヴァは」

…確かに。もしタージュが私のせいで怪我したり、死ぬようなことになったら。

そう思うと目の前が真っ暗になった気がして、頭を振って嫌な想像を追い払う。

タージュの足を引っ張りたくない。せめて自分の身は自分で守れるようにはしないと。

こうして自分を鍛える決意をした私は、タージュの修行を受けることにしたのだった。

S I D E E N D

「さてエヴァ。吸血鬼っていうのはそのポテンシャルは普通の人間を大きく超える。腕力はもちろん魔力もだ」

「そうなの？でも私ぜんぜん強くないよ？」

大樹はエヴァに吸血鬼の力の講義をし、自分の力を受け入れさせることから始めた。自分に眠る力を認めなければ使いこなすことなんてできないからだ。吸血鬼の腕力ならば大抵の人間は一撃で飛ばせるだろうが、今のエヴァはその力を使いこなせていない。そこで自覚を促し実践をさせる。そうすることで力を使いこなせるようにするのだ。

「それは無意識に力を抑えているからだな。自分が吸血鬼ということを受け入れるんだ。吸血鬼であること自体は悪いことでもなんでもないんだからな。自分の力をちゃんと把握することから始めよう」

こうして座学をしてエヴァに眠る力を認識させる。時には自分のマナ制御の力でエヴァに外気を流し魔力の流れを認識させたり、体づくりをさせたりしながら。

ある程度の体力がつき、徐々に力の制御を覚えてきたエヴァに、次に大樹が教えたことは化勁であった。

化勁とは中国武術の極意のひとつで、相手の攻撃力を吸収したり、ベクトルを操作し受け流す技術だ。これを極めれば物理的な攻撃は一切当たることがなくなり、カウンターをしやすくなったりと応用も利く。組み

手をして実技を教えることによってエヴァはどんどん技術を吸収

していた。

一方エヴァンジェリンも魔法使いの使う魔法を見よう見真似で練習しだした。幸、吸血鬼の莫大な魔力と、大樹との修行で魔力の運用によって基礎だけはできていたので魔法の射手は簡単にできた。大樹は西洋魔法を使えないので独学で魔法を開発し、大樹との組み合わせで実践していく。

こうして、旅をしながらエヴァの修行をつけ、時には追っ手を片付けている生活を数年続けていた。いつの間にか大樹の首には賞金がかかり、『火眼の雷帝』『吸血姫の従者』といった二つ名もついた。魔法使い共は吸血鬼であるエヴァよりも得体の知れない大樹のほうに脅威に映ったのか、『吸血姫』本人よりも賞金額が上なのは笑ってしまったが、大樹としてはエヴァの弾除けのなっていると思っただけで特に思うこともなかった。

大樹が見逃していたことは二つあった。

ひとつは魔法使いどもが手段を選ばないということ。

もうひとつは、狙う対象が自分だからといってエヴァが安全だとは限らないということである。

「今日はこの村で宿を取るぞ」

「久しぶりの村だね」

「ああ、たまには宿を取るのもいいだろう」

俺とエヴァは旅商人を装い、いろいろな村を巡っていた。数日の宿を借りたり日用品を入手したりするのに、商人という身分は実に都合がいい。幸い野宿の最中に野生動物を狩り食用にしていたのでそれを売り所持金にもできた。

今夜の宿を決め、エヴァを留守番にして俺は買出しに向かう。エヴァの見た目は十歳の少女で、しかも貴族のように綺麗な髪をしているので非常に目立つ。そのため買出しはもっぱら俺の役目になっていた。俺は赤い眼さえ隠せば目立つ風貌じゃないからな。

「さーて、これでめばしい買い物はおわったな、っと。宿に戻るとしようか…」

今後のことを考えた保存食やらを買い終え宿に向かう。もう少し歩けば宿はもうすぐだ。エヴァはちゃんと留守番できてるだろうか。どうせ魔力の運用の練習をしているんだろうけど。

そうして歩いていると、濃密な魔力の残滓を感じた。嫌な予感に襲われた俺は宿に向かって瞬動を駆使し最高速度で自分のとまる予

定の部屋に向かう。扉を開けるといつもならエヴァが笑顔で迎えてくれるはずが、むせ返るような血の臭いに包まれる。部屋には誰もおらず、壁には血文字で（おそらくエヴァの血だろう）効果かれていた。

” 深夜、東の森の奥にて待つ。来なければ吸血姫の命は無いと思え”

自分の油断に愕然とした。魔法使いの標的が自分だからといってエヴァに何もしないとは限らないはずなのに失念していた。

「魔法使い共め、ここまで手段を選ばないか。いいだろう。望みどおり向かってやる」

但し、死ぬのは貴様らだな。

S I D E E N D

深夜、村の東の森の奥。多少開けた場所の太木にエヴァはいた。その両手は杭を打ち付けられて固定され血を流し続けている。人形のように端整だったその顔はアザだらけで見る影もなかった。おそらく魔法使い達に拷問を受けたのだろう。

「ううっ…」

「ほう、目が覚めたか。このまま死ぬかと思ったが。やはり吸血鬼とおmなるとしぶといな」

「…痛いよ。タージユ…助けてえ」

「安心しろ。見捨てられてなければそろそろ森に現れてもいいはずだ。おいっ！封印結界の準備はどうだ？」

「はい、さきほど完了しました。これで周囲50m以内の魔物は魔力を封印されます」

「よし、これで準備は整った。奥の手も準備してある。なんとかしてもここで化け物をしとめるぞ！」

そう言って周囲を鼓舞する指揮官の魔法使い。周囲の森には封印結界をしき、魔法使い300人が配置されていた。なんとしてもここで大樹とエヴァを殺し、正義を知らしめようとしていた。

そのころ大樹は呼び出された場所を目指して森を歩いていた。

「むっ！」

ある程度進むと急に自分の霊力が押さえつけられるのを感じた。
封印結界の効果範囲に入ったのだ。

「結界の一種か。準備は万端つてところだな。…面白い。誰に喧嘩
を売ったか思い知らせてやる」

エヴァは朦朧としていた。両手には不死殺しの魔力を持った杭を
さされ出血が止まらず、魔法使い達に何度も殴られたのだから当然
だったが。そんなエヴァの耳に普段聞き慣れた、自分にとってただ
一人希望をくれる人の声だ。

「待ち合わせには間に合ったかな？」

「…タージュ」

「ああ。まだこの吸血鬼は生きてるぞ。今にも死にそうだがな」

エヴァはうつすらと目を開けて声のした方に視線を向けた。そこ
には予想通り大樹の姿があった。大樹はエヴァに視線を向けると目
が合う。すると大樹は安堵の表情を浮かべエヴァに声をかける。

「よかった、エヴァ。まだ死んじやいないな。少し待ってる。こい

つらを片付けて手当てをしてやるから」

「タージユ、来てくれたの…ありが「五月蠅いぞ、吸血姫!!」ガハッ!」

大樹に答えようとしたエヴァを回りの魔法使いが蹴りつけたのだ。口から血を吐き再び意識を失ったたエヴァ。大樹の気配から怒気と殺気が膨れ上がった。

「今すぐエヴァを解放しろ。今ならまだ半殺しで許してやらないこともないぞ」

「化け物風情が何を言うか。この吸血姫も貴様もここで死ぬのだよ。全員、詠唱始め!!」

指揮官が号令をかけると、周囲から一斉に魔力が立ち上がり収束され始める。

「最後通牒だ。エヴァを解放しろ。さもなきゃお前ら。一族郎党皆殺しだ」

「ふん。今から唱える魔法は広範囲殲滅魔法。封印結界の中にいる貴様らじゃ耐えることは不可能だ!おとなしく死ぬがいい」

「そつか…」

大樹は会話を諦め、魔法使い達は魔力を収束させ終わったのか、呪文詠唱に入った。

「『契約に従い（ト・シュンボライオン） 我に従え（デ
イアーコネート・モイ） 炎の霸王。ホ・テュラネ・フロコス 来れ（エピゲネーテート）
フロクス・カタルセオースフロギネー・ロンファイア
浄化の炎 燃え盛る大剣』」

周囲の温度が徐々に上がっていく中、大樹は微動だにもせず切り札を切る準備をする。

「…拘束制御術式。一番、二番、三番、開放」

「『ほぼしれよ（レウサントーン） ソドムを（ピユー
ル・カイ） 焼きし（ティオン）。火と硫黄 ハ・エペフレゴン・ソドマ 罪ありし者を（ハマ
ルトートウス） 死の塵に（エイス・クーン・タナトウ）。燃える
ウーラニア・フロゴシス
天空！！！！』」

「これで終わりだ、死ね化け物！！！！」

呪文がつむがれ、魔法が発しようとしたその瞬間、大樹が言葉を重ねる。

「封印されし深遠の暗闇よ。全てを飲み込め」

瞬間、大樹の影から暗闇が広がった。広がった闇は周囲の空間ごと発動しようとしていた魔法を飲み込む。飲み込まれた魔法は炎を呼び出す間もなく魔力に還元され周囲に霧散していった。

「なっ、なんだこれは！全員、押されるなっ！魔力を振り絞れ！」

「やってます！ですがっ！」

指揮官の怒声に反応する周囲の悲鳴交じりの声。言葉のとおり、魔法使い達は全力を挙げて魔力を込めた。だが、魔力を高めようにも周囲に霧散してしまうのだ。やがて魔法は発動せず失敗に終わり、指揮官はひざをついてしまった。

「何故。何故魔法が発動しない！貴様一体何を「ギヤアアアアア！」何事だっ！」

「しゅ、周囲の味方の魔力がどんどん消えています！10…18…26…30！まだまだ減り続けています！」

あわてた指揮官は自分も周囲の魔力反応を探す。300人いた自分の味方はすでに50人以上減っていた。そこへ大樹の声が響く。

「お前ら全員、俺の闇の中に隔離した。さあ、オシオキの時間だ」

「くっ！ひるむなあ、応戦しろ！！！」

指揮官は恐慌状態半ばで叫び、我に返った魔法使い達は魔法の射手をはじめ、雷の暴風、紅き焰などで応戦しようとするが

「なっ、魔法が発動しないぞ！」

「こっちもだ！」

「魔法の射手！…魔法の射手！！…駄目だ、一切魔法が発動しない！！！」

あちこちで魔法使いの悲鳴が聞こえ、さらに気配が消え続けていく。そして再び大樹の声が響く。

「無駄だ。俺の闇の中ではあらゆる魔力が周囲に霧散される。貴様らはもはや死ぬのを待つしかできないのだよ」

ある者は心臓を八角棍に貫かれ、ある者は手刀で首をはねられた。発動を受けて内蔵をズスタにされた者もいた。いつしか指揮官以外の反応は消え失せ、指揮官は途方にくれていたが、切り札の存在を思い出して懷に手を伸ばそうとした。が、

「一応言っておく。貴様の懷で魔力を発している魔法具も無駄だ。この空間では一切魔力は存在できないからな」

大樹に言われ、それでもと魔法具に魔力を通そうとするがもちろん発動しなかった。こんどこそ指揮官は恐慌状態になった。

「安心しろ。貴様はすぐに殺さない。聞きたいことが山のようにあるからな。貴様らの組織、所在地、西洋魔法使いどもの知識。全て吐くまで楽には死なせない。言っただけだ。一族郎党皆殺しだ」と

「なっ！家族にまで手を出すというのか！この悪魔があー！！」

「俺の家族に手を出したのはそっちが先だし、俺は『化け物』なのだろう？」

「……うう、うわあああああー！！！」

叫び声を上げ、逃げ出そうとする指揮官。その首元に衝撃が走り意識を失ったのはその直後だった。

数カ月後。魔法世界、MM連合へつながるゲート。

そこに300の死体が一通の便箋と共に届けられた。便箋にはた

だ一言、”次は貴様らの順番だ”と書かれていた。

すぐさまゲート職員は人を呼び死体から情報を引き出そうとしたが、すぐさま断念した。

全ての死体は眼球がくり貫かれ、脳が破壊されていたのだ。

その後数年に渡り、M M連合の魔法使い達は壊滅的な被害を受けた。一部の元老院にも被害が及んだこの事件は火眼の雷帝の名前を禁忌とし、口に出すのも憚られた。そして彼には5000万\$の賞金がかけられたが、誰も狙おうとはしなかったという。

第7話（後書き）

完成して投稿しようとしたらサブタイトル入れ忘れて全文消えるという事件がorz
書き直すのに二時間かったよ…

大樹激怒するの巻。

身内を狙うような行動をされて激怒したので報復に暴れまわりました。

正義の魔法使い涙目w

中国式の拷問だとかなんだとか駆使して一族郎党抹殺です。

この後の展開は

？アリアドネーに身を寄せる

？ヘラス帝国に身を寄せる

？独立勢力を立てる

のどれかだと思います。まだ考え中。

それではまた。

第8話（前書き）

またキングクリームゾンします。
それではお楽しみください。

第8話

SIDE エヴァ

気付いたら私は暗闇の中にいた。周りを見ても何も見えず、何も聞こえない、本当の闇。

「私、どうしてこんな場所に…？」

私は何をしていたっけ。確か、タージュと一緒に旅をしていたはず。初めて会ったときからずっと優しくかった。私が抱きついたり、おぶさったりすると、しょうがないなって顔をして頭を撫でてくれた…

（時々からかってお姫様抱っこもしてくれた…）

そうだ、確か旅の途中で村の宿屋に泊まったんだ。それでいつもどおり私がお留守番している間にタージュは買い物をしてくる。『いつもどおり』の日常だった。

ズキッ！

「うつ…」

頭が痛い…なんだろう、記憶が曖昧だ。思い出さないと、いけない気がする。

思案にふける。幸い何も見えない聞こえないこの場所にいるなら他にやることもないし。

ひたすら考え込んでいる。ふと両手を見ると、手の平の真ん中に傷跡があった。

「なんだろう、この傷。私こんな傷…っ！」

思い出した。魔法使い達に捕まったんだ。それで不死者殺しの杭を両手に打たれて、殴られたりして。

気を失っては顔を殴られて目が覚めて。そしたらまた殴られて…

何回か繰り返してたらタージュが助けに来てくれたんだ。そこから記憶がない。

…その後どうなったんだろう。今生きてるってことはタージュが助けてくれたんだろうけど。でも魔法使い達は大勢いるって言ったし。

タージュは無事だったのだろうか。

そこまで考えると再び頭痛に襲われ、意識を手放す。

次に意識を取り戻すと、目の前には知らない天井。周りを見回すと見たことのない部屋。

ゆっくり体を起こして体を確認してみる。頭にはどうやら包帯が巻

かれているみたい。ペタペタ顔を触ってみたけど特に変な感触もない。

（散々殴られたけど、顔は無事みたい）

手の平を確認してみると、やっぱり傷跡はあった。夢の中で確認したことは夢じゃなかったらしい。それでも…

「……タージュはどこ？」

やっぱり、いつも一緒にいた人が目が覚めたときにいないと、『あの時』を思い出してしまうから。

ベッドから這い出てタージュを探そうとすると、ノックの音がしてタイミングをあけて女の人が入ってきた。

「入りますね、エヴァさん。……って目が覚めたのですかっ！！」

女の方は驚きの声をあげ、回れ右をして走り去ろうとした。そこでふと思い出したようにこちらに視線を向けて

「タージュさんと呼んでまいります。絶対安静ですからベッドから出ないように」

そついうと今度こそ走り去っていった。

数分後、ノックの音が響き、タージュがきてくれた。

「ようやく起きたか、エヴァ。心配したぞ」

ちよつと低くてよく透る声で話しかけてくれる。私もようやく安心できた。タージュがいてくれた。『あの時』とは違うということがようやくわかったから。

S I D E E N D

あの魔法使いの一件から数年。エヴァがようやく眼を覚ました。急いでエヴァが寝ていた部屋に向かった大樹は、部屋の前でいったん立ち止まる。深呼吸を数回し呼吸を落ち着けてからノックをし、ドアを開けた。

「ようやく起きたか、エヴァ。心配したぞ」

そう、大樹は本当に心配していた。不死殺しの杭の力か、エヴァはあの時から数年の間眠り続けていたのだ。

魔法使い共を皆殺しにした後、死体と捕虜を影の中に保存し、意識を失ったエヴァを大樹は治療した。仙域にいたときに作った仙丹などを使えるだけ使い、両手の傷以外はある程度治療できた。しかし

そこから問題だった。エヴァが一向に眼を覚まさなかったのだ。仙丹でも直らないとなると西洋魔法に頼るしかないが、大樹にはその伝がない。途方にくれた大樹は捕虜を尋問し有効な情報を探った。そこで出てきたのが、学ぶ意志のある者なら誰であろうと受け入れるという魔法学術都市アリアドネーである。

すぐさまゲートの位置を特定しアリアドネーへと向かった大樹は、魔法騎士団総長に面会を希望した。自分の家族が眼を覚まさない。それを目覚めさせるための魔法を学びたい、と。総長は大樹とエヴァから人ではない気配を感じたが受け入れを決めた。大樹はエヴァを入院させ、自分は治療魔法の習得を始めたのだった。

ソレと平行して大樹は捕虜の尋問を行い、あの正義の魔法使い達が魔法世界のMM連合の命令で動いていたことを突き止めた。捕虜からほしい情報を全て入手した大樹は息の根を止め、死体の脳と眼球を破壊。頭部から一切情報を得られないよう細工をした上でMM連合管理下の旧世界側ゲートにメッセージを添えて届けた。

そして大樹は、アリアドネーでの治療術の習得とMM連合での復讐をこなしていった。魔法使い達の家族を始め、命令を下した上司、そのまた上司等々命令を下した系統を上から下まで殺しつつ、最終的には化け物に対して排他的な意見を言う元老院の人物までもその手にかけた。

死体の脇には必ず『火眼の雷帝』の名を記したカードを置いて恐怖心も煽り徹底的にやったのだ。

それが終わったところには『殲滅者』なんて物騒な二つ名が増え、懸賞金がDEAD OR ALIVEで5000万にもなっていたが、ともあれ復讐をやりつくしようやくアリアドネーに腰を落着け、治療法の研究をしていた。

そのようないきさつを（復讐の辺りはややばかしながら）エヴァに説明する大樹。エヴァはとても心配をかけたのだと平謝りするのだった。

「感動の再会のところ申し訳ないのですが、少しよろしいですか？」

ノックの後に入ってきたアリアドネー総長が大樹に声をかけた。大樹は総長の方に向き直り、姿勢を正す。

「…俺を捕らえにでも来たのですか、総長殿？」

「その様子だと、貴方が『殲滅者』で間違いないようですね」

総長は大樹がアリアドネーに来てから、内密に彼らの招待を探っていた。吸血姫と火眼の雷帝ということは早い段階にわかったのだが、その時点でまだ大樹は復讐を行っていなかったので軽い用心にとどめていたのだったが、『殲滅者』の名前が出てきたころには内心焦っていた。彼がここにいることがわかったらMM連合との関係に対する爆弾にしなければならないのだから。

「安心してください総長殿。エヴァが目覚めた以上、俺はここを出るつもりです。ただ、ひとつだけお願いがあります。エヴァをここにおいてやってほしい。彼女は西洋魔法の才能がある。ここで学ばせてやってほしいのです」

「…それで、聞き入れられない場合は『殲滅者』が動き出す、とでも?」

「……あれはエヴァに拷問をした事に対する報復なんですがね。そもそも俺は自身と身内に手を出さなければ基本不干涉を貫きますよ」

「そうですか。それでは、彼女をここに置くことに対する対価はありますか?」

「そうですね、もしMM連合が再びエヴァを捕らえるなんてことがあれば、『殲滅者』が再び現れる、というのはエヴァをダシにした外交に対するカードになるでしょう。それに関する俺の魔力をこめたカードを貴方に預けますので、何かあったらそれをMM連合に提示するといい。それと、一度だけアリアドネー政府の命令を受けましょう。ただし、俺の身内にたいする敵対行動以外ならばという条件ですが。MM連合を相手に勝てる個人戦力の行使権。この二つをもって対価としたい。よろしいでしょうか?」

総長は思案に入り、数秒後顔をあげ、強制証文をつけた上でなら、という条件で了承した。すぐさま強制証文を準備しサインをした大樹に、総長は一週間以内の退去を命じて部屋から出て行った。

「いい加減機嫌を治してくれないかな、エヴァ」

「……………」

先ほどの総長との話し合いが終わり、エヴァのほうに向き直ると泣きそうな顔をしたエヴァがそこにいた。それから、俺が何を話しかけてもうんともすんとも反応がない。間違いなく自分を置いていく俺に対して怒っているんだろう。怒り方がかわいらしいのは、俺がエヴァを娘みたいなもんだと思っているからなんだろうかねえ。

「エヴァ、現状では俺と別れて行動するのが最善だ。そこに関しては理解しているのだろう？」

エヴァは数秒してからコクンとうなづいた。やはりな。エヴァの頭の回転は実はとても速い。俺のここ数年の行動と先ほどの総長との会話でその結論が最善だということは理解している。

ただ、感情の面で納得できないのだろうな。俺との繋がりがなくなることをとてども恐れているのは十分知っているつもりだったが。馬鹿な子だ。別れるだけで俺との縁がなくなると考えている辺り、情緒はまだまだお子様だ。そこがまた可愛いんだがな。

「…エヴァ、ひとつ質問なんだが。君は俺がエヴァを捨てるとでも思っているのか？」

言われたエヴァは今にも泣き出しそうな顔をしてこっちを見つめる。ピンゴか。だったらそうじゃないってわからせないといけない。そう、俺はエヴァの保護者なんだから。

「馬鹿だな。いや、十歳らしいと言つべきなのかな、この場合は」

「……十歳じゃないもん。もう何十年も生きてるもん」

「精神は肉体に引つ張られるらしいぞ。ソレはともかくだ。俺を見くびらないでほしいね」

「…？」

顔に疑問符が浮かんでいるぞ、エヴァ。まだわからないのか。

「…ふう。数年以上面倒を見た子供を放り出す親がどこにいる。口には出してなかったかもしれないが、もう俺は君の父親のつもりでずっといたんだがね。君はそう思っていなかったのかな？」

「…私を捨てるんじゃないの？」

「逆に聞くが、どこの世界に子供を捨てる親がいるのかな。親は子供に愛情を持つものだとおもうがね」

…少し時間を置いて、涙腺が決壊したエヴァが俺の胸に飛び込んできた。全く、世話が焼ける娘だな。

背中に手を回し、軽く抱きしめてあげると、ますます泣き出すエヴァ。しばらくはこの姿勢のまま、か。

S I D E E N D

目覚めた日から、エヴァは父親に甘える子供のように大樹に甘え続けた。もう捨てられるとは思っていない。思っていないが、今までも多少でも遠慮しながら甘えていた時とは違う。今はお互いが『親子』だと思っていると伝え合ったわけだ。今までの分を取り返すように甘え続けるエヴァは、見た目同様本当に十歳にしか見えなかった。

そして、一週間が経ち、大樹の出発の日。エヴァは少し寂しそうだが笑顔で見送りにきていた。

「それじゃあ俺は出発するが。西洋魔法の勉強、頑張れよ?」

「大丈夫だよ。今度会うときは、タージュの横に並べるよう頑張るから」

「そうか。俺からここには迎えにこれないから、修行が終わったら…そうだな、この霊符の指し示す方向に進むと以前俺がいた仙域にたどり着く。そこにいる俺の老師を訪ねるんだ。定期的に老師の下に行くようにするから、いつか会えるだろう。それでいいな?」

「うん、わかった」

大樹は霊符を渡し、エヴァを抱き上げる。

「それじゃあ、また遭おう、わが娘」

「うう…##」

初めて面と向かって大樹に娘と言われて顔を真っ赤にして大樹をにらむエヴァ。最後にエヴァをからかえて満足した大樹は、エヴァを下ろしアリアドネーを出発したのだった。

第8話（後書き）

と、いうわけでアリアドネーにエヴァを置いて別行動でした。

自分の意志で行動するのを心がけている以上アリアドネーに所属はしません。

あくまで自分の意志で自分の行動を決められる立場になれるよう話を書いていきたいと思っています。

それでは、また。

第9話

グギヤアアアアア

大樹の目の前には漆黒の鱗に包まれた100m以上の体躯の巨大な龍が迫っていた。

「…ふうー。破ア!!!!!!!!!!」

その鼻先に拳を打ち下ろし、龍の頭部を大地に減り込ませる。逆の手に瞬時に八角棍を召喚、無防備になった首に向けなぎ払い、あお向けに体勢を崩させる。瞬時に距離をつめ、神速の連続突きを腹に叩き込む。流れるような連続攻撃に龍は背の翼をはためかせ空中に逃げ出した。

龍が距離をとったのを見た大樹は獰猛な笑みを浮かべ、得物を持った手を大きく振りかぶる。マナを全身に供給し、爆発的な力を込め、そのまま龍に八角棍を投擲した。ジャイロ回転がかかった棍は、龍の右の翼を貫き、そのまま遠くに飛んでいった。

翼に穴の開いた龍は、そのまま墜落した。もはや虫の息である。

「さて。申し訳ないがその角を折らせてもらおうか」

大樹はアリアドネーでエヴァと別れた後、ケルベラス大樹林でレジヤ―ハンターをしていた。MM連合は報復を恐れて『殲滅者』を賞金首にするだけで放置していたし、賞金稼ぎ達もたった一人でMM連合の元老院にまで手を伸ばした『殲滅者』を狙うほど命知らずじゃない。とは言え、『殲滅者』という名前が売れすぎていて連合の勢力圏だと過ごしにくく、国内にいただけで連合との火種になりかねない大樹は人里離れたここ、ケルベラス大樹林で古代遺跡の発掘、修理をしたり、周囲の魔物を修行がてら退治していたのだ。

もつとも、殺してしまうと生態系が狂ってしまうので、大怪我を負わせて無力化させるにとどめていたが。

倒した魔物の中には1000年級の古龍だったり、巨大な魔狼など某MHな魔物もいたが、大樹は片っ端から自分の中国武術と仙術でなぎ倒し、魔物の部位を周囲の村々に卸して生活していた。

ちなみに彼の名前だが、『殲滅者』が吸血姫の従者であることはある程度知られていたが、名前に関しては二つ名以外一切使わなかったのではおらず、いい機会なので偽名を名乗るようにしていた。"タージュ・ヴァレンタイン"、それが魔法世界での彼の名前である。

今回の依頼は、医薬品の材料になる黒龍の角だった。そして話は冒頭の黒龍討伐の場面へと戻る。

大樹は黒龍の角を担ぎ、集会所のある村に向かい角を下ろした。どうやらあの黒龍はかなりの大物だったらしく、角の質もよかったらしい。換金したらかなりの額になった。

この生活をはじめてからかなりの年月が経っていた。魔法世界なら長命種がいるため数十年程度じゃ見た目が変わらなくても特に問題がないため、大樹はすでに百年単位でこの生活していた。多分200年は経っているが、300年まではいかにくらいであろう。

「ふむ。そういえば旧世界ではそろそろ19世紀か…。そろそろあつちに戻ってもいいかもな」

数百年もたてばMM連合側のゲートはともかくヘラス帝国側のゲートの監査は緩んでいるはずだと大樹は考える。一応追われている自覚があったのだが、100年単位で時間が過ぎるとさすがにどうでも良くなってくるきたらしい。昔は火眼を隠していたが最近じゃフードしか被っていないかったし。ともかく、その場の勢いで旧世界行きを決めた大樹はヘラス帝国に向かって歩みを進めたのだった。

ヘラス帝国の首都。魔法世界でも屈指を誇る大きさのこの都市に大樹はいた。

「ここまでのくのに、また十数年かかってしまったか。一体なんでこうなったのやら…」

どうせヘラスへ行くのならいろいろ回ってみようということでは首都までのいろいろな都市を回っていた。遺跡発掘都市ヘカテスでは今まで遺跡の発掘、修理を手がけていたがほとんど公に姿を現さなかった大樹が姿を見せたことで、遺跡調査団に囲まれ大騒ぎになったし、自由交易都市グラニクスでは血の気の多い拳闘士と野試合をした。久しぶりの対人戦に楽しくなった大樹は拳闘大会に出場した。勿論火眼は隠していたが。思う存分対戦相手を殴り飛ばしストレスを発散し、ついでに賞金もたんまりもらってウハウハだったりもした。

流石にオステイアは通り道から外れすぎていたので寄らなかったが、それでもいろいろな場所に顔を出していたら意外に年月が経っていたのだ。まあ、不老の大樹からしてみたら急ぐ理由なんて存在しないので気楽なものであったが。

ともあれ、ヘラスの首都に着いた大樹はゲート管理局に向かい、旧世界への転移を予約した。二週間後にゲートが開くということなので、それまで首都を散策していた。

ある日のこと、裏路地を歩いていた大樹。酒場にも行こうとしていたところ、目の前の角から飛び出してきたローブの塊にぶつかった。

「おっと、すまない。怪我はないか？」

「お、おお。大丈夫なのじゃ。妾は急いでおるのじゃ。それでは！」

（む、今のローブの奥に見えたのは、ヘラス族の角だったような…。）

走り去っていく人影を見送った大樹は何故このような裏路地に皇族であるヘラス族がいたのか不思議に思ったが、気にすることでもないかと思い直し、再び酒場へと足を向けた。

酒場に付いた大樹を迎えたのは普段の喧騒ではなく、帝国軍の兵士たちだった。マスターに聞けば、どうやらヘラスの第一皇女、エステルが城から逃げ出したらしい。先ほどぶつかったロープの塊を思い出した大樹は自分のトラブル誘引体質に頭を抱えたのだった。

兵士と酒を飲むのもなんか違うと思った大樹は回れ右をして酒場を出て、宿に帰ろうとしたが、再びトラブルの種が向こうからやってきた。

帰り道の途中でロープの塊が柄の悪い亜人に絡まれているのを見つけてしまったのだ。

「なんでこんなところにヘラス族がいるんじゃない！」

「皇族に連なる高貴な身分にや、この場所は似合わないぜえ」

「何をするのじゃ。妾は急いでおる、手の離すのじゃ」

見かねた大樹は亜人とロープの塊の間に割って入り、ロープの塊をつかんだ。

「どこに行っていた。探したぞ。さあ、行こう」

「ん？妾はお主なんて知ら」（いいから。揉め事起こして兵士に見

「つかりたくなかったらおとなしくついて来い」……おお、そうじゃったな。すまぬ」

そのまま亜人を振り切ろうとした大樹だったが、どうやら酔っ払っていたらしい亜人は大樹のロープをつかみ声をかける。曰く、俺らの話が終わってないのに相手を連れ出すとは何様のつもりだ、喧嘩を売っているのか、と。

相手をするのも面倒くさかったので手刀で首を打ち据え黙らせた大樹はエステルをつれてその場を離れたのだった。

第9話（後書き）

と、いうわけで。テオドラ様のご先祖と出会いました。

予定ではヘラスと関わるつもりじゃなかったのにどうしてこうなったんだろう…

あと二回ぐらいで旧世界に戻り、そのまま大戦編に…入れると良いなあ。

それでは、また次回。

第10話（前書き）

PVとユニークが恐ろしい勢いで増えていてうれしい限りです。
お気に入りも100件突破しました。
皆様の反応、心よりお礼申し上げます。

第10話

エステルを連れた大樹は表通りの喫茶店でどうとコーヒーを飲んでいた。あまりにも堂々としたその態度にエステルはちょっと引いていた…

「一応聞いておくが。妾が追われていることを知っていて、お主は何故このような場所でコーヒーをすすつとるんじゃ？」

「堂々としていれば案外ばれないものさ。あんな裏路地でコソコソ逃げ回っているから捕まるんだ。わかつたら今後に生かすんだな、エステル第一皇女様」

「…やはり知っておったか」

「ローブの影からヘラス族特有の角と褐色の肌が見えていた。それでも周囲には気を配っているほうでね。その直後にエステル第一皇女が城から脱走したという話を聞いたというのもある。もつとも、目の前で絡まれてなければ助けるつもりもなかったんだが…。どうしてお城を脱走しているんだ？」

「…どうしても。どうしても行きたいところがあるのじゃ。父上には何度もお願ひしたが一向に聞き入れてもらえぬ。ならば妾は自分の力でそこに行くしかあるまい」

話を聞いてみると、エステル第一皇女の母上は数年前に亡くなったらしい。その墓はお城の地下にある。だがその墓は表向けのモノで

あり実際の亡骸が納められた墓は夜の迷宮の奥にあるのだとか。
なんでも夜の迷宮の奥にある”唯一月の光が届く場所”とやらは、
母親が大好きな場所だったらしい。生前なんか現皇帝と逢引をし
たり、何かあるとそこに行き月を眺めることが多かった。遺言で
きればそこに自分の亡骸を弔ってほしいとあったので皇帝が極秘に
王墓をこしらえたいらしい。皇帝は子供達が大きくなってからそのこ
とを伝えようと思ったが、側近と話していたところをエステルが聞
いてしまった。ならば一度墓参りをしたいと皇帝に言ったところ、
危ないから却下され。ならば勝手に行く！と今日脱出を試みたんだ
とか。

「父上も冷たいのじゃ。何故妾にそのことを教えないのじゃ！母上
の本当のお墓を一度も弔ってないなんて妾には耐えられぬ！母上の
大好きじゃった花束も用意したからの。早く弔いをしに行きたかつ
たのじゃ」

（夜の迷宮か：あそこには確か最近になって大型の人型魔物がうろ
うろしていたはずだ。おそらく墓周辺には結界を張ってあるのだろ
うが、それでも子供が行くには危険だからってところか…）

「わかったか。なので妾は行かねばならぬ。それが母上の娘として
の勤めなのじゃ。世話になったな、えーっと…」

「自己紹介していなかったか。これは失礼をしたな。タージュ・ヴ
アレнтаインだ。今はヘラス帝国管理のゲートの準備待ちで首都に
逗留している」

「なんと！お主が拳闘大会で何度と優勝を飾ったトレジャーハンタ
ー、タージュか！」

とたんにエステルはテンションが上がる。帝国第一皇女にまでその名前が伝わっている事実には、有名になりすぎたかと大樹は苦笑する。なんでもエステル自身が拳闘大会の大ファンで専門雑誌の定期購読はもちろん、めばしい選手のファンクラブにも入っているとか。もちろんタージュのファンクラブにも入っていて、しかも会員番号が一桁台らしい。コレには大樹も頭を抱えて苦笑するしかなかった。

「…のう、タージュ。ひとつお願いがあるのじゃが」

「夜の迷宮までついて来い、とでも言うつもりか？」

「おお！わかったておったか！それなら話が早い。ぜひ妾と「却下だ」…なぜじゃっ！」

「確かに俺は暇をしているし、護衛をする実力も十分ある。遺跡の探索も手馴れたものさ。だが、子供の鍾は御免こうむる。あの迷宮は危険度A級の遺跡だ。子供一人で向かう場所じゃない。もう一度皇帝陛下と話し合って護衛を付けてもらい、そのとき行けば十分だろう。第一、子供が危険を犯して墓参りをするなんて死んだ母親も喜ばないさ」

見事な正論でエステルを諭す大樹だが、エステルは首を縦に振らなかった。

「……………なのじゃ」

「ん？」

「母上の命日は明日、なのじゃ。しかも明日の夜は満月。月を見るのが好きだった母上のために、満月の命日に、母上の好きだった花束をお供えしたいのじゃ……」

膝の上の手をぎゅっと握り、エステルは自分の思いを語る。その眼には今までにない意志の光を宿しており、涙ぐんでいた。

（泣く子と地頭には敵わない、か。まあまだゲートが開くまで数日ある。ここで付き合うのも一興か）

「……世話になったのじゃ、タージユ。でも妾はどうしても行かねばならん。お願いじゃ、ここはみのがしてくれんか？」

「子供の思いつきや癪癪で言ってるわけじゃないんだな。……いいだろう。護衛をしてやる」

「ほ、本当か！ありがただし、遺跡の中では必ず俺の支持にしたがつてもらっぞぞ？」あ、当たり前なのじゃ。感謝するぞ、タージユ。ありがとう」

ともあれ。エステルをつれて夜の迷宮探索の始まりである。

夜の迷宮・地下一階

夜の迷宮はその名のとおり日の光が入らない地下に作られた遺跡である。遺跡内には昔から住み着いている魔物のほかに、最近では人型魔物の群れが巣を作っていたりしていた。

しかし、暗闇に包まれているかというところというわけではない。常に周囲が薄く発光しており、幻想的な遺跡であった。魔物の巣ができる以前には隠れたデートスポットでもあったらしい。

そんな場所の入り口を、大樹とエステルは歩いていた。大樹の左手には八角棍がすでに用意されており、エステルはその大樹の後ろをついていつている。

「話には聞いていたが、随分と綺麗な場所じゃのう。夜の迷宮とは名ばかりじゃな」

「この遺跡の建材には熱を吸収して発光する鉱物がふんだんに含まれていてな。気温が低くなる代わりに常に一定の明るさが保たれているというわけだ」

「なるほどの。通りでちと肌寒いわけじゃ」

ヘラス帝国は南方にあり、その中でも首都は温暖な気候ですごしやすい。ローブを身に着けているとは言えど外より数度は低いこの遺跡内はやはり肌寒いのだろう。

「まだ地下一階だからこの程度だが、深くもぐればそれだけ気温は下がるぞ。おそらく”唯一月の光が届く場所”というのは地下15階にある月の祭壇のことだろう。そこまでもぐると気温は零度近くになる。防寒具はないのか？」

「妾はまだヘラスの首都から出たことがないのじゃ。防寒具なんてもっておらんのじゃ…」

エステルはげんなりして答える。ため息をついた大樹は、懐を探り一枚の霊符を取り出した。霊符をエステルに手渡す。顔に疑問符を浮かべたエステルに大樹は説明を始めた。

「その霊符は微弱だが結界の効果がある。それに魔力を通せば周囲の寒暖をある程度遮断できるから使つといい」

「おお。寒くなくなったのじゃ。ありがとう、タージュ」

霊符に魔力を通し、笑顔戻ったエステルを見て大樹はエヴァを思い出していた。

（そういえば、仙域で落ち合おうって言ってたな…。まだアリアドネーにいいのかねえ、元気にしてるといいんだが）

何はともあれ、二人は遺跡の通路を進んでいく。しばらく進むとチラホラと魔物が出るようになってきた。まだ上の階層だからか、大型の魔物ではなくファイヤーリザードやバジリスクなどの小物ばかりだったので棍を振りなぎ払う大樹。当たり前だが、ソロで古龍す

ら相手取る大樹の前に小型の魔物なんてひとたまりもないのである。

夜の迷宮・地下五階

遺跡にもぐり、約半日が経過していた。外はおそらく真夜中である。この階層になってようやく中型の魔物やリザードマン、ミノタウロスなどの人型魔物も出てくるようになった。

が、もちろん大樹の敵ではない。ある時は神速の突きで魔物を吹き飛ばし、またある時はなぎ払いでまとめて沈めていた。鎧袖一触とはまさにこのことである。

「タージュは強いう。遺跡に潜ってから傷ひとつ負ってないではないか」

「昔ケルベラス大樹林にいたころは、魔狼や龍種を討伐していたからな。これくらいの魔物じゃ役不足だよ」

雑談しながら棍を振るう大樹にエステルは再び感嘆の声を上げる。目の前で大ファンである拳闘士の戦いが見れるのだから興奮もひとしおであろう。

だがしかし。この場は遺跡である。ちょっとした油断が命取りになる場合だってもちろんあるのだ。

エステルは大樹の後ろに付いていたが、疲れたのか壁に寄りかかった。すると、壁の一部がへこみ、何かのスイッチのような音がした。

あわてて壁から離れるがもう遅い。足元の床が急に開き、浮遊感に包まれる。

「な、なんじゃあああああ……」

「ちっ！トラップにひっかったか！」

駆動音が後ろから聞こえ、すぐさま振り向いた大樹だったが、エステルは叫び声と共に落とし穴に落ち他跡だった。急いで落とし穴に飛び込みエステルを追う大樹。落とし穴の壁を蹴り、自由落下以上の速度で穴を降りていく。すぐにエステルに追いついたが今度は減速しなければならない。

「エステル！俺にしがみつくんだ！」

「わ、わかったのじゃ〜」

右手を伸ばし、エステルを掴んだ大樹は指示をだす。エステルは大樹の胴体にしっかりとしがみついた。両手が自由になった大樹は、左手の棍を壁に叩きつけつかえ棒のようにし減速を始めた。徐々に減速が始まり緩やかな速度になったころには底が見え始めていた。

落とし穴はどうやら侵入者対策のトラップのようで、落ちた先は真つ暗な部屋だった。この部屋には発光する鉱物が使われていないようなので、エステルを地面に下ろした大樹は周囲の気配を探る。

「大変な目にあつたのじゃ。タージユ、助けてくれてありがとうなのじゃ」

ほつとしたのか、たれてるエステルに反応せず、大樹は気配を探り続けている。エステルから見て、気のせいか大樹に苦笑いが浮かんでいるように見えた。

「タージユ、どうかしたのか？」

「…エステル、結界符を渡す。起動させたら一步も動かずじつとしているんだ」

「？。何かまずいことでもあつたのかの」

結界符をエステルに押し付けた大樹は息を整え始めた。気のせいか、周囲の気温がどんどん下がっているように感じる。

再び霊符を取り出し、大樹はタイミングを見て霊符を起動させ明かりを点した。

「なっ！！なんなのじゃこいつは！！！」

「遺跡の主でも言おうか。人型魔物の巣どころじゃない。こんなところに龍樹がいるなんて想定外もいいところだ…」

龍樹。真祖の吸血鬼と並ぶこの世界最強クラスの生命体。そのから

だは植物から構成されており不死身ともいえる回復能力と魔力を持つ。そのブレスは全てを焼き尽くし、咆哮ひとつで小さな村なら消し飛ばすとも言われている。

大樹の目の前にはそういった存在がたたずんでいた。

『王墓を荒らすものには罰を与える…』

念話だろうか、圧力を伴った声が頭に響き、大樹は戦闘体勢をとる。エステルは結界を起動させていたが恐怖に震えて声も出ないようだ。

「…俺達は遺跡荒らしではない。この先の月の祭壇に用があるだけだ。この場は見逃してもらえないだろうか？」

『墓荒らしには…死、あるのみ!!』

龍樹はそう告げると口腔に光を貯め始めた。龍種最強の攻撃、ドラゴンブレスの予備動作だ。どうやら見逃すつもりはさらさらないらしい。

「ちいっ！エステル！隅に移動して体を丸めている！」

言うが早いか大樹は龍樹に飛び掛り、全体重をかけた一撃で殴り飛ばす。

夜の迷宮で怪獣大決戦が始まった。

第10話（後書き）

というわけで、第10話です。

原作開始まであと何話かかるんだろう…

PV40000、ユニーク5000突破しました。前書きでも言いましたが増え方が半端ないです。

これもネギま人気のおかげですね。ありがとうございます。

続きは今日中に書けたらいいなと思っております。
では、また。

第11話

ケルベラス大樹林で戦った龍種と今日の前にいる龍樹の最大の違いは一つ。ケルベラスの龍種は四足歩行で大地を書ける陸上特化のモノが多く、空を飛ぶことは補助的なモノでしかなかった。

しかし目の前にいる龍樹はデフォルトで空を飛んでいる。この差に大樹は苦しみられていた。何しろ高いところにいるため攻撃をするには毎回飛び上がらねばならないのだ。

中国武術は大地を蹴ることによる反作用を拳に乗せて攻撃を強化する。すなわちその本領を発揮するのは地上戦なのだ。今まで飛龍との戦闘経験が少ない大樹は思った以上に悩まされていた。

（まずいな、跳躍を繰り返して攻撃するのはいいが単発過ぎる。相手は龍樹、スタミナの差が激しすぎる。このままじゃジリ貧かつ！）

考え事をしている余裕もほとんどない。何しろ相手は上空から一方的に攻撃できるのだ。結界符による防御や瞬動による回避もそろそろ限界である。虚空瞬動は使えないし、浮遊術は移動速度に問題がある。八方塞だった。

（む、待てよ。確か転生するときの能力で”魔力の具現化”があったな。今までほとんど使ってこなかったから忘れていたが、こいつを活用すれば…）

逆転の一手が見つかれば、後はソレに向かって方針を定めるだけで

ある。ぶつつけ本番だが魔力の具現化を行うことに決めた大樹は深く集中し、目の前の空間に武器を用意してみる。

「……………出るっ！！！」

大気からマナを吸収し、ソレを目の前の空間に大量の刃物として具現化する。狙い通り大量の剣、刀、槍といった武器が展開された。そのまま魔力を強引に込めて龍樹に向かって射出する。

『……………！！！！！！』

突然目の前に現れた大量の刃に竜樹は面食らった。こちらに向かって突き進む刃の雨に咆哮で迎えるが、魔力を推進剤にした刃の全てをかき消すことはできず、その体に突き刺さる。ひるんだ龍樹を見て、再び剣を具現化、投擲する大樹。

（なるほど、視界の中ならある程度の距離まで具現化可能、さらにそのまま滞空させることもできる…ならば）

さらに閃いた大樹は高速で地面を移動し竜樹に接近する。近づかれた竜樹は空中に飛ぶが、

（足場を魔力で具現化し…）

空中に足場を具現化した大樹は飛翔する竜樹に向かって足場を無数に作り、その間を細かく瞬動で動き続ける。大樹の瞬動はあまりにも高速でもはや縮地と言つてもいいレベルである。高速で動き回る大樹に、龍樹は攻撃の狙いを付けられない。

「これで…五分だっ！！！！」

ようやく殴れる範囲にたどり着いた大樹は大きくタメを作り、龍樹の腹に双手突きを叩き込む。

『グギヤアアアアア！！！！！！！！』

たまらず吼える竜樹に追い討ちとばかりに踵落としをぶち込み地面に叩きつける。空中に足場を得ることで戦略の幅が広がった大樹は、動きを止めて地面を見据える。

地面に落ちた竜樹はゆっくりと起き上がり、大樹のほうに首を向ける。周囲に魔力の光が灯り始めた。

「なっ、魔法まで使えるのか！デタラメな生き物め…」

魔力の光が無数に現れ、そこから数百という数の魔法の射手が大樹に向かって降り注ぐ。数が多すぎて全てを陰陽術で対処しきれない

と見た大樹は結界符を起動させ、龍樹に向かって一直線に突っ込んだ。最短距離を移動することで被弾を最小限に押さえ、それでも当たるモノは結界符で相殺するつもりなのだ。

それでも大量の魔法の射手に当たるが、かろうじて結界符に阻まれダメージにはならない。龍樹に突っ込んだ大樹はそのまま体当たりを加え再び地面に埋め込んだ。あまりの衝撃で周囲に瓦礫が飛び散り、粉塵があたりを覆い隠した。

エステルはその戦いをずっと見つめていた。もちろん全てが眼に見えたわけではないが、あまりにもすごい大樹の人間離れした攻防に目が話せなかったのだ。

龍樹は世界最強の生物である。それは身体能力だけではなく、大量の魔力をその身に秘め、その魔力を使い魔法を使える知能。全てにおいて人間風情が対抗できるモノではないのだ。なのに、大樹はその龍樹を、格闘戦で吹き飛ばした。いったいどれだけの力を持っているのだろうか。

「タージユ、お主はいつたい何者なのじゃ。龍樹を一对一で討伐できる人間なんてこの世にいるはずが…」

「エステルか。その様子じゃ無事なようだな」

「質問に答えよ！…妾は始めて人を恐怖した。お主は一体…」

「ふん、この程度なんでもない。古来より人間は全ての生物を差し置いて地上でもっとも繁栄した生物だ。知恵と意志の力があれば、

人にできないことなんて存在するものか。少なくとも、俺は老師にそう習ったぞ」

「言葉遊びをするでない。絶対的な力の差というのは存在する。お主はそれすら覆したのじゃぞ」

（誤魔化されてはくれない、か）

大樹はエステルの疑問を煙に巻こうとしたが断念した。驚愕に満ちている間に誤魔化すつもりだったが、言葉に惑わされない辺り帝国第一皇女たというだけのことはある。

「俺が何者か、ねえ。別に教えてもいいが…俺が旧世界に行こうとしていることは話したよな？」

「…聞いておる」

「教えたことによりゲートの使用ができなくなりさえしなければ教えよう」

「帝国第一皇女、エステリーゼ・ヒュラッセイン・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアの名に懸けて誓おう」

「いいだろう。俺の二つ名はいくつかあってな。『吸血姫の従者』、『火眼の雷帝』、『殲滅者』。これだけ言えばわかるだろう、皇女様？」

「『殲滅者』…200年以上前に、MM連合の魔法使い部隊を300人殺害、その後部隊員の家族、上司、果ては元老院議員までを殺

しつくした、あの『殲滅者』か。右目が火眼金睛であること以外、容姿の情報がない、懸賞金史上最高額の5000万DPの…」

「そうだ。ただ、言い訳じゃないがその虐殺には俺なりの理由があるが、な」

そう言うと、大樹はエヴァが拉致されて拷問されたことを話し出した。ただ、エヴァの名前はあまり表に出ていないので名前は伏せていたが。

「俺はな。俺に敵対するだけならば抵抗はするが、身内を害するモノには全てを賭けて対処するぞ。だからこそ、身内である吸血姫を拉致した連合は許しがたかった。それに一度徹底的に潰せば再び俺に敵対しようとはしないだろう。一罰百戒を実践したまでのことだ」

「『殲滅者』の話にはそのようなことがあったのか…」

「まあ、連合に伝えてもかまわないが、俺が旧世界に行くまでは待つてほしいな」

そういう大樹にエステルは視線を向け、なにやらむつとした表情を見ると、

「この帝国第一皇女、エステルを舐めるでない！わが名に誓ったことをいまさら違えはせぬ！…それに、タージユは妾の願いを聞き届け、この夜の迷宮まで連れて来てくれた。感謝することはあれど恐

れる必要がどこにあるのじゃ！」

そう啖呵をきった。見事な啖呵に大樹は目を丸くし、ついで大きく笑い出した。

「…ハツハツハ。見事な啖呵だよ、エステル皇女。認めよう、貴女は皇女たるに相応しいよ」

そう言う大樹にエステルは照れて頬を赤く染めていた。そこへ、予想外の声が響く。

『貴様ら、ヘラス帝国の皇族か？』

「俺は違つが、後ろのこいつはヘラスの第一皇女だ」

『…お主、現皇帝の娘か？』

「はい、私の名はエステリーゼ・ヒュラッセイン・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア。ヘラス帝国第一皇女でございます」

『そうか…よく見ると母君の面影があるな』

龍樹によると、エステルの父である現ヘラス皇帝は妻の墓をここに作り自分が生きている間だけでも墓を保護するために龍樹と契約したらしい。

契約に従い、魔物やトレジャーハンターが墓を荒らしたりしないよう、月の祭壇の一つ手前のこの部屋で守り続けていたところ、トラップにかかった大樹とエステルが落ちてきた。墓荒らしと思った龍樹は撃退しようとしたが、大樹との怪獣大決戦になったのだとか。

「ならば、この奥に母上のお墓があるのですか!？」

『そうだ。…そうか、今宵は満月だったな。その手にある花束も、母君が好きだったモノか。よかるう、奥に行くがよい』

「感謝します、龍樹殿。何をしておるタージュ!行くぞ!」

「…俺は皇女様の家来じゃないんだがね」

月の祭壇

月の祭壇と呼ばれる空間は、中央部分が床よりすこし高くなっていてその中心に墓石があるだけのシンプルな構造をしていた。

「のう、タージュよ。よく考えたら地下なのに空が見えるというのは変ではないか?」

「ああ、それならもう少しで答えがわかる。そろそろ満月だ。天井を見ている」

言われたエステルは地面に座り、天井を見上げた。数分が経過し、何も起こらないことに痺れを切らしたエステルが大樹に声をかけようとしたそのとき、天井に魔方陣が浮かび上がった。

「な、なんじゃこの魔方陣は!？」

「…夜の迷宮の地下深くにあるにもかかわらず、月の祭壇は月光を集められる。その答えがコレだ。こいつは地上部分とリンクしていて、満月の光を感知すると魔方陣が作動、月の映像と光を映し出す。そしてその月光是周囲の壁が吸収し…」

言い終わる前に周囲の壁が青く光だし、幻想的な景色が広がった。

「…とまあ、このような景色になるわけだ。一昔前には有名な場所だったぞ。辺境にいた俺でさえ知ってるくらいだからな」

「とても綺麗なのじゃ。このような場所に母上は眠っておられるのじゃな」

祭壇の中央にある墓石部分に向かったエステルは、墓前に花束を沿え何かを呟くと、大樹のほうに戻ってきた。

「さてタージュよ、急いで帰るぞ。父上が心配して大騒ぎになるやも知れぬでな」

翌日は大騒ぎになった。行方不明扱いだった第一皇女が正体不明の男をつれて帰ってきたのだから無理もない。城の前まで大樹をつれて来たエステルだが、さすがに城の中に入るのは大樹が遠慮した。もし自分の正体が発覚したら余計に騒ぎが大きくなるだけだからだ。そのまま宿に戻った大樹は、ようやく落ち着けたからかすぐさまベッドで眠りについた…

そしてゲートの準備が整った当日。ゲート管理局に向かった大樹は、職員から一通の封筒をもらった。差出人の名前を見るとエステルの名前があった。ゲートが開くまでの待ち時間に封筒を開き、目を通してみる。

『本当は直接会って伝えたかったが石頭の父上が妾を城から出してくれなんだ。だから手紙にて伝えることにする。許せ。

妾の願いを聞き母上の墓前に連れて行ってくれたこと、本当に感謝しておるのじゃ。ありがとう、タージュ。このことを、妾は生涯忘れぬぞ。いや、子々孫々に伝えるのも一興じゃな。妾の願いを叶えてくれた男として皇族に名前が伝わるかもしれぬのう。まあ、タージュのことじゃ。気にもせぬだろうがの。

それでも妾にできることはこれくらいなのじゃ。たっしやで暮らせ。

いつかまた会えることを祈っておるぞ。

エステリーゼ・ヒュラッセイン・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア』

「…ふむ」

手紙を読み終わった大樹は微笑を浮かべていた。ちょうどよくゲートの準備が整ったようで、アナウンスが入る。

「さて、久方ぶりの旧世界へ行くのでしょうか」

こうして大樹は魔法世界を後にした。

第11話（後書き）

こんな感じで魔法世界編終了です。次はどんな話にしようか…

やるとしても、もう1エピソード挟んだら大戦編にします。早くヒロイン出したいっす…

もしリクエストがあったら感想欄にでも書いてください。本日の感想を集計して決めようと思います。

現状作者が考えているのは

? エヴァたんの大冒険〜アリアドネー&仙域編〜

? 大樹、日本上陸、神鳴流邂逅編

? 大樹、中国武者修行編

? さつさとキンクリして大戦編やれゴルア

? その他

以上です。

リクがなかったら気分で決めます。
それではまた。

第12話 挿話之1 エヴァたんの大冒険〜アリアドネー編〜（前書き）

感想を見たところ、

？エヴァたんの大冒険〜アリアドネー&仙域編〜

が今のタイミングだといいいろい意見が多かったので書いてみました。

今回はアリアドネー編です。

2011/3/2 1:20 改行のズレが半端じゃなかったので

修正。

感想で指摘してくださった方々、この場を借りてお礼を申し上げます。

第12話 挿話之1 エヴァたんの大冒険〜アリアドネー編〜

エヴァたんの魔法日記。

○月×日

今日タージュがアリアドネーを出発し、私はここで西洋魔法の勉強をすることになった。

どうやら初めのうちは騎士団養成学校に通うことになるらしい。総長の計らいで吸血鬼だと言っことは周囲に一切漏らしていないよ。うなので変な差別はないだろう。

ちよつと安心。

明日から頑張ろう。

×月 日

騎士団養成学校に入って一ヶ月がたった。

学校のほうは順調で、友達もできた。西洋魔法も新しいものをいくつか覚えた。

ただ武装解除、あれは駄目。服が脱げる。しかも、なんで狙ったように私のクラスは女の子ばかりなんだろう。

あとで友達に聞いたたら『うちは女子校だよ?』と言われた。恥ずかしい##

×月 日

今日は模擬戦で魔法の射手の打ち合いをした。魔法の射手は学校に入る前から使えたので張り切ってつかったら、周りより本数が多すぎて友達に『殺す気かっ!』と起こられた。ちよつと反省。

一部のクラスメートから化け物と言われた。友達は気にしないでいって言ってくれたけど、私は吸血鬼。本当に化け物なんだ。言われたことで少し気分が憂鬱になってしまった。

こういう時、タージュに無性に会いたくなる。でも、頑張るって決めて笑顔で送り出したんだから、これくらいじゃ負けないもん。

×月 日

今日は、今度の試験で行われる100km箒ラリーのペア決めをした。

100km箒ラリーとは箒で100kmの特設コースを飛行しつつ、周囲の人を妨害してゴールを目指す種目だ。

ただ、問題がある。妨害は武装解除の魔法のみなのだ。友達たちが脱げレースと呼んでいたがまさしくその通りだ。絶対に脱がされたくない。ペアになった友達（私のルームメイトだ）と頑張ろうって誓い合った。放課後には箒で空を飛ぶ練習をすることになった。最近毎日が楽しい。

月 日

今日は試験で簿レースをやった。事前に必死に練習した甲斐があった。私たちは見事脱がされることなくゴールできた。タイムも上々。うれしくて思わずペアの子と抱き合ってしまった。

前期の学校は明日が最終日、授業はもう終わったから寮で友達と騒いでいたら寮長に怒られてしまった。

月 日

今日は最低な出来事があった。ある教師が、私が吸血鬼であると暴露したのだ。

事の始まりは教員室に用事があり友達と向かったときだ。私は主席だったので担任の教授がおめでとうと言ってくれた。そのとき、別の教員が『そいつは真祖の吸血鬼だ！一般人より魔法が使えるのは当たり前だ！』と騒ぎ立てたのだ。どうやらその教授は昔MM連合にいたことがあったらしく、そのとき私の手配書を見ていたらしい。騒ぎ立てる男を周囲の教授が別室に連れて行ったが、発言が伝わるのは早かったみたい。教員室には他のクラスの生徒もいたから。

寮への帰りにはすでに周囲から白い眼で見られた。

以前から友人だった周りの人以外の視線が痛い。でも友達が気にしなくて良いといってくることが救いだ。とりあえず今日は早く帰って寝よう。

月×日

あれから一週間がたった。だんだんと友人も私と疎遠になっていつている。以前ほど私を訪ねてこなくなつたから。

箒レースでペアになつた子だけはずっと変わらないけど、なんだかソレも無理しているように見えてきた。

タージュに会いたい。

月 日

最近他人と話した記憶がほとんどない。ルームメイトの子だけだ。それも私が大体無視している気がする。

今日、私は決めた。一人でも負けない、強くなると。気弱になつていても負けるだけ。吸血鬼だと差別するならこつちから縁を切つてやる。

大丈夫、私はタージュの娘だから。絶対に負けない。

月×日

今日から新学期だが、私はもはや誰とも会話をしなかった。ルームメイトがこちらをちらちらと見ているが、もう気にならなかつた。私は強くなると決めたのだ。

授業後、総長の執務室に行き禁書庫の閲覧許可をくれるよう交渉した。渋い顔をしていたが、そちらのミスで私の素性が発覚したのだからそれについての落とし前をつけると言つたら了承した。

ついさつきまで禁書庫でずっと魔術書を読んでいた。早く強くなり

たい。

月 日

禁書庫で気になる本を見つけた。人形契約について書かれた本だ。人形契約とは、自らが作った人形を契約を結び従者にするというものらしい。もう他人を信用できない私には似合いのモノだろう。すぐさま総長を脅し一年間の休学を勝ち取った。この期間に人形の素材を集めに行こうと思う。
ルームメイトがまたこっちを見ているが、どうでもいい。

月 日

人形の素材も粗方集まった。今日から人形制作に入る。平衡して強力な魔法の習得も始めた。私は接近戦が苦手なので、どうしても魔法による火力が必要不可欠だからだ。

人形が完成したら、従者を前衛、私が後衛になる。タージユと再開したらタージユを前衛にしてもいい。分かれてからずっと化勁の練習だけはしているが、いまだにタージユのレベルに追いついていない気がする。

月×日

私の初代従者が完成した。名前をチャチャゼロと言う。見た目はただのかわいらしい服を着た人形だが、一度刃物を持たせれば敵を切

り刻むような人形だ。ちよつと言語中枢が失敗し片言だが、それもまた今の私の実力。甘んじよう。
最近はおに帰らず禁書庫と外を行ったりきたりだ。たまにルームメイトを見かけるが、視線が合うと向こうからそらされる。やっぱり私は一人だったらしい。

月 日

今日、禁書庫にルームメイトが押しかけてきた。話があるというが私には話なんて全くない。チャチャゼロをつかって丁寧にお帰り願った。一応チャチャゼロには手を出すなと命じたが、どうなったかは知らん。興味もない。

『ゴシユジン。オレハメイレイドオリケガサセテネエゼ！』

こらチャチャゼロ！勝手に私の日記に写るんじゃない！！！！

…コホン。全く騒がしい人形だ。

月 日

前回の日記から二週間。毎日ルームメイトが私のところに押しかけてくる。それをチャチャゼロで追い返す。変わりがないことだ。

禁書庫の魔法書の中身は粗方記憶した。あとは使いこなせるよう修練を積むことだけだ。

月 日

とうとう根負けしてしまった。

ルームメイトがあまりにもしつこかったので禁書庫の中にある私の書斎（無断で作った）に招き入れたのだ。

ルームメイトはすごいすごいと無邪気に私を賞賛してくる。上辺だけだと思っていたが、最後には照れてしまった。

『マルクナツタカ、ゴシユジン？』

うるさいぞ、ダメ人形めっ！

『エヴァちゃん、そろそろ寝ようよー』

…実はまだ部屋にいて、今日は泊まっていくらいしい。調子が狂う。

.....

月×日

今日で私がここに来てから50年目だ。実は、あれからあのルームメイト（もうとつくに卒業しているが、敢えてルームメイトと呼ぶ）はずっと私の書斎に居座り続けた。騎士団養成学校を卒業した後騎士団に正式配属されても、騎士団を引退して総長の座に落ち着いて

も、彼女は私の書斎に帰ってきた。今思えば、これが腐れ縁という言葉なのだろう。タージュとの生活よりも長く私と一緒にいた彼女は、私の唯一の友達と言えたのだろうか。向こうがどう思っていたかはもう確認できないが。

…そう、あの女は先ほど息を引き取った。ご丁寧に遺言として『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルをアリアドネーの永久客員教授とし、アリアドネー所蔵の書物、データの閲覧を全て許可する。ならびに禁書庫に司書室を設立し、彼女初代禁書庫司書とする。なお、今後彼女の生活を脅かすものはアリアドネー魔法騎士団の名において厳正なる処罰をするものとする』と残っていた。なんと強制証文付きだ。

…私は彼女の友情に答える事ができたのだろうか。彼女が死んだ今となってはもう確認することができない。

人ならざる身の私としては、このように何かを残して逝くということが理解できないが、私は彼女に答えることができたのだろうか。永遠の謎だが、この答えを見つげるために生きていくのも悪くない。

第12話 挿話之1 エヴァたんの大冒険〜アリアドネー編〜（後書き）

こんな感じに仕上げてみました。

原作よりは歪んでないけど、やっぱりエヴァたんはあの口調になつてしまいましたとさ。

次回は仙域編？になるのかな。

引き続き感想、意見お待ちしております。

いただいた意見には真摯に対応を検討しますのでよろしくお願いします。

それではまた。

第13話（前書き）

ちよつと前の話を修正しました。具体的には時系列を。

18世紀の世界とか中途半端すぎたorz

いろいろ調べても市民革命とかばっかで話を作れません…

ベルサイユの大樹とか頭に浮かんだけど、謎すぎる。

というわけで、魔法世界滞在を100年ほど伸ばさせていただきました。

第13話時点での旧世界は19世紀になったばかりということになります。

それでは本編です。

第13話

旧世界に戻ってきた大樹は、ゲートのあるイギリスから船で一路中国を目指していた。分かれる際に仙域で待つてればいつかは会えると言ったことを思い出したためである。船の客室から見える海上の景色は見たことのないくらい鮮やかで、大樹の感性を大いに刺激した。

「考えて見れば、仙域を飛び出してから数百年経ったのか。老師達は…殺しても死なないだろうから心配するだけ無駄、か。もしエヴァが老師達に会ったらオモチャにされるんだろうなあ」

雷雲を背景に如意棒を持った猿から涙目で逃げるエヴァを想像してげんなりした大樹は現実逃避に外の景色を見続けるのだった…

中国・香港

イギリスからの船旅の終着点、香港に到着した大樹は久しぶりに感じる大陸の風の心地よさに身を任せていた。転生してから今までの人生でいろいろな場所を旅して回ったが、やはりこのオリエンタルな空気といい、時代を経てもかわらない活気は大樹の心を捕らえて離さない。

「今の俺にとって、この大陸こそが故郷なのかもな…」

少し感傷に浸っていたが、気を取り直して市街地へと向かっていく。予定では、ここで一泊した後小型艇で北上し上海へ。そこから揚子江を上り仙域を目指す。

市街地にて本日の宿を探す大樹。しかし、この時代の香港はイギリス植民地になったばかりであった。そのため新しくできた市街地ではアジア系にたいする風当たりが厳しかったのである。当然宿を探すどころか食事場所さえ難儀して途方にくれてしまった。

「くそう、こんな時こそエヴァがいれば…」

当然ながら、エヴァは見た目が絵に描いたような欧州美少女である。彼女がいたならば、大樹は彼女の使用人としても身分を偽ってどうにかしていただろう。しかし、いない人間を当てにしてもしょうがない。沈みかけた気分を持ち直し、再び歩き出す大樹であった。

一時間後

「だあああつ！！！！どこもかしこも泊める場所がないの一点張りかつ！」

あれからさらに宿を探して歩き回ったが、全て断られていた。港に着いたときのいい気分なんてもはや跡形もない。何しろ食事すらと

っていないのだから。

「……もういつそのこと夜通し走り抜けて仙域まで行こうかねえ。流石に全力で三日くらい走り抜ければ付くだる。うん、いい考えだ。そうと決まれば……」

どうやらイライラの限界を突破して思考がぶっ飛んできたようである。このまま走り抜けようと全身にマナを巡らせ身体能力を上げ始める大樹。あと少しで走り出すというところで、急に後ろから声をかけられた。

「待つアルヨお兄さん！見たところ宿を探しているアルネ？」

「……なんだ坊主。俺は今故郷に裏切られた気分で非常に大人気ないぞ？悪いことは言わないからボツタクリやスリの対象にしようと思うなよ？痛い目だけじゃすまないぞ？」

「ま、まさかそんなコトするわけないアルね！地理に疎そうなアジア人なら何かあってもごまかせるとかおもってないアルよ！！」

「……思ってたのか」

「はっ！お兄さん、私に自分から目的をしゃべらせるとは。なかなかやるアルね……！！」

「……なんで打ちひしがれているときに限ってここまで疲れる存在と出会っただ」

大樹は頭を抱えてうずくまる。が、目の前の子供はそれを無視して話を続けた。なかなかのスルースキルである。

「ふっふっふ。今この地では弱肉強食アル！道に迷うような男は私達の餌食なって当たり前アルよ。皆出て来るネ！」

掛け声をかけるとどこに隠れていたのか周囲からぞろぞろと子供が群がってきた。おそらくここいら一体のストリートチルドレンの集団だろう。そのまま大樹の周りを囲み、勝利を確信するリーダーらしき少年。

ようやく立ち上がった大樹は、頭痛を払うように頭を振って大きくため息をついた。

「はあ。もういい、疲れた。相手にするのも面倒くさい……」

言葉を切ると、大樹は壁に向かって走り出し、そのまま壁を蹴り上げ建物の屋根の上に登っていく。屋根の上に登った大樹は地面を見下ろし、子供達に向かって話しかける。

「それじゃ、俺はもう行くから。今度からは絡む相手をよく選べよ?。」

そついうと屋根の上から顔を引つ込めそのまま屋根伝いに歩き出したのだつた。

一方壁を駆け上るといふ人間離れした技を見た子供達は大樹に対して歓声を上げていた。呑気な子供達である。しかし、流石にリーダー格である子供は違つたようだ。

「ムムム、なかなかやるアルな！だが私からは逃げられないアルよ！」

流石に壁登りはできなかったが、人間離れした速度で地面を駆け抜け大樹を追いかけたのだ。

「おお、リーダーが追いかけるみたいだ。みんな、賭けるぞ！」

「リーダーに100！」

「リーダーに50！」

「全員リーダーじゃあ賭けにならないよう……」

「だって今までリーダーから逃げたやつなんていないじゃん」

「結局相手も逃げ切れずに根負けして、チップくれるからねえ」

「うちのリーダーバカだから追いかけていくうちに楽しくなつて目的忘れちゃうんだよねー」

やいのやいの言いながら追いつくか逃げ切るか子供達で賭けを始めだした。…非常に呑気な子供達である。

追いかけていくうちに目的を忘れるリーダーの部下だけはあった。

「待つアル！逃がさないアルよ！！」

「ほう、手を抜いているとはいえ俺の速度についてくるか」

本気ではないとは言え身体強化をした自分についてくる相手に興味を覚えた大樹。よく見ると微弱ながら気を纏っていた。

「驚いたな、天然で気を使うか。収束も運用もまだまだだが、素質だけはあるか」

この日ほとんど良いことがなかった大樹は憂さ晴らしをしようと悪戯心が湧いてくるのを感じた。

屋上を走り抜けていたが、立ち止まり周囲を見回す。ちょうど良いところに空き地があったので、後ろを追ってくる相手が付いて来れるように空き地に向かって走り出す。案の定きちんと追いかけてきたので大樹は笑みを浮かべる。

空き地にたどり着いた大樹は後ろを振り向き待ち構えた。追いついた相手は少しだけ息が乱れていたが、まだまだ元気そうだ。

「ようやく追いついたアル！観念したアルな！」

「まあ、そんな感じだが。ところで、何で俺を追いかけてくるんだ」

「それは……お兄さん、何でワタシはお兄さんと追いかけてっこしてたアル？」

「俺が聞いているんだが……。まあいい。逃げ回るのも飽きた。俺に一撃でも入れられたら坊主の仲間と一緒に飯を食わせてやるよ。場所はお前らに任せる」

「本当アルか！？ちょうどお腹空いてたアルよ。ナイスタイミングアルね！！」

「ほー。俺に一撃当てるのが簡単だとも？」

「こう見えても、私体力には自信があるよ。ご飯のため、大人しくワタシに殴られるアル！」

そういつて飛び掛ってくるが、瞬時に間合いを詰めてデコピンで地面に埋める。

「おっと、少々強く弾きすぎたか。大丈夫か坊主」

見下ろし声をかける大樹だが、地面に埋もれた頭がガバツッと跳ね上がり距離を詰める。

「隙有りネ!!」

「甘いよ」

右手を振りかぶった相手に対し、大樹は前に出た左手を掴み自分の後ろに流す。あまりに自然な動作だった。相手には目の前にいた大樹が気づいたら後ろにいるように見えたはずだ。

「力任せにしたって俺には当たらないよ、少年」

「むう、お兄さん奇術師か何かアルか？今何があったアル？」

「聞けば何でも教えてくれるほど世の中優しくないのだよ、少年。悔しかったら自分で考えてみるんだ…なっ！」

再び目の前に現れた大樹は相手の手を掴む。反射的に手を振り切ろうとするが、その動きを利用され足を払われ地面に転がされる。こんな調子でデコピンと化勁だけで時には地面に埋め、時には転がし楽しむ大樹であった。

第13話（後書き）

と、いうことで中国武術伝承編です。

もうわかりやすいくらいですね、彼女のご先祖様です。
アルアル言わせればそれっぽく聞こえる不思議。

昨日一日のPVが34000とかカウントされて焦りました。ユニークは3000でした。

一日で今までの3割とか…
皆様ありがとうございます。筆が乗ればまたあんな感じで更新でき
ると思います。

それでは、また。

第14話（前書き）

取り溜めていたアニメを見ながら執筆中です。

余計作者の中でヒロインと大樹を書きたくなってきたorz

ちなみに修行フラグ立てておいてなんですが、古ではありません。
候補が数人いてどうしようか非常に困ってます…

第14話

SIDE 大樹

「……さーて、小僧。もう、終わりでもいいか？」

「絶対、諦めないアル…」

あれから何回か地面に埋めたが、諦めずに何度も向かってくる。…
しかしコイツ、初めはどうみても素人の動きだったのに。今じゃ見
違えたような動きをしゃがる。もちろん俺に一撃当てるなんてまだ
まだだが…。

もしかして、コレが天才ってやつなのか？老師達が面白半分でも俺
を鍛えぬいた気持ちが今ならわかる。才能の原石を見つけたら、こ
うも自分の手で育てたくなるモノのかねえ。

…エヴァと俺には時間が無限にある。ならば、目の前の人間に付き
合つのも悪くないか。

悪いなエヴァ。だが、『見つけちゃった』んだ。もし待たせたなら
埋め合わせはしてやるよ。

SIDE END

SIDE ???

初めのうちは何も考えずに目の前の男に向かっていただけだった。しかし、何度飛び掛つても目の前から消えたようにいなくなり、氣付いたら地面に転がされていたのだ。

やがて少し考えながら動くようにした。前のめりになっていた姿勢を但し、なるべく相手を見ながら動くようにした。

だんだんと男が後ろに移動するのを目で追えるようになってきた。もつとも、体は全く付いていかないが。

やがて腕を取られるときに手を引くことができるようになった。もちろん、引いた瞬間逆の手を取られて転がされるのは変わらないが、デコピンの瞬間に額に力を込めると地面に埋められる深さが若干浅くなった気がした。当たり前だがデコピンを避けることはできないが。

楽しい。とても楽しい。今まで生きてきた中で一番楽しいかもしれない。この時間がいつまでも続けば良いのに。

そう思ってたらまた埋められた。

「さーて、小僧。もう、終わりでいいか？」

まだ、まだワタシは動ける。まだっ…

「絶対、諦めないアル…」

立ち上がろうとした瞬間、目の前が暗転した。意識がすつとなくなる瞬間に浮かんだのは、この時間が終わってしまうことが残念だということだった。

S I D E E N D

意識を失い倒れた相手の容態を見て異常がないことを確認した大樹はほっと一息ついた。折角見つけた原石をこんなところで壊しては元も子もない。まずは休めるところを、と歩き出そうとしたらいつの間にか周りに先ほどの子供達がいた。

「お前ー！リーダーをどうする気だー！」

「うちのリーダーに手を出すやつは俺達が許さないぞー！！」

「おい、ちょっと待て。俺は今コイツが休める場所を探そうと……」

「……問答無用……！！！！」

周りを囲んだ子供達はいつせいに飛び掛ろうとするが、

「止めるアル！」

いつの間にか目を覚ましたリーダーに静止させられる。

「ワタシは正々堂々として負けたアル。ならばワタシをどうしよう
と負けた側が何かを言う権利なんてないアル！わかったら離れるア
ルよ！」

「…なら、まずは落ち着いて休める場所につれてってもらおうか。
見たところストリートチルドレンのグループなんだろう？だったら
ネグラの一つくらいあるんだろう？」

「わかたアル。皆、お兄さんを案内するアル」

リーダーに命じられた子供達は大樹を自分達のアジトに連れていく
ため先導する。リーダーの子供は自分で歩こうとするが、まだふら
ついていた。見かねた大樹が抱きかかえようとしたが、そのとき胸
に手が当たりなにより柔らかい感触がした。

「お兄さん、いきなり触られてもまだ心の準備ができてないアルよ
」
「##」

「…お前、もしかすると、女だったりするの？」

「なっ！失礼アル！この古蓮^{クレン}、誰がどう見ても女アルよ！」

「少なくとも触らないとわからない絶壁とその体型じゃ女だなんて
わかるか…」

大樹の突っ込みにさらに騒ぎ出す古を見つめつつ子供達はコソコソとしゃべりだす。

「ねえ、リーダーって女の子だったの？」

「いや、俺も今知った。お前は？」

「初耳だよ……」

…誰も知らなかったようだ。

「そこ！全部聞こえてるアルよ！！今まで勘違いしていたアルか！！！！」

「やべえ！リーダーが怒った！！」

「皆、アジトまで走るぞ！」

「……了解！！！！」

「お前ら、俺を案内するんじゃないかったのか……」

二人を置いて走り出す子供達を残念なモノを見るように見つめる大樹と顔を真っ赤にして起こる古。ふと冷静になった大樹は置いてい

かれないよう追いかけたのだった。

古のアジトは中華街の奥にある屋敷だった。おそらくイギリスが香港を統治する以前の有力者の家だったのだろう。それなりに多い小部屋があり庭まであった。

「よく子供だけでコレだけでかい屋敷をアジトにできたな。大人の浮浪者がこんな場所ほっておかないだろうに」

「初めは他のグループが奪いに来たりしたんだよ」

「でもリーダーが全員やつけたんだよっ！」

「ふっふっふ。俺達のリーダーはその辺の大人なんか目じゃない位強いんだからなっ」

「皆、そんなに褒めないでほしいアル。照れるアルよ」

どうやら激しい争奪戦に勝ち抜いた結果らしい。おそらく子供なのにそこいらの大人顔負けの強さを持っていたのも女だと気付かれなかった理由のひとつなのだろう。

「なるほどな。ところで、勝者は敗者を好き勝手にしていいとか言

つてたな？」

「…はっ！忘れていたアル」

「（本当に武術の才能以外は鳥頭だな）まあいいさ。古、お前強くなりたいか？」

「ワタシ、お兄さんに食べられるんじゃないアルか？」

「…俺はロリコンじゃない。そして茶化すな。武術を習う気はないのか、と聞いているんだ」

ワザとなのか話をそらす古に大樹は再びまじめに聞いた。

「…習いたいアル。でも道場に通うお金もないし、仲間を見捨ててまで我が道を行くなんて不義はできないアル！だから、無理アルよ」

「なら無料で教えてくれる師と仲間を見捨てなければ習う気はあるということか？」

「そんな旨い話がこの香港にあるわけないアル…」

「なら話が早い。俺が教えてやろう。ついでにこの屋敷を俺の名義で購入して道場代わりにし、他の子供の面倒も見てやる。だから古、俺の弟子になれ！」

自分の考えを伝える。幸い魔法世界で溜めた財宝は大量に残ってい

る。いざとなればこの町で風水師として金を稼ぐことだって大樹の技術なら可能である。資金的な面での問題は皆無といえよう。あとは当人の意志一つである。

「本当アルか！……それならワタシ、喜んで弟子入りするアルよ！お兄さんのこと老師と呼んで良いアルか？」

「……老師は止める。それと、俺の名は大樹だ。だから大樹師父でいい」

「わかったアル。それでは、大樹師父。今日よりワタシ、古蓮は貴方の弟子としてその武術を受け継いでみせるアル。よろしくお願いアル」

「俺は厳しいから覚悟しとけよ？その代わり、俺の武術の全てを教えてやる」

こうして大樹は古蓮に自らの武術を教えることになったのであった。

第14話（後書き）

ちよつと短いですが、区切りがいいので一度投稿。

ご先祖様は二次性徴直後くらいをイメージしてくれれば。
続きは今日中に書いて投稿します。

中国武術伝承編はもうちよつと続きます。

活動報告にてアンケートをとろうかと思えます。
よろしければお答えください。

それではまた。

第15話

大樹が古蓮達のアジトを正式に買い取ってから数ヶ月が経ち、毎日の修行風景も見慣れたモノになっていた。

大樹は古に八極拳と中距離で使う柔の劈掛拳の組み合わせは定番と言えるものであったが、定番だからこそ相性はよかった。古はスポンジのように（頭の中身もスポンジみたいなものであったが…）技術を吸収し、こっそり教えている気の運用も着実に成長していた。

そして、ついこの間の組み手で大樹に一撃を入れることができた。

（ちなみに大樹が組み手をするときは『攻撃手段はデコピンと化勁による投げのみ、しかも右手だけ』、『気の封印』というハンデ付きである）まさか大樹も教え始めて数ヶ月で自分にまぐれでも一撃入れられるようになるほど成長するとは思ってなかったのだ。組み手の最中、道場の床がすべり大樹が一瞬体勢を崩したのだ。その隙を古は容赦なく付いた。

「今のはよかったぞ古。相手の一瞬の隙に躊躇なく間合いを詰めたのは英断だ。ただし、勇敢と無謀を履き違えるなよ？」

「師父は厳しいアルな。ここは弟子の成長を喜び涙するところアルよ？」

「ほう、鳥頭の癖に言うようになったな。なら弟子の成長へ敬意を表してやる。次の組み手から両手で相手をしてやろう、ありがたく思えよ？」

「師父、まぐれ当たりだったのにソレはあんまりアルよ…」

「何を言っている、弟子の成長を喜んでるんだ、涙してありがたがれ。それじゃ早速始めるぞ？表に出ろ」

襟首をつかまれ道場の外に連れ出される古。背景にはドナドナが聞こえてきそうだ。残された光景を見ていた他の子供達は、外へと姿を消した二人を見なかったことにした。大樹は老師達よろしく修行は超スパルタだったので野次馬をするのは命に関わることをこの数ヶ月で学んでいたのだ。

一度コテンパンにやられる古を野次馬していたことがあったが、そのときは『そんなに組み手したかったら相手をしてやる』と一人数十回は地面に転がされ、その日はずっと背中痛みが引かなかったのだ。子供達も学習するのである。

その日の日課（大樹と古の組み手地獄）も終わり、皆で夕食の時間。大樹に来客があり応接室に向かう。そこにはいかにもな英国紳士が紅茶を片手に寛いでいた。大樹が来ると男は立ち上がり握手を求めたので答える。

「始めまして、ミスター。ジョン・ドウです」

「ジョン・ドウ（名前不明）か。明らかに偽名を名乗るとはいいい度胸だな」

「ミスターの礼儀とは自分の名前を名乗る前に相手の名前をけなすことですか？」

「ソレは失礼した。如月大樹だ。よろしくミスター」

「こちらこそ。大樹と呼んでも？」

「お好きなように」

笑顔で会話の火花を散らす両者。大樹も何度もあったことなので慣れたものである。彼らはこの屋敷を買い取りたいと、ここ最近はそれこそ毎日のように大樹の元を訪れていた。今日の相手は今まで見たこともない男で、特徴のない姿が特徴といえるような容姿をしていた。

ちなみに大樹はこの屋敷を土地込みで正当な手続きで管理していたイギリス政府から買い取ったのでちゃんとした持ち家である。かなりの大金が動いたが、大樹は腐るほど金を持っているし稼ぐ手段もあるのであまり気にしていなかった。やりたいことをやるためなら出費は惜しまないのだ。

「それで大樹さん。考え直してくれましたか？」

「何度も言っているが、正統な手段で手に入れたモノを他人に譲るほど、俺は奉仕の心を持っていないのだよミスター」

「貴方も強情な人だ。代替の土地も用意すると言っているではありませんか。私の上にいる伯爵様が非常にこの土地に興味があるそうなのですよ。譲ってもらえませんかねえ？」

「札束でホホをはたくような公爵様に遠慮するような教育は受けて

いないもので。貴族の階級なんて俺には何の感慨も浮かべないが。話は終わりならお帰り願おうか。そろそろ夕食の時間でね。ティータイムを何より大事にし、紅茶のためなら一国を植民地にするようなお国柄の貴方ならご理解いただけると思いますか」

後ろのドアを指差し帰れという意を全身を使ってあらわす大樹に、男は皮肉に慌てることなく答えを返す。

「……わかりました、今日のところは帰りましょう。でもお忘れなく。我々は狙ったものはそうそう諦めないのですよ。たとえ何をしようともね。ところでミスター。この辺りは治安も悪いようですね。子供達にも夜中外に出ないよう言っておいたほうがいいですよ?」

「…ひとつ、言っておこうか」

「聞きましょう」

「手段を選ばないのは結構だが、やったらやり返されるということを理解しておけ。手段を選ばなくて後悔するのはそっちかもしれないぞ?」

「伝えておきましょう。それでは」

狐と狸の化かしあい区切りをつけ、ジョン・ドウはその場を辞した。途中大樹に食事の準備が終わったことを知らせに来た子供とすれ違い、後ろからその姿を見つめる。

「イエローモンキーが。大英帝国を前によくもふざけたことを…その顔を歪ませてやる」

食堂に現れた大樹を子供たちは笑顔で出迎えた。

「遅いよ師父！もう待ちくたびれたよ」

「そうだよ。あれだけ動いたんだから早くご飯食べたいよー」

「まあそう言うな。『同じ釜の飯を食った仲』という言葉もあるんだ。待たせたな、さあ食べようか」

和気藹々とした食事風景、大樹は食事中は基本しゃべらず黙々と食事をする。あまり自分から会話に加わることはないが、今日は古が話しかけてきたので手を止める。

「師父、またいつもの話アルか？」

「ああ。何、気にすることはない。言うとおりにするつもりは微塵もないからな」

「しつこいアルね。今度来たらワタシが空の彼方にぶっ飛ばしてやるアル！」

「…頼むから面倒ごとを起こすなよ。余計なトラブルなんて無いにこしたことはないんだからな？余計なことしたら特別コースだからな？」

「特別コース…（ガタガタブルブル）」

「あー、リーダーのスイッチ入っちゃったー」

「駄目だよ師父。特別コースはリーダーのトラウマなんだから」

「こいつの鳥頭はこれくらいしないと記憶に残らないんだよ…」

「こうなったらしばらく帰ってこないからリーダーのご飯貰っちゃおうぜ」

「」「賛成！！」「」

釘をさすが、特別コースという言葉聞いた古は顔を青ざめさせ震えだす。どうやら特別コースとやらにはよほど思い入れがあるらしい。（ちなみに特別コースとは、素の能力のみの使用だが全力全壊の大樹の猛攻撃を時間無制限で化勁を使い回避し続けるというものの。殺気混じりの大樹の攻撃で常に意識が飛びそうなくらいの圧力がかかり続ける）

現世に戻ってきたときには食事が終わって何も残っておらず、古は枕を濡らしながら眠りに付いた…

それから数日。大樹が恐れていたことが起きた。買出しについてきた子供の一人が馬車に跳ねられたのだ。幸い命に別状はなかったが、右腕の骨が折れていた。

なにより、怪我をした翌日にジョン・ドウが見舞いに訪れたのだ。骨を折った子供はジョン・ドウを見た瞬間顔を青ざめさせる。

「なにやらお怪我をなされたと聞きました。コレ、私どもからの見舞いです」

子供は彼と目を合わせたくないのか顔をあげようとしめない。自然な動きでジョンと子供の間に入る大樹。

「実に情報が早いな。それで。用件は何だ？」

「いえ、『今日は』お見舞いだけです。怪我人の前でする話でもないでしょうし。それではミスター、御機嫌よう」

本当に見舞いだけで帰るジョン・ドウ。彼がいなくなってようやく落ち着きだす子供。古だけはジョンをにらみつけていたが、大樹の視線に制されてかううじてこらえていた。

「それで。何でそんなに怯えているんだ？あいつは俺以外と顔をほとんど合わせていないはずだが」

「…私、前にあの人が来たとき一度すれ違ったんだ。それと、私を跳ねた馬車を運転していた人も…」

思い出すと恐怖も一緒になるのか再び震えだす。大樹は後ろから優しく抱きしめて落ち着かせる。落ち着いたら気が抜けたのかそのまま眠ってしまったのでベッドへと運びこむ。

部屋から出てきた大樹は他の子供達を集めた。

「皆、ちょっと急用ができた。明日から一ヶ月ほど留守にする。その間の食料は準備しておくから屋敷から一切出るな。鍛錬は自室でもできるものを続けるように。それでは、解散」

急に告げられた内容に子供たちはざわめきその場に留まったが、大樹は気にせず自失に戻った。

自室にいていろいろな準備をしていると、ノックの音が響く。ドアを開けるとそこには古の姿があった。

「師父。討ち入りアルか？」

「何を言っているかわからんぞ、古。落ち着いて話せ」

「とぼけても無駄アル！師父はあの男に対して気を一切抑えていたアル！押さえ込もうとしすぎたのが裏目に出たアルね！」

「そうか、そこまで気が付いていたか。甘く見すぎていたな…。確

かに俺はやり返しに行くが、お前は駄目だ」

「なんでアル！仲間を傷つけられて黙っていられるほど私は聞き分けよくないアルよ！背にかじりついてでもワタシは師父について行くアルよ！」

「…一つ言っておく。そこまでの意志があるなら自分の危険は自分で対処しろ。俺は手助けはせん。いいな？」

「流石師父！ありがとうアル！！ところで、あいつらの屋敷が遠いと言ったって一ヶ月もかからないはず。なんで一ヶ月も留守にするアルか？」

「誰が香港の屋敷に行くと言った。どうせやるなら徹底的に、だ。俺が行くのはあいつらの本拠地、イギリスだ。伯爵様の名前をあいづらは出している。屋敷の場所なら調べられるからな」

「…逆に一ヶ月でイギリスを往復できないと思うアル」

「もちろん船じゃ間に合わない。だから」

「だから？」

「走っていくんだよ」

第15話（後書き）

日付が変わってしまった…

次回は

大樹無双&古、初めての実戦
の二本立てです。

それでは、また。

第16話

「さて、古。そろそろドーバー海峡だ。いい加減目を覚ませ」

……反応がない。どうやら気絶しているようだ。

「自分で付いてくるといったのに不甲斐ないやつめ。帰ったら特別コースだな」

背負っていた古を下ろし、両足を掴んで回転しだす大樹。所謂ジャイアントスイングだ。

「…はっ！なんでワタシ師父にぶん回されてるアルか！！」

「いい加減、起きやがれゴラア!!!!!!!!!!」

「アイヤ――……」

十分に加速のかかった古を、そのまま海に向かって放り投げる大樹であつた。

「ブハア！全く酷い目にあつたアル。師父！か弱い弟子を海に向かって投げ入れるとは何事アル！」

「だから言つたろう。そろそろドーバー海峡だと。ここからは遠泳だ。お前を背負つて遠泳なんぞしてたまるか」

「そもそも、ワタシの扱い酷すぎるアルよ。肩に担いで全力疾走なんて女の子にすることじゃないアル！」

「そもそも付いてくるつて聞かなかつたのはお前の方だろうが…」

そう、大樹は古を担いで香港 ロンドン間の約10000kmを走り抜けてきたのだ。しかもほぼまっすぐに移動したため途中の山や湖やらも全部走つてのけた。一日辺り約1000kmの計算だ。勿論人間技じゃない。初めは古も負ぶさつていたのだが途中であまりにも揺れが酷いので酔つて意識を失つたのだ。考えてもみてほしい。人に負ぶされて歩くだけでも多少は揺れる。それが高速で走っているとしたら…。例えるなら巨人にシェイカーにぶち込まれてシェイクされるようなものである。古の苦しみは想像を絶するであろう。

もちろん、今普通に歩いている古も十分人間離れしてはいるが。

何はともあれドーバー海峡を泳いで渡つた二人は無事にイギリスに到着したのであった。

イギリスに着いてからの大樹の動きだが、古が考える以上に早かった。大英図書館に真つ先に向かった大樹は貴族名鑑を調べ、香港の大樹が住む屋敷を訪れていた貴族が所有する邸宅の場所を全て調べ上げたのだ。

そしてイギリス本島内にある邸宅のうち大きなモノを7つピックアップし一週間、每晚屋敷を襲うという計画を立てる。

「いいな古。一日一屋敷だ。その日に行く屋敷の周囲の地図を頭に叩き込め。最悪の場合お前だけ逃げできれば俺は何とかなる。だから逃走ルートだけは必ずいくつか自分で用意しとけ」

「いやいや師父！！ワタシイギリスに置いていかれても何もできないアルよーーーー！！！」

「付いてきたからには自己責任だ。大丈夫、お前の武術なら大道芸で食っていける」

（主に古にとって）ろくでもない会話をする二人。どうやら弟子に対する態度は老師と大樹共に共通する部分があるらしい。
即ち、生きてさえいればヨシ、と。

「あんまりアル。大道芸なんかで生活したくないアルよー」

「それが嫌なら黙って俺についてきて、自分の危険は自分で振り切れ。一応十日後の朝にドーバーの港で集合だ。もし来れなかったら

諦める。ソレが嫌なら……まあがんばれ。気休めに聞こえるかも知れんが、今のお前が気を使って身体能力を上げればよっぽどのことじや死ぬことは無いだろうよ」

目の幅涙を流しながら古は嘆くが大樹はほとんどフォローしなかった。実際一般人を超えた天与の才に大樹の地獄の鍛錬をこなした古は、格闘戦ならおそらく人類最強。集中していれば銃弾の軌道も見切るだろう。なまじ普段の組み手が古と大樹とのみで容易くあしらわれているから自信がつかないだけで。

「よし、それじゃあ今夜から動き出すぞ。まずはエジンバラにある屋敷だ……」

イギリス、エジンバラ。歴史ある古い町並みに二つの影が走り去る。大樹と古だ。大樹がどこから取り出した黒装束と黒頭巾を被った二人は目的の屋敷の正門付近にたどり着いた。古が思っていた以上に大きいその建物は城と言っていいモノで、城壁に囲まれていた。

「で、師父。こんなお城にどうやって入るアル？」

「難しく考えるからいけない。古、俺達は何をしにきたんだ？喧嘩を売りに来た。そうだろう？」

「みもふたもないアルな……」

「やかましい。そして、俺らの目的はただ一つ。向こうが喧嘩を売った相手が誰かというのを思い知らせることだ。ウサギだとおもっていた得物が、実は白虎だったと思い知らせるため、一番効果的な進入方法。それはだな」

言々と大樹は豪華な装飾がなされた正門の前に行くが中から出てきた門番に咎められる。

「ここは伯爵家ゆかりの屋敷だ。イエローが来ていい場所じゃないんだよ」

「さあ、さつさと消えろ。出ないと撃つぞ？」

門番が大樹の肩を掴み押しやろうとしたそのとき、急に門番二人の肩が外れた。

「「えっ」」

何が起こったかわからず大樹から意識をそらしたその瞬間、大樹の回し蹴りが炸裂した。そのまま壁にぶつかり意識を失う門番を尻目に大樹は古に声をかける。

「正々堂々と突入し、いかなる生涯も正面から叩き潰し相手のプラ

イドを根こそぎ砕いてやるのさ。香港の屋敷を強襲させようにもイギリスからじゃ時間がかかりすぎるからな。一週間で全てを粉碎して意気揚々と香港に帰るとしよう。行くぞ、古」

返事を待たずに閉じられた正門を蹴りぬく大樹。古を開いた口がふさがらない。本気になった大樹を始めてみるのでは無理も無いが。（もつとも、大樹は身体強化のみしか使っておらず得意の得物も出していないので戦場での本気とは比べ物にならないのだが）

「如月大樹、推して参る！！！！！！」

その日、エジンバラの伯爵邸はみるも無残に破壊された。

駐留していた近衛兵は全員一撃で昏倒し、どこかしらの骨を砕かれていた。城の壁には無数の穴が開き、インテリアとして飾られていた芸術品は全て燃やされた。支柱も何本か砕かれたため、今にも崩れそうである。

イギリスでの狂騒はこの日から一週間続くことになるのだが、今はまだ犯人以外誰も知ること無く、思う存分暴れた大樹は言葉も出ない古を引きずり隠れ家に帰還するのであった。

ロンドン・伯爵の本邸

「まだ襲撃者の正体はつかめんのか！私の屋敷がもう六つも襲われたのだぞ！？貴様ら一体何をしておるのだっ！」

「も、申し訳ありません！ただいま動員できる人間全てを使って情報を集めておりますが、何分被害にあつた屋敷はそれぞれが離れております。情報を集めるのが精一杯という状況でありまして…」

「御託はいい！犯人の情報は！？」

「屋敷の近くで犯行がある直前に不振な二人組を見たという情報が多いです。一人は背が高く、もう一人は子供のような体格でした。ですが全ての屋敷の近くで同じような人影が見つかっております。同一犯だしたら一体どうやって移動しているのか…」

伯爵は私兵団を束ねる側近に罵声を浴びせ、側近はひたすら謝りつつ状況を説明していた。いつ八つ当たりをされるか戦々恐々なので言葉を選びつつ次の反抗の予測を語る。

「ともかく、襲われた屋敷と同程度の規模の屋敷で無事なのは本邸であるココを含めあと数件です。今夜は本邸の警備を厳重にしております故、伯爵様はどうぞ安心してお休みください。必ずや捕らえて見せますので…」

「ふん、捕らえたならば、必ず私の元に「申し上げます！たった今、連続襲撃犯が自主してきました！」な、なんじゃとっ！今すぐここにつれて来い！」

「危険です！相手は警護がいる屋敷をたつた二人で六つも崩壊させ

た人間です。せめて地下牢に入れた後にしてください！」

伯爵は、それもそうかと考え直した。すでに捕まっているということは今後煮るなり焼くなり好きにできるということである。ロンドン警察になんか渡さずにこのまま拷問にでもかけてやれる。恐怖に怯える様を存分に楽しんでやろうとほくそ笑む。

「いいじやろつ、その者達を地下牢に閉じ込めよ。ワシも後からそちらへ向かう。思い知らせてやるぞ、ハハハハハッ」

伯爵はまだ気付いていない。

大樹は相手のプライドを完全に砕き、二度と妙なことができないよう徹底的にやるつもりであることを。

そして、人間は得意の絶頂にいる場所から叩き落されたときが一番絶望するということを、伯爵は知らない。

数分後、伯爵の前には後ろ手に手錠をかけられロープで何重にも縛られて身動きができない大樹と古の姿があった。

「何を考えているアルか師父！なんでわざわざ捕まる必要があったアル！いつもの調子で夜中に突撃すればよかったアル！」

「騒ぐな古。このほうが面白いじゃないか。というか、この六日間のお前は何をしていた。どうしてもやり返したいっていつからつれ

て来たのにいつも屋敷の外で呆然としているだけじゃあないか。全く、何をしにわざわざ10000kmもお前を担いで走ってきたと思っ
ている？」

「ワタシは師父みたいなびつくり人間じゃないアル！素手で石壁をぶち抜くようなことも銃弾を肉眼で避けることもできるわけ無いアルっ！」

「やれやれだ。俺は育て方を間違えたかねえ。俺が老師に師事していたときは雷を避けろとか言われたもんだが。なんでここまで自信がないんだか」

伯爵は齒軋りをした。この絶望的な状況を前にして、子供のほうはともかくこの男は何を世間話をしているのだ。これからありとあらゆる拷問をしてこの世に生まれたことを後悔させてやろうというのに恐怖心が全く感じられない。これじゃ興醒めだ。

なんとかしてこの男の顔色を変えたい。伯爵は必死に思考し、やがて何かを思いついた。

「ほほう、随分余裕だな。怖くないのか？」

「同じような事件が六回起こっても犯人を捕まえられない無能を怖がるのがイギリス流なのか？それは失礼、知らなかったよ」

痛烈な皮肉が返ってきて伯爵は額に血管を浮かべる。

「ふふ、なかなか言うな小僧。これからどうなるのか想像ができないわけでもあるまい？泣いて命乞いしたら考えてやら無くもないぞ？」

「これからどうなるのか、か。とりあえず一つ聞きたいんだが、いいかね？」

「なんじゃ？」

「イギリスでは家畜が言葉をしゃべるのが流行なのかね？俺は伯爵に用があつて捕まったのだが、待てど暮らせど現れず。先ほど看守に『伯爵様が来るまでおとなしくしている』と言われたからおとなしくしているのだが、何故食用豚がこの場にいるんだ？」

まじめな顔で毒を吐き続ける大樹。伯爵は何を言っているか理解できなかつたが、自分が家畜で食用豚だと言われてることに気付き、顔を真っ赤に染めながら怒鳴り散らす。

「な…な、なんだとっ！！！！貴様先ほどの口ぶりもう許せん！地獄を見せてやるからな！」

「だから地獄を見せる前に伯爵を見せたまえよ。それとも、俺の言葉がわからないのか？あいにくと豚の言葉はしゃべれないんだ。すまないね」

「減らず口をつ！もう我慢できん！この男を拷問部屋に連れて行け！ワシは戻るっ！衛兵、その男がぼろく図のようになって虫の息になつたらワシを呼べ、いいなっ！」

伯爵はドスドス歩いて牢から出て行ってしまった。あっけに取られていた衛兵はすぐさま正気に戻り大樹を引っ張り上げ連れて行こうとする。

「（古）」

急に呼ばれた古は大樹のほうを見る。大樹はニヤリと人の悪い笑みを浮かべて爆弾を投げつけた。

「（進級試験だ。自力でその状態から逃げ出してみせろ。今夜までは伯爵の私室で待っててやる。もちろん俺より先に行ってもかまわないがな。それじゃ、がんばれ）」

そういつて大樹は衛兵に連れられて行ってしまった。取り残された古はしばし呆然としていた。今までなんだかんだ行っても大樹が目につくところにいたが、今はいない。しかも縛られて手錠まで付けられたところから脱出してこいというのである。無謀もいいところであつた。

（落ち着くアル、師匠は修行に関しては有言実行。常に鬼畜みたいなことをやらせるが今まで絶対できないことは言われなかった。ということとは、限界まで力を出し切れれば脱出も可能…）

そう思つた古は一人縄と格闘するのであつた。

第16話（後書き）

大樹無双の予定がそんなでもなかった（汗
しかもだんだん大樹がはっちゃけてきた気がする。
コレくらいの方が動かしやすくていいけども。

次回は

古の大冒険 ドキドキ脱出危機一杯（決して危機一髪ではない）
をお送りしたいと思います。

アンケートですが、一つも回答がなかったので消去しました。お騒
がせしました。

それでは、また。

第17話（前書き）

古がどこぞの野菜戦士みたいになってしまった（汗
これも魔改造の一種なのでしょうか。

それではご覧ください。

第17話

大樹が牢から拷問部屋に連れて行かれてすこし時間が経ったころ。古は全身の気を高めていた。

大樹に言われた『進級試験』、それは今夜までにこの牢屋を脱出し伯爵の私室にたどり着け、というもので、そのための第一関門が縛られた現状からの脱出である。

身体能力の底上げをした上で縄と手錠を引きちぎり、脱出しようというのだ。

（うだうだ考えるのはもう止めアル。師父が言う以上出来ないと本当にイギリスで大道芸生活する羽目になるアル。ならば自らを信じて突貫するのみ！）

古はなるべく急いで向かおうとしていたが、本来ならば少し頭を使えばそこまで焦る必要はなかった。たとえば大樹が脱出騒ぎを起こした後の騒ぎに紛れたり、古にも尋問があるだろうからソレを待つてもいい。日が落ちてから行動すれば多少は騒ぎが小さくなったかもしれない。

しかし古は鳥頭の脳筋だった。一番辛い方法である、『即座に脱出、見張りその他を片っ端からなぎ倒す』という方法を選ぼうとしていた。（ちなみに大樹はコレを予想していたが、敢えて何も言わなかった。鬼畜である）

目を閉じて精神を集中する。縄は荒縄でかなり堅く、手錠は鋼鉄製。生半可な強化では引きちぎれないと古は全身の力を高め続ける。

「……………破っ！！！！！！！！」

カツと目を開いた古は、一声発して力を解放した。全身から爆発的に気が放出され、自分を縛る縄は一瞬で引きちぎれた。そのまま牢屋に崩券を打ち込むと、鉄製の格子は紙切れのごとく吹き飛び、正面の壁にぶつかる。

古の大脱出劇が始まろうとしていた。

牢の外にいた見張りは突然の掛け声と、その直後の破壊音に意識を切り替えた。しょせん子供だと思つて真剣に見張つていなかったのだが、今牢屋にはその子供しかいないはず。ならばこの音を引き起こしたのはその子供であり、それが意味することは明白である。

「だ、脱走だ！！！！襲撃犯の子供が牢を破つたぞ！！！！」

「わ、わかった。俺はすぐに近衛兵を呼んでくる！お前は牢屋に向かえ！」

二手に分かれ牢屋のほうへ向かった門番は、壁に叩きつけられた格子を見て驚愕していた。その後ろから忍び寄る人影にはもちろん気

付かない。

「隙有り！！！」

後ろから門番を強襲する古。もはやなりふり構ってられない。置いていかれたら大道芸人になるという思いが古の無意識の自信のなさを吹き飛ばしていた。

殺さない程度には一応手加減したが、大樹よろしく一撃で門番を吹き飛ばした古は門番の様子を見る。完全に意識を飛ばしていることを確認した後で地上への階段を探して駆け抜ける。

階段を登り一階に出た古は周囲を見回す。偉い人は高いところにいると漠然を思っただのでさらに上の階へ行くための階段を探しているのだ。

そこへ騒ぎを知らされた衛兵がゾロゾロと集まってきた。

「見つけたぞ！おとなしく捕まれ！」

「五月蠅いアル！そっちこそ黙ってワタシにやられるアル！！！」

もはや暴走状態にある古は衛兵の集団に踊りかかりなぎ倒していく。負けじと衛兵も応戦するが、身体強化をしている古は衛兵の攻撃を全て化勁でいなしていた。

（師父の攻撃に比べたこんな攻撃、止まっているようなものアル！）

いくら人数が多くても所詮雑兵。特別コースの大樹の猛攻に比べたら重さも速さも全部比較にならない。鮮やかにカウンターを極めて吹き飛ばし、ひるんだ相手には八極拳の一撃で床に沈める。

数分後、床には大量の衛兵が転がっていた。たまたま気絶が浅かった衛兵の胸倉を掴み、ホホを張り目を覚まさせる。伯爵の居場所を探すためだ。

「伯爵の私室はどこアル！！答えないと……おそろしいアルよ？」

目の据わった子供にそんなことを言われても、普通なら怖くもなんともないのだ。だが、周りで寝ている同僚が全員叩きのめされたこともまた事実である。観念した衛兵は伯爵の私室を教えたのだった。

「ありがとうアル！感謝の気持ちを込めて、痛い思いをさせずに気絶させてあげるアルね！」

「えっ……グハア」

哀れ衛兵は再び夢の国へと旅立ったのだった。

一方そのころの大樹。拷問部屋へと連れて行かれいざこれから尋問というときに周囲から喧騒が聞こえ始めた。

（古のヤツ、やっぱり正面突破を選んだか。流石鳥頭だ。それじゃ俺もそろそろ動くとするかね…）

周囲を見てみると尋問官は慌てふためいてこちらに一切注意を払っていない。

ため息をひとつ吐き、ロープを引きちぎる。たまたまこちらを向いた尋問官と目が合い、苦笑いする。

「さあ、お休みの時間だ。何、骨の一、二本折れても死にはしないさ。めちやくちゃ痛いけどな」

「ひ、ひいつ！！」

逃げ出そうとするので一瞬で回り込んで正面に立ち、鎖骨に向かって拳を振り下ろし、へし折った。痛みで尋問官は泡を吹いて気絶する。

そのまま全員潰すのに一分もかからなかった。

「さーて。高みの見物としますかね」

気配を消して、喧騒のする方角へとゆっくり向かう大樹であった。

再び古のほうへ話を戻す。

古は楽しくなっていた。目の前に何人雑兵が来てもやっぱり一撃なのだ。今まで大樹にコテンパンにされた記憶がないので、非常に愉快である。つい調子に乗って周囲の調度品も壊して回りながら伯爵の下へ向かう古。実にいい笑顔である。

「そこまでだ。ガキにこれ以上好き勝手させるわけにはいかん」

不意に目の前の通路に一人の男性が見えた。片手には短銃をもち、逆の手にはかなり大振りのナイフを持っている。現代でいうCQCスタイルに近い姿だ。

古は足を止めた。調子に乗っていた気分が瞬時に冷静になる。目の前の男はいままでの雑魚とは違うということが空気でわかった。もしかすると今の自分より強いかもしれない。

初めて他人から殺気を感じて少し身震いするが、もともとバトルジャンキーの性質である古は自らを奮い立たせる。

「そこをどくアル。ワタシは伯爵に用があるアルよ。」

「その伯爵からの命令だ。二人とも殺せ、とのことだ。だからお前は、ここで終わりだ…」

言い終えると男は気配を消し、こちらに向かってきた。移動しながら短銃を乱射してくる。銃身の向きでかろうじて弾丸を避けた古に、男は肉薄していた。

大降りのナイフが乱れ舞うが、かろうじて古は避ける。

「その程度の攻撃なら当たらないアル！おとなしく退くアルね！」

「ふん。油断していると足元をすくわれるぞ、ガキ」

突如カーテンの陰から別の男が飛び出し、古の右腕にナイフを突き刺す。痛みに動きが一瞬とまり、底を狙って銃弾が飛んでくる。今度は交わすことができず、左足を貫いた。

たまらず後退する古だが、男達は敢えて追い討ちをかけてこなかった。

「俺一人だと思っただか？」

「油断しているからそうなるのだ」

全く同じ容姿をした男達がステレオで話しかけてくる。どうやら双子らしい。武器を持つ手も全てが同じなので間際らしいことこの上

なかった。

（くっ、右腕のナイフは抜かなければ出血はそれほど酷くない…が、左足はまずいアル。痛みに動きが鈍ってしまう…短期決戦を選びたいアルが、実力は相手のほうが同等以上、しかも二人。正直手詰まりアル…）

油断していた自分が悪いのはわかっていた。なのでひとまず冷静に現状の分析を行う。傷は浅いが血が止まらない。短期決戦をしなければならぬが焦りは相手の思う壺。なので、敢えて待ちの戦法をとる。

「動かないつもりか？」

「俺達が銃を持っていることを忘れてやしないか？」

（忘れているわけじゃない。ただ、焦って動き続けるよりカウンタ―狙いのほうが楽なだけアルよ）

死が近づいていることがわかると、古は余計に冷静になっていた。そして、自分ができることをひたすら考える。戦闘限定での頭の冴えで、逆転の手段を考える。

（動き続けるのは愚策。こちらから攻めずに遠距離攻撃を封じることさえできれば相手は必ず近づいてくるアル！銃弾を避け続けるのは賭けアルが…）

先ほどまでの銃弾を思い出す。大樹の攻撃と比べて見るが、大樹の攻撃よりは避けやすかった。

（師父の攻撃のほうがよっぽど避けられないアル！あ、もしかして、もっと気を強くすれば一時的に血止めができるかもしれないアルね。師父が気をうまく使えば硬気功も発動させられると言っていたし…）

大樹の言葉を思い出し、目の前の敵から目を離さず、それでいて深く呼吸を取り気を練り続ける。いつしか左足の銃創の出血は弱まっていた。男達は出血が弱まったのを見つけ、慌てて銃を撃つが、極限まで集中している古にはあたらならない。紙一重の移動で避け続ける。

（コレが硬気功…脚のケガの痛みも若干引いた…それでも、実力は相手のほうが上と思っていたほうがいいアル。ここは方針変更せず、待ちの構えアル）

バトル脳が出した結論を支持し、自分から攻めには転じない。古がまた一つ成長した瞬間だった。

一方双子のほうは内心焦っていた。初め油断していたときに一撃浴びてあとはなぶり殺しのはずだったのに、今ではこちらの銃弾がカスリもしないのだ。しかもなんか相手の体からオーラのようなものが立ち上がり、出血も弱まりだしている。そろそろ攻め方を変えないといけないと思いつめていた。

（俺が飛び込むから、お前は銃で牽制。俺が接敵後にお前も突っ込め。おそらく二人で囲めばなんとかなるだろう）

（わかった）

銃弾をリロードした男達は即興で打ち合わせた内容どおりの行動をとる。

この男達は一つ理解をしていなかった。一度の戦闘で急激な成長を遂げるような天才が世の中にいることを。

確かに古は戦闘前なら男達より格下であった。だが、一度ケガをしてバトル脳が活性化した結果、今では心構えで男達を大きく上回っていた。油断も慢心もなく、ただ己の出来ることを模索した結果のカウンター体勢と焦れた拳句の攻撃では、勝敗は決まっていたようなものだった。

飛んできた銃弾をわずかな動きで回避すると、男が突っ込んできたタイミングをずらしてもう一人もこちらへ向かってくる。

瞬時に飛んでくるナイフを前転で避け、二人の中間地点に行く。立ち上がることなく水面蹴りを後続の男に入れてこけさせる。

「何！」

「しまった！」

先に攻めてきた男が後ろを振り向くと、男が床に転がされる瞬間が目に入り、再び古から一瞬目を離す。

その隙を今の古は逃さない。いまだしゃがんだ体勢なので、そのままバク転をする要領でサマーソルトキックを顎先にぶち込んだ。

「がっ！」

脳を揺らされた男は白目を向けて後ろに倒れこんだ。古は寸前に蹴った男に残心しつつ、その場から飛びのく。今までいたところを銃弾が通り抜けた。床に転んだ男が撃つたのだ。

「後ろからの銃撃を避けただと！馬鹿なっつ」

「無駄口叩いている暇があったら、さっさと起き上がるべきだったアル…」

避けた勢いそのままに壁を蹴って高く飛ぶ。天井に向かって着地し、落ち始める前に天井を蹴り加速。重力と蹴りの勢いが乗った肘が男の腹にクリーンヒットし、一声うめくと男は気絶した。

（どうやら、心配無用だったか。しかしあのバトル脳は目覚めるのが遅い！もう少しで加勢するところだったじゃないか）

こちらはこっそり覗いていた大樹である。口では酷いことを言いつつもやはり心配だったのか、見つからないように観戦していたのだ。

（これで古も一皮剥けるだろう。100の訓練よりも1の実戦のほうがより成長をする。見事だったぞ、古。さて、俺も伯爵のほうへ

O H A N A S H I しにいくとするかね)

翌朝のこと。ロンドンの時計塔の文字盤に全裸で縛り付けられた伯爵が発見される。犯人の情報を得るために伯爵の下に向かったロンドン警察は、「赤眼怖い赤眼怖い…」とうなされる伯爵に手を焼くことになるのだが、それはまた別の話。

第17話（後書き）

これで伯爵のオシオキは終了！

感想でも言われましたが、一般人相手に魔法抜きで戦闘させると、ネギま要素がゼロに（汗

ともかく、次回、後始末と帰郷で中国武術編は終わらせます、絶対…
それでは、また。

第18話

「……………というわけで、その後ワシと師父は再びアジア大陸を走って横断し、香港に戻ってきたのじゃ。めでたしめでたし」

「婆様、すごいアル！婆様と師父の昔話は本当に面白いアル！！」

そうかそうか。それならばこの古蓮、曾孫に昔話を語った甲斐もあるものじゃて。

…あのころは日々が輝いておったなあ。毎日朝から晩までが師父との鍛錬の日々。あの日々があつたからこそ今の古家があるのじゃから。

1960年の香港。古蓮は曾孫達に囲まれて老後を送っていた。

大樹との出会いからすでに100年以上の年月が経っていた。大樹は古が25歳になったときに免許皆伝を授け、そのまま姿を消したのだ。屋敷と土地の権利書と道場の看板は皆伝祝いで大樹から相続した。そのころには当時の仲間も皆成人し、中国各地へと散っていた。古だけは大樹に教えを受け続けていたのだが。

（あのころの仲間も皆逝った。ワシが最後の一人、か。師父はまだ元気であろうか。最後の別れの時に『俺は不老だからな。いつかお前の子孫と会つかも知れんな』とか言ってたのう。今にもひょっこり帰ってきそうだから始末が悪いわい）

思えば自分の初恋は師父だったのかも知れないと古蓮は回想にふける。イギリスで初めて実戦を経験したとき、実はこっそり覗いていたと聞いた。あの時は大喧嘩になったものだ。

（こつも昔を思い出すのは、ワタシの死期もそろそろなのかもしれないのう。死んだら師父にまた会えるのかのう。いや、師父のことだ、ワタシが死んで会いに行っても叩き出されるのが目に浮かぶわい）

古は子供や孫、曾孫には事有る毎に自分と師父の体験談を昔話として聞かせた。今の古家は中国武術の名門といえる名家であった。大樹が起こした道場は今でも古家の本邸とその道場として使われており、古家の者は誰もがこの道場で修業をしていた。

もつとも、古蓮のような武術と気を扱う天与の才能は古本人以外誰も持っていなかった。武術の技術については秘伝書として代々の当主が保管しているが、気の習得と運用については古蓮が後年書き綴った日記にしか記されておらず、その日記は先ほどの曾孫に渡してしまったのだ。

（あの子が曾孫の中では一番才能があったからのう。とは言え、気を発現できてはおらなんだから使えはしないじやろうが。まあ、ワシの形見分けとなれば捨てはしないじやろうて。…師父。ワタシが貴方から教わったモノは全て子孫へと残しました。これでワタシも安心して旅立つことがです。もし師父が死んでいたら、あの世でまたワタシに武術を教えてください。今度こそ、師父に組み手で勝つてみせます故に…）

そう思い、揺り椅子に沈んでいると、窓側から懐かしい声が聞こえた。

「バーカ。いつまで経っても弟子が師匠に勝てるわけねえだろうが」

「フッフ、そうだ！私のタージュに勝とうなどとは片腹痛いわ！」

「エヴァは少し静かにしている。初対面だろうが！」

ハツと窓のほうへ向き直ると、そこには100年前と同じ姿をした大樹と、金髪の西洋人形みたいな少女が立っていた。

「…師父の幻覚に幻聴か。私も今日で最後かな」

「…お前、師父の顔を忘れたとはいいい度胸だ。久しぶりに特別コース逝ってみるか？」

そういうと大樹は古の頭を撫で付ける。もう頭を撫でられる年齢じやなくなつて長いが、撫でた大樹の手は昔と変わりがなく古に昔を思い出させていた。

「…感触がある。夢じゃない？」

「だから、俺だつて言つてゐるだろう。お前を担いでアジア大陸を横断した大樹だ。お前に武術の全てを教えた大樹だ。…もしかしてボケてるのか？」

「タージュ、そんなことを旧世界でしたのか？魔法の隠匿義務を知

っているだろうに」

「ああ？そんなものMM連合の魔法使い選民主義の産物だろ。それに、100年以上昔の話だ。当事者はコイツだけだし、認識阻害もかけていた。あの当時ならまだ夢物語で済んでいたし、もう時効だろう？」

「ふん。確かに。結果に責任を負うなら、私からタージユに言うことはないぞ」

「…本当に師父アルか？」

「お、ようやく昔の口癖が出たな。その口癖矯正するの、随分苦勞したからなあ…」

目の前で言い合う大樹とエヴァと呼ばれていた少女。幻覚だと思っていたらどうやら本人らしい。しかも、本当に全く老いていなかった。

（師父は仙人だったアルか…それならあの強さも納得アル）

「師父。何故今更私の元に？」

「ん？現世での始めてとった弟子の最期を見に来ちゃ悪いか。ていうか、お前以外にもあの当時のやつら全員の最期は見届けたぞ？」

「…タージユ。本当に何をしているんだ？老師達も言っていたぞ。『大樹は古い先短いワシらを放ってどこへ行っておるのじゃ』とな」

「…老師達に老い先なんてあるわけないだろうが。猿にいたっては最近『最下位はフルボッコ麻雀』にはまって大変なんだぞ？何ならエヴァが変わるか？麻雀の腕は上がるぞ？」

「…私が悪かったから、その麻雀に巻き込むな。命がけの麻雀なんてしたくないぞ」

（…私たちは結局最期まで師父に見守られていたというわけか。つくづく良い師父を持ったもんだ）

大樹とエヴァの漫才を見る古はさりげない大樹の面倒見のよさに感動していた。

「…大樹師父。私の最期の願いを聞き届けてほしいアル」

「なんだ？出来ることしか出来ないがソレでよければ聞いてやる」

「なに、簡単なことアル。黄泉路への餞別に、私と組み手をしてほしいアル。最期まで勝てなかったことが唯一の心残りアルからな」

「なっ、貴様正気か？その老体でタージュと一戦やるなんて…そうか、気の活性化を使えば！」

「エヴァさんとやら。ご名答アル。気の扱いを極めると、極限まで気を練った時に肉体が最盛期に一時的に若返るアル。その代わりに大量の気を消耗するアルが…」

「古。言っておくがそれをやったら確実に死ぬぞ？お前の年齢じゃ消耗に耐えられない。それでもいいのか？」

「愚問アル。私が師父から教わった全ては子孫に残した。もう現世に師父以外の悔いはないアルよ」

そう言つて微笑む古。その笑顔は100歳を超える老婆には見えな
い、華のような笑顔であつた。大樹とエヴァは顔を見合わせうなず
くと、再び古を見る。

「わかつた。ならばタージユの娘である私が立会い人をやるう。場
所はこの家の道場でいいな？人目に付くと後々面倒だから、深夜に
道場に来い。誰の邪魔もさせないよう結界を張つてやる」

「感謝するアル。…ところで師父。娘さんがいたアルか？」

「昔いろいろあつてな。それじゃ古。また後ほど」

告げるべきことを告げると大樹とエヴァは窓から脱出していった。
残された古は今夜の組み手に思いを馳せる。その顔は、恋人との逢
瀬を夢見る少女のようだった。

深夜、古家の道場。

家の者が寝静まつたあとに古蓮はこっそり起き上がり、道場に向か

う。扉を開けるとそこには昼間みた二人が立っていた。

「師父、待たせて申し訳ないアル」

「いや、イイ女を待つのは男の特権だろ？」

冗談で返してくる大樹に懐かしさを感じる。昔はこの道場で何度も師父に転がされた。喧嘩もしたし、言い合いだってした。そのたびに口車にごまかされたこともあった。

（思い出に耽るのもこれで最期アル。我只要和師父闘（私が望むのはただ師父との戦いのみ）。今までの思いを全て、この拳に乗せるアル！）

回想を打ち切り、思考を戦闘モードに変えていく。数十年のプランクがあっても古のバトル脳は健在だった。知る限りの師父の能力を思い出し、ただただ一撃を当てることに全ての思考を割いていく。

「古。長期戦はお前に不利だからチャンスやる。俺の、この世界にあわせた本気の一撃を今から繰り出す。ソレをどうにかして見せる。化勁で避けてカウンターでも、先の先をとってもいい。その辺りはお前に任せるさ」

「そこまでしておいて、負けても知らないアルよ？」

「…よく吼えたなあ。だがかまわんよ。さあ、これが最期の試験だ」

そういうと大樹は数歩下がって身構えた。エヴァが中央に立ち、両者を見る。

「二人とも準備はいいか？」

「…いつでも」

「こつちもOKアル」

「よろしい。ならば…始め！」

開始の声と共に古の全身を大量の気が包み込む。エヴァが目を凝らして見ると、7つのチャクラが全て開放されていた。

（ほほう、人の身で頭頂のチャクラまで開くとは！武術を修める人間がこのような逸材を逃すわけがないか。ふふふ、待ちぼうけを食らったことを忘れてやってもいいぞ、タージユ）

そんなことを考えつつ、周囲に気を配る。気が収束し終えたとき、老婆の姿の古はそこにおらず、二十代のエキゾチックな雰囲気を出したスレンダーな美女がそこに立っていた。

大樹はそれを確認してから全身の力を抜く。あえて構えないことで攻撃の初動を悟らせないつもりなのだ。

それを見た古は半身になって構えを取る。あくまでカウンター狙うつもりだよつだ。

張り詰めた空気の中、外から鈴虫の鳴く声が響く。音が止んだ瞬間、大樹の姿が消えた。

直後、古の目の前に大樹が現れ、超高速の体当たりが迫る！

（今アル！）

体当たりが直撃する瞬間、古は自然な動作で一步下がり、右手で大樹の肩に触れ受け流した。体勢が流れ、一瞬の隙がそこに生まれる。古は強烈な震脚で前に踏み込み、崩拳を打ち込んだ。

.....

「随分安らかな死に顔だったな」

「当たり前だ、俺に実力で一撃入れるような一般人だぞ？あれ以上を望まれたらこっちの立つ瀬がないさ」

月明かりの下、道場の屋根の上で盃を交わす大樹とエヴァ。今、道場では古蓮の通夜が行われていた。

古家の始祖であり、武術を極めた者の通夜をする場所としては道場が一番であろうと縁故のある全員の意見が一致したため、この運びとなったのだ。

「さて、エヴァ。仙域に帰るぞ。そろそろ老師が騒ぎ出すころだ」

「そのことだがタージュ。私はこのまま魔法世界に行くことになっている。ということで老師の相手を頼んだぞ」

「…どういうことだよ」

エヴァによると、最近自分宛にアリアドネー現総長から手紙があった。最近魔法世界の情勢が不安定になっている。しかもMM連合とヘラス帝国の関係が緊張状態になっており、司書殿には情報収集をお願いしたいということらしい。

「私にもいろいろとしがらみがあるのだよ。あの国にはいい思い出も悪い思い出も両方たくさんあってな。できれば無くなってほしくないんだ」

「俺は行かなくていいのか？」

「必要ないだろう。戦争をしに行くわけじゃあるまいし。ということで、たまには待たされる方の気持ちを学んでくれ、お父様？」

チェシヤ猫のような笑いを大樹に向け、エヴァはふわりと空に浮かぶ。大樹に向かって一礼するとそのまま遠くに飛び去って行ってしまった。

「…さあて。老師への土産を買って帰るとしますかねえ」

第18話（後書き）

というわけで、中国武術編終了です。

いやー前回と違って筆が進む進む。この差は一体なんなんだろうw
ということで、次回はお待ちかね？の『エヴァたんの大冒険〜仙域編〜』をお送りする予定です。

調子がよければ今夜には投稿できると思います。

最近PVとユニークの増え方がすご過ぎです。

皆さん、つたない小説ですがご愛読していただいてありがとうございます。

それでは、また。

第19話 挿話之2 エヴァたんの大冒険〜仙域編〜（前書き）

前回そこそこ反響が良かったエヴァたんの大冒険 part 2です。

第19話 挿話之2 エヴァたんの大冒険〜仙域編〜

月×日

アリアドネー禁書庫の主として司書になってからさらに数十年が過ぎた。そろそろ一度タージュと合流してもいい頃合かと思い、総長の執務室に足を運ぶ。

たまたま私の親友の孫娘が同席していた。こいつは私を母親に悪影響を与えたとして目の敵にしている。

私がどう思われようと構わないが、アイツを悪く言うのは我慢がならないので視界に入れなかった。

本題の件だが、総長は快く私の出発に同意してもらえた。隣がなにやら騒いでいたが。

一応の連絡手段として世界をまたいでも反応する魔法具を渡した。動作していれば私の居場所がわかるというものだ。これで手紙のやり取りくらいはできるであろう。

月 日

荷造りをしていたら親友の孫娘がやってきた。忙しいので追い返そうとしたが、頑として出て行かなかった。

こいつは旧家の娘だから、余計母親が真祖の吸血鬼と仲が良かったことが許せないのだろう。

面倒くさくなつたので私にどうしてほしいのか聞いたら、司書の座を辞せと言ってきた。

司書の立場に未練などないが、これは私とアイツの絆でもある。も

ちろん断った。

ならば私と勝負しろと言ってきた。いい加減決着をつけてしまいたかったので一週間後に彼女と魔法勝負をする。私とアイツの思い出の箒レースだ。今更箒で飛ぶ必要なんてないのだが、軽くあしらってやるとしよう。

月 日

少し気になったので孫娘のことを調べてみた。

どうやらアイツの家はそれなりの名門で、アイツは将来を期待されていたらしい。

だというのに吸血鬼と友誼を交わしたことで名門の名前に泥を塗ったと周囲の親族が事有る毎に孫娘にもらしていたようだ。

名門の名前などという意味もないものに囚われるのはそいつらの勝手だ。アイツはそんなことを一度も私に言わなかった。そういえば、常に自分の実力だけで周りと勝負していたものだったな。

一度アイツのことを話してやるべきなのだろう。アイツは孫娘をとっても可愛がっていた。

ならば私も、一度くらい気にかけてやってもいいはずだ。

「スナオジャネエナ、ゴ主人」

毎度毎度日記に映るな駄目人形め。

月 日

今日は孫娘との勝負の日だった。

結果は勿論私の圧勝だ。そもそも第での飛行速度からして違っし、武装解除の発動時間もまだまだ長い。

後で難癖を付けられないように総長に立会いを頼んでいたのだが、予想通り難癖をつけてきた。

総長がとりなし座らせていたが、やはりアイツのことを話すべきだと思い総長と一緒に話を聞かせた。

アイツが自分の家名など気にもしなかったこと。

アイツは人と付き合うとき、必ずその人個人を見ていたこと。

私が50年の間に隣で見続けていたことをずっと語り続けた。最後には泣いていたな。

後の始末は総長に任せ、私は部屋に戻った。

これでやっと出発の準備に取り掛かれる。

月 日

今日は旧世界へのお発の日だ。アリアドネーにもゲートがあるから移動が楽でいい。

ゲート前に孫娘がいた。また面倒事かと思っていたら、どうやら実家を出ることにしたらしい。

家名に拘る親戚に付き合っていたらなかったんだとか。セブンシーブ家も優秀な跡取りがいなくなって、てんやわんやであろう。いい気味だ。

祖母の形見分けだと、ダイオラ魔法球を渡された。私はアイツから貰ってばかりだな…

月 日

旧世界に戻って数ヶ月。ようやく霊符が示す仙域の場所に着いた。確かにこの空間はマナの濃度が桁違いだ。

何か来るかと思いきやチャチャゼロと待機していたが、結局その日は何も起こらなかった。

「ハヤク、イキモノヲキラセロヨ。ゴ主人」

この馬鹿人形はもうどうしようもないと思った。

月 日

なんだか怪しげな猿が襲ってきたのでチャチャゼロと応戦した。なんだあの猿は。動きが段違いに素早い。しかも動きにどことなく見ええがあった。一体なんだったのだろうか。

なんとか氷漬けにできたが、危なかった。油断はするものではない。

「ナアゴ主人、ナンデ、オレマデコオリツケナンダ？」

頭を冷やして自制心を学べということだよ、チャチャゼロ。

月×日

今度はなにやら怪しげな爺がやってきた。魔法で叩き潰そうとしたが、その前に話しかけられた。

どうやらあの猿も含めてタージュの師に当たる人物だったらしい。昨日の無礼を謝罪したが、何も言わずに飛び掛ったバトルジャンキ

「な猿が悪いと笑って許してもらえた。

なんでももう一人大樹の師がいるらしいが今日は来ないようだ。

タージュの娘だと言ったら、ワシらの孫も同然だと洞府に滞在を許可してもらえた。昔タージュが使っていた部屋をそのまま使わせてもらった。

早くタージュに会いたくなっただじゃないか。

月 日

今日はタージュの師である最後の一人がやってきた。見るからに胡散臭い笑顔を浮かべた優男だ。しゃべり方も敬語で胡散臭い。よくこんな一癖も二癖もある人物達に教わって性格が曲がらなかったものだ。

「のう、猿よ。あの娘どう思う？」

「ああ、大樹の娘とかいう異人の娘か。アイツは俺達神仙とは違った意味で人間じゃないな。妖混じりとも言えるのか…」

「ええ。ですが、非常に弄り甲斐がありそうな素材ですねえ」

「やはりそう思うかの？大樹がいなくなってしばらく経つが、最近暇で暇で、新たな生き甲斐を探していたところなのじゃよ」

「……やるか？」

「ええ。楽しみですねえ」

月×日

今日は酷い目にあつた。猿が突然現れて問答無用で鬼ごっこをした。私の知ってる鬼ごっこは鬼を捕まえるゲームだったはずだが、猿は『捕まえたああああ！！！！！！』と言って拳が飛んできた。いろいろと有り得ない。

やり返してもいいということなので、チャチャゼロを盾にしつつ氷漬けにしてみた。

夜中にチャチャゼロと猿が酒盛りをしていた。なんでもバトルジャンキーと刃物愛好家は通じるものがあるとか叫んでいた。

なんでここまで従者の人形に悩まされなければならないのだろうか？

月 日

昨日に続き、今度は優男がやってきた。魔法で追い返そうとしたらタージュのように魔法を無効化されてしまった。

陰陽術というらしいその技術は対属性攻撃に特化しており、どんな

属性の攻撃も大体無効化できるらしい。

わざわざ私が休んでいる横に立ち、泣ける物語百選を話し続ける。
黙らせるために攻撃するが胡散臭い笑顔で全て無効化されてしまう。
こいつとは相性が悪い…

チャチャゼロは猿と二日酔いで寝ていたので役に立たなかった。タ
ージュに会えたえら新しい人形を頼もう…

「ヒドイゼ、ゴ主人」

もう何も言つまい。

月 日

今日は爺がきた。なんでも「ワシら三人暇で暇でしかたがないから
遊び相手になってほしいんじゃ」だと。

断つてもいいが、どう転んでもろくな事にならない予感しかしな
ったので、タージュがここに帰ってくるまでの滞在の許可と引き換
えに遊んでやることにした。

爺はそれだけ約束したら帰っていった。

タージュが私に両手を合わせて拝んでいる夢を見た。…私は選択肢
を間違えたのかもしれない。嫌な予感しかしなかった。

月 日

早くも昨日の選択を後悔している。

今日は猿がやってきた。この腕輪をつけて闘おうと言うので拒否したら、チャチャゼロに後ろから手首に着けられてしまったのだ。そうすると、魔力が一切体外に出せなくなった。

どういうことか聞いたら、なんでも魔封じの腕輪というらしく、装着者は魔力が体外に出せなくなるらしい。

非常にイイ笑顔で説明をしてくれた猿は、説明が終わった瞬間如意棒で連突きをしてきた。タージュにならった化勁で交わし続けたが非常にハードな一日だった。

チャチャゼロはオシオキに氷漬けの刑だ。

月×日

あの爺と約束をしてから数ヶ月。この期間に何度死に掛けたかわからない。

最近は将棋が流行らしく、勝者は敗者に手加減なしの一撃を入れるというルールが厄介すぎる。

おかげで将棋の腕がメキメキと上がっている。ここに来て悟ったこと。それは、この三人は全員バグキャラだと言うことだ。流石タージュの師なだけはある。

言ってるそばから遠くで破砕音が聞こえた。おそらくチャチャゼロが将棋で負けたのだろう。雷が鳴ってないから相手はおそらく猿だと思う。

修理しても面倒事しか起こらないから放っておいた。

月 日

昨日チャチャゼロを放置したことを後悔した。この一言に尽きる。なんでも優男に修理してもらったらしいのだが、陰陽符を体に仕込まれある程度の魔法を無効化し、猿の体毛を編みこんだために体術が格段に上昇した。仕上げに爺が仙丹を食わせたため、魔力供給がなくても動けるようになったのだとか。

…どんな魔法使い殺した、この人形。無効化を上回る威力の魔法が、達人級の体術でも使わない限り攻略不可能だぞコイツ。

「ひでえな、ご主人。自分の従者だろ？」

…言語中枢も直しやがった。もはや原型をとどめてない。久しぶりに泣きそうだ。タージュ、こんなバグキャラになんで師事したの？

.....

月 日

仙域に来て、もう何年たったかわからない。それほど長い間、私はひたすらに3バグの相手をしていた。猿の魔封じの腕輪対策に、魔法を発動させずに体内に取り込む『闇の魔法』という技術を完成させたし、優男の無効化を超えるため魔力の運用の効率化を突き詰めたりもした。

爺の相手は一番厄介だ。大抵3バグと私の四人でゲームをするのだ

が、前述のルール付き将棋だったり、囲碁での目数の差だけ無防備に攻撃を入れられるとか、敗者は勝者の言うことを一つ強制的に聞くというルールもあったりしたな。主に優男が私に妙な衣装を着せて酌をさせるのに使用していたが……。もちろん勝ったときに九割九分九厘殺しにしたが。

もはや全てが命かプライドを賭けた戦いだった。まあ、大怪我しても仙丹で回復できるから構わんのだが。

しかし、普段攻撃を通すのが大変な優男も負ければ防御禁止だからな。

おかげでテーブルゲームなら並大抵の人間には負けにくいくらい強くなった。やはり命がけになれば人間できないことは無いものだな。

3バグ曰く、タージュはこの大陸に十数年前からいるからそろそろ帰ってくるだろうとのことだ。

あの別れからもう数百年たった。私もいろいろ成長した。会ったのが本当にたのしみだな。

後日、大樹も巻き込みゲームが過激化したことは言うまでもない。

第19話 挿話之2 エヴァたんの大冒険〈仙域編〉（後書き）

はい、エヴァたんの受難です。

いやーエヴァたんはいじりやすい。そして三老師はめでたくバグキヤラ化。

でも本編には絡ませません。收拾付かなくなりますので。

番外で出てくるかもしれないけど、先の話はわかりませんからね。

ようやく次回から大戦編…長かった。

原作改変は…一つ大きなことをする予定です。
適度に期待しててください。

それでは、また。

第20話（前書き）

いよいよ大戦編！！

作者のテンションがうなぎのぼりです。
それではどうぞ。

第20話

エヴァが魔法世界に旅立ってから20年、いまだエヴァは戻ってこない。

とは言っても、三老師によってバグキャラ化したチャチャゼロが護衛として付いてるし、エヴァ自身も『闇の魔法』と斉天大聖によって鍛え抜かれた化勁の防御がある。回避＋遠距離火力特化のエヴァと魔法防御＋近接特化のチャチャゼロのコンビネーションなら対個人々対軍戦までオールマイティに対応できるだろう。だからそれほど心配していなかった。

三老師との地獄麻雀の最中に、事件は起きた。

ボロボロになったチャチャゼロが飛び込んできたのだ。すぐさま泰山府君が仙丹を準備しチャチャゼロに塗りこむと傷は回復した。しかし消耗が激しいのかしゃべるのが漸くといったところだ。

「助かったぜ、タージユ。あと悪いがお願いがある。ご主人が敵に捕らわれた」

「お前とエヴァのコンビに土をつける相手がいるのか？そいつは強いな」

「不意を疲れて俺が行動不能になっちまった。んで、再起動する前にご主人が捕縛結界で動けなくされて石化の邪眼をくらったんだよ。タージユ、ご主人を助けてくれ。この通りだ」

「お前がそこまで言うのも珍しいな。そういえば、エヴァは魔法世界の情勢を調べていたんだっただ。どうだったんだ？」

「ああ、ご主人はMM連合とヘラス帝国の上層部を調査していた。結果から言うと、両国の上層部にある組織の息がかかった人間が多数まぎれていた。ご主人はそのままその組織の調査に入ったんだが、どこかで感づかれたみたいだ」

「組織、か。その名前は？」

「『完全なる世界』と呼ばれている。それ以上の内容はご主人しか把握してねえ。俺だと万が一の場合情報を抜かれるからな」

人形であるチャチャゼロは魔法抵抗が人間よりも多少低い。だからこそその陰陽符と魔力による強引な強化なのだが、魔力供給をカットされるとその弱点が浮き彫りになるのだ。

「わかった。すぐさま準備して魔法世界に向かうとしよう。まあ、不死身の吸血鬼にもしものことはないだろうが、早いに越したことは無いからな」

かくして、大樹は再び魔法世界に足を踏み入れることになる。

魔法世界・ヘラス帝国辺境地域

以前にケルベラスから首都へ向かうときに通ったルートから少し外れた場所にある砂漠地域。チャチャゼロから得た情報によると、この砂漠地域にエヴァは幽閉されているらしい。そして、砂漠の周辺にあるキャラバンには砂漠を探索するための装備に身を包んだ大樹の姿があった。

「さて、この砂漠にエヴァがいるらしいが…広すぎだろこの砂漠」

そう、この砂漠は魔法世界で一、二を争う過酷な環境と広大さで有名であり、通称”死の砂漠”と呼ばれていた。昼は50度を越え、夜は氷点下まで下がる。その寒暖の差やオアシスの少なさ等、簡単に人が死ぬ要因がとても多いのだ。

「さて、とりあえずはしらみつぶしに砂漠を探すしかないか」

エヴァを救出するため砂漠の搜索を開始したのだった。

しかし、搜索は難航した。何分砂漠が広すぎるのだ。しかし、そこは不老の大樹である。エヴァもチャチャゼロの話によると石化しているだけらしいので救出が遅れて死亡という心配はしていなかった。

そして、数ヶ月。もう少しで年が明けるところ。

大樹は漸く怪しい場所を見つけた。と、いうより、砂漠の上には隠れるような場所が一切なかったのだ。そこで視点を変えた。地上が駄目なら地下なのではないか？

そう考え改めて砂漠を探索すると、アリ地獄が多発している地域がいくつかあり、魔力を探查してみるとその中の一つで、微弱なエヴァの魔力が発せられていた。

「ようやくか。しかしこの場合、アリ地獄に入らなくちゃいけないってことだよな」

アリ地獄を見つめ、覚悟を決めた大樹は反応のあった場所に飛び込む。すると、転移魔方阵が発動し、別空間に移動した。

移動した先は洞窟の中だった。先ほどの砂漠に比べて寒いほどの冷気を感じる。どうやら一本道のようで、道なりにひたすら進む大樹。しばらく進むと大きく開けた場所に出た。その中央には、やはり石像と化したエヴァの姿があったのだ。

「漸く見つかったか。後は泰山府君謹製の解呪符をえエヴァを貼り付けるだけだが…」

（俺が敵なら、畏の一つは準備しておくが、はたして…）

ゆっくりと近づき、エヴァに解呪符を貼り付ける。エヴァの石像が光に包まれ、大樹は思わず目を細める。

光が落ち着いたので再び視線を向けると、石化解除に成功したエヴァの姿があった。

「おいエヴァ！目を覚ませ！」

「…ん、むう。タージュか。何故ここに…」

「チャチャゼロに頼まれた。さあ、帰るぞ」

「ああ、助かつ…タージュ、後ろだ！」

『障壁突破・石の槍』

突如大樹の背後に石の槍が出現し、大樹に襲い掛かった。死角からの完全な不意打ちに、エヴァは思わず目を閉じたが

「木剋土、土行は木行により相剋される…」

陰陽符を使い周囲に雷を発生させて石槍を全て分解した大樹の音が響いた。

「予想通りの展開だな。そこに隠れているのは誰だ？」

「…まさか僕の魔法を無傷でレジストするとはね。アリアドネー禁術書庫初代司書といい、イレギュラーが多すぎるな。君は誰だい？」

奥の暗がりから声が聞こえ、白髪、長身で白いスーツを着こなした男が姿を現した。

大樹は男の方に視線を移し、エヴァをかばうように立ち位置を移動し、戦闘体勢をとる。

「敵に自分の情報を教える馬鹿がどこにいるんだ、『完全なる世界』の刺客さん？」

「僕達の組織の情報まで持っているのか。…君達はここで始末させてもらおう」

「ふん、不意打ちでしか攻撃できないヤツが何を言う」

「そう？僕は不意打ち専門だとは…」

言葉を切り、瞬動で大樹の目前に移動した男。その動きはエヴァでも目で追うのがやっとの速度だった。

「誰も言っていないけどねっ！」

震脚で踏み込み、その細腕に似合わぬ重い一撃を大樹に向けて叩き込む。

が、大樹は油断せずその拳を左手でいなし、右手でカウンターを打つ。相手のわき腹に大樹の拳が綺麗に入り、体を浮かす。

そこへ、体を急旋回させた大樹の右足が炸裂、壁際に弾丸のように飛んでいった。

「八極拳か。体型に似合わぬ功夫だが、俺に接近戦を挑むにはまだ早いな」

瓦礫に埋もれた男に向かって大樹は厳かに告げる。その姿はまさしく圧倒的強者のそれであった。

だが、ふと後方から殺気を感じた大樹はすぐさま振り向く。そこに見えたのは、先ほど吹き飛ばされた男が鋭い蹴りを放とうとする姿。

「ちい、近距離での転移魔法かつ！」

「よくわかったね。でももう避けられないよ？」

間に合わずガードの体勢を取る大樹だが、男はガードの上に当たるはずだった蹴り足の軌道をそらし、無防備な部分にヒットさせる。たまらず口元をゆがめる大樹にさらに追い討ちをかける。

「もう油断はしない。今から全力を持って君を排除させてもらう」

「やれるもんならやって見やがれ！」

そこからの応酬は、傍から見ているエヴァですら見とれるような武の競演だった。

大樹が突きを放てば男が左腕で軌道をそらし、その隙に右手の掌打が伸びれば大樹は体をひねり避ける。そのひねりを利用して蹴りを

放てば男はクロスガードで蹴りの威力を吸収し吹き飛ばない。
お互いの動作があまりにも綺麗で澁みが無いため、まるで演舞のように見えるのだ。

数分に渡る攻防は、大樹のほうから距離をとることで一旦終了した。

「なかなかやるな。さっきの言葉は訂正しよう」

「光栄だね。でも、だからと言って逃がしはしないよ？」

「いや、逃げるつもりは毛頭ない。ただ、俺も本気になるだけさ」

そう言う大樹は右手で陰陽符を取り出し八角棍を呼び出す。左手には魔力を込めていつでも具現化することができるような体勢をとる。

「エヴァ！自分の周りに障壁を張れ！そっちのことまで考えてられる相手じゃない！」

言つと大樹は周囲に大量の刀剣を具現化し、男に向かって発射する。我に返ったエヴァは慌てて周囲に対物・対魔結界を張り巻き込まれないよう離れた。

逃げ場も与えないという意味表示なのか、男の全方位から刀剣が襲い掛かる。

「これでもくらえ！！」

「まさか僕と似たような技を使えるとはね」

大樹の声にかぶせるように男は魔力を周囲に撒き散らし、自分の周囲に大量の杭のような物体を出現させる。

「『万象貫く黒杭の円環』。どちらが打ち負けるか勝負としようか？」

方や無数の刀剣、方や大量の杭、無数の飛び道具が相手に向かって殺到する。武器同士がぶつかり破碎音が空間に木霊し続ける。数秒後、土煙に視界がさえぎられ音が止んだ。どうやら、これも全て相殺されたようだ。

「ここでも互角か」「いや、俺の読みが勝ったよ」「ガハア……！」

いつの間にか男の後方に移動していた大樹が振りかぶった棍で男の右肩を突き抜いたのだ。

「戦闘の最中に気を抜くなんて随分余裕だな。トドメを刺すまで油断しないのは強者にとって当たり前だぜ？」

たまらず膝をつき、大樹を見上げる。その顔色は一見無表情だが、瞳には悔しさがにじみ出ていた。

「…まだまだだよ」

『人形よ。そこまでだ』

「新手か？」

男が立ち上がろうとするのを咎める様に空間に声が響く。どこから聞こえるかわからない声に大樹は周囲の索敵を行うが、誰も見つからない。

なおも声は響き、目の前の男は舌打ちをすると戦闘体勢を解いた。

『イレギュラーな存在などほっっておけ。すでに準備は整った。年が明けたら全てが始まる。退くのだ人形よ』

「…その君。勝負は預けよう」

「へえ。お偉いさんに言われたくらいで素直に退くのか？根性無いヤツだな」

「何とでも言うがいいさ。次は負けない」

「そうか。せいぜい楽しみにしているさ。俺の名は大樹だ」

「…？」

「名前だ。再戦を誓うくらいなんだ。名前くらい置いていけよ小僧」

「フェイト。フェイト・アーウェルンクスだ」

「災いを転じて福と為す運命か。面白い名前だ。覚えてぞ、感謝しろ」

「…それじゃあ、またね」

そう言うと、フェイトは水のゲートを使いこの場から離脱した。フェイトが転移し、周囲の殺気が完全に消え去ったのを確認してから大樹は棍を符に戻し、エヴァのほうへ歩み寄る。

「ところでエヴァ。あいつらの目的とかは調べがついてるのか？」

「ん？あ、ああ。調べ終わっている。あいつらの目的は世界の救済らしい」

エヴァに『完全なる世界』の目的を利かされた大樹は眉をひそめる。

「…あいつらはカルト教団か何かなのか？」

「いや、もつとたちが悪い。世界を無に返すことで人々を救済しようという集団だ。それ以外のことは何もつかめなかった。帝国と連合の上層部で奴らにつながっている人間は何人か見つけたのだがな

…」

「ふむ。…気に入らないな」

「だろうな。タージュなら他者による押し付けられた救済なんて受け入れないと思っていた。…で、どうするつもりだ？」

エヴァに問いかけられて大樹は数秒考える。やがて考えがまとまったのか再びエヴァのほうを向き

「とりあえず、年明けに何かが起こるらしいからな。連合と帝国がきな臭いというエヴァの調査と関わってるなら、考えうるのは戦争ってところか」

「…おそらくはそうだろう。魔法世界の大国同士の激突か。世界が割れるな」

「ああ。…だったら、俺らで第三勢力でもやるか？」

「何？どういうことだ。説明しろ」

「いや、二勢力だから殲滅戦にもなりうるんだろ？だったら漁夫の利を狙う第三勢力がいれば、殲滅戦はしないだろう？だって弱ったところを襲われるかもしれないんだからな。俺もお前も対軍戦の手段はあるし…なんとかなるだろ」

「…随分無謀だな、タージュ」

「反対するか？」

「いや、そこがいい。元々連合には昔の恨みもあるといえはあるかな。いい暴れる口実だ」

隠して、ここに魔法世界の二分する勢力に対抗する第三勢力が結成された。

…人数は二人だが。

第20話（後書き）

というわけで、バトル成分大目にしてみました。

それでは、また。

第21話（前書き）

完全なる世界の目的に捏造があります。
ご了承ください。

第21話

年が明けて、1981年。

MM連合の若手魔法使いの一派がオスティアを訪問していたヘラス帝国の使節団を襲撃した。

帝国側は連合政府に抗議し、反抗グループの即時受け渡しを申し出たが、元老院はこれを跳ね退けた。

『未来ある若者をこのようなことで失うのは大変遺憾である』という、歴史に残る迷言を発表した連合に、今度はヘラス帝国側が爆発した。

亜人過激派グループが、連合の地方都市を占拠したのだ。すぐさま過激派に対処するため軍を派遣を打診した帝国だが、一週間後に連合から出た声明にさらに度肝を抜かれた。

『連合の領土へ、どんな理由であれ派兵するとは宣戦布告に等しい。誠に遺憾ながら、賽はあちらから投げられた。連合市民の安寧を脅かす勢力を討つ』

この声明を発表した直後、連合軍がヘラス帝国の数箇所の辺境都市に電撃作戦を決行。同時占拠したのだ。事ここに至って、帝国の軍部も爆発した。物量に勝る帝国は辺境都市を包囲し連合軍を殲滅した。

後に大分裂戦争と呼ばれる未曾有の被害をもたらした戦争はこうして始まりの鐘を鳴らしたのだった。

一月後・オスティア

この日、帝国軍は魔法世界最古の王家、ウエスペルタティア王家を連合軍から奪還するため、侵攻作戦を行っていた。

ウエスペルタティア王家は黄昏の姫巫女の力を使った魔法無効化結界で対抗するが、帝国軍の物量に押し切られようとしていた。

しかし、そこに連合軍からの救援部隊『赤き翼』が現れる。突き抜けた個の力は時に数の絶対的な差をひっくり返す。

赤き翼の面々は帝国軍を吹き飛ばしはじめた。

S I D E

大樹

「お、帝国軍が押されはじめたぞ」

「赤き翼だろう。最近連合軍に加わった民間部隊だ。情報操作に躍らされおつて…。それにしても勢いがあるな」

「ご主人、あいつら切っていいか？」

「少し話してからだな。ただの戦争屋だったなら好きにしろ」

戦場から数km離れた小高い丘。そこに大樹とエヴァ、チャチャゼ口はいた。

エヴァを救出してから大樹は如何にしてたった二人の第三勢力をデビューさせようか悩んだ。対軍戦闘だろうと何だろうと局所的な勝ちかは拾える。しかし、ただ勝つのでは意味がない。

『戦線が膠着して疲弊していると横から襲われる』、『小競り合いは漁夫の利を得られる』といったイメージを双方に植え付ける必要がある。

それには初戦でそれなりに大きい戦闘で両軍に壊滅的なダメージを与え、それ以上の戦闘を抑えることだ結論を出し、このオスティア奪還戦を待っていたのだ。

「さて、赤き翼のお陰か戦線が膠着してきたぞ。タージユ、そろそろ行こう」

「おう。そんじゃあ雷撃でその辺吹き飛ばすから、エヴァは負傷者をまとめて氷漬けにしてくれ。わざわざ殺す必要はないからな。目的は戦争の拡大の阻止。虐殺じゃねえってことを忘れるなよ。いいなチャチャゼロ？」

両手に霊符を構え、魔力を通しはじめる。エヴァは嘲笑い、チャチャゼロはナイフを構える。

「さあ行くぞ。デビュー戦だ!!」

S I D E E N D

突然戦場が雷雲に包まれ稲光が辺りを照らす。オスティア政府は突然の天候の変化をいぶかしんだ。

そして、変化はすぐに訪れた。雷雲から無数の落雷が戦場に降り注いだのだ。界に守られた王宮は持ちこたえたが、周囲の戦場は無残なものだった。

至るところで落雷で黒焦げになった兵器が見え、そこには帝国、連合の区別はない。

そして、数少ない無事な部隊には落雷が降り注ぐ。戦場は阿鼻叫喚に包まれ出した。

「なんだ！！戦場に何が起こったのだ！？」

「突如落雷が降り、敵味方の区別なく打撃を受けています！このままでは戦線の維持ができません！」

「な、なんだとっ！」

さらに戦場は動く。周囲に魔法詠唱が聞こえ出したのだ。

「契約に従い 我に従え 氷の女王 来れ とこしえのやみ えい
えんのひょうが」

戦場にざわめきが走る。急激に気温が下がり、ちらほらと雪が降りはじめた。

「お師匠、何か聞こえないか…？」

「…っ！この詠唱は！皆、防御しろ！」

「全ての命ある者に等しき死を 其は、安らぎ也 こおるせかい！
！…！」

エヴァの全力を込めた超々広範囲凍結魔法が炸裂した！

…戦場は凄惨な結果に対して幻想的な空間へと変わっていた。
地表の兵士の全てが氷の柙に捕われ、降り積もる雪が生き残った者達のざわめきを吸収しているため異様に静かなのだ。

「な…なんなんだよこいつは！何が起こったんだよお師匠！」

「永遠の氷河じゃ。広範囲の空間を氷の中に閉じ込める。禁術指定を受けて廃れたと思っておったが…」

「しかもこれだけの広範囲を封じ込めるなんて私も聞いたことがありませんね」

「とにかく生存者を探そう。行くぞナギ！」

無音の静寂を破ったのは空中でゼクトの最強防護の中にいた赤い翼の面々。周囲の惨状に声を荒げているのはナギ・スプリングフィールド。自称『千の呪文の男』である。

一方サムライマスター・青山詠春はとりあえず生存者を探そうとするが、ゼクトがそれを遮る。

「いや、生存者という意味ではわざわざ探す必要はない」

「何故ですゼクト殿？まさか既に全員…」

「違う。この呪文は「全てを有りのまま氷の中に閉じ込めただけだから。全員生きているよ。放置しておく」と落雷の怪我で死んでしまっからな」誰じゃ！？」

ゼクトの言葉に被せるように声が聞こえる。声の方へ視線を向けると、そこには豪華な金髪を風邪になびかせた幼女がいた。

「お初にお目にかかる、赤き翼の諸君」

「誰だデメエは！」

「”初代禁術書庫司書長”か…まだ生きておったということは、噂は本当だったのか」

「知っておられるのですか？」

「知っておる。魔法学園都市アリアドネーに眠る禁術書庫の初代司書だ。当時の総長の無二の親友にして真祖の吸血鬼じゃったとか。いろいろ噂にはなっておったが、まさか戦場で会うことになるうとはな」

「ほう。私のことを知っているとはな。もはや代々の総長かセブン
シップ家の者くらいしか知らないと思っていたが。貴様もそれなりに
長生きしているということか…」

「やいガキンチョ！コレはお前の仕業か？」

「だとしたら何だ。死者を出さずに戦いを止めさせた。何か問題があるのか？」

「何のために、とお聞きしてもよろしいですか？」

「…貴様名は何という？」

「アルビレオ・イマです。それが何か？」

「いや、知り合いにそっくりだからつい…それで、目的だったか。
何を以ってでも戦争を止めることだ。もうそろそろ始まるぞ？」

エヴァが別の方向を向くのでそれに釣られる赤き翼の面々。視線の
先には空中に静止する大樹がいた。

「この戦場は『殲滅者』タージュ・ヴァレンティンが支配した！こ
れ以上の損害を出したくなければ双方共に退くことを薦めよう。繰
り返す。これ以上の被害を出したくなければ双方共に撤退せよ！」

「初代司書長に続いて殲滅者か…いつからここは御伽噺の世界にな
ったんじゃ」

「殲滅者というと、500年以上前に連合の一組織を壊滅させ、当時の元老院の一部まで手にかけたあの殲滅者ですか…」

「さて、どうする赤き翼。私達の目的は戦争に介入し双方の被害を抑えること。死亡さえしなければ魔法で治療可能だからこういった方法をとっただけだ。私達に抵抗しなければ、この場ではこれ以上何もするつもりはないが？」

「ごちゃごちゃうつせえ！喧嘩売っという停戦だと？ふざけるなよっ！」

「よせ、ナギ！」

痺れを切らしたのか自らの正義感に従ったのか、ナギはエヴァに向かって雷の斧を放った。すぐさまチャチャゼロがカットに入り魔法を打ち消す。

「敵対を選ぶか。それも良からう。死なぬ程度に痛めつけられて現実を知るがいいさ」

エヴァが両手を構え、闇の魔法の準備に入る。エヴァの魔力が高まるのを感じた赤き翼の面々は戦闘体勢に入る。詠春がエヴァに切り込みゼクトとアルが魔法を詠唱しだす。

「又ルいな、メガネ」

エヴァに向かって突撃した詠春の前にチャチャゼロが立ちふさがる。刀とナイフがぶつかり火花が散る中、ナギが再びエヴァに突進した。

「食らえ、雷の暴風！！！」

「術式固定、”終わる世界”。氷河女帝発動！」

雷の暴風がエヴァに襲い掛かったが、直前にエヴァの闇の魔法が発動。エヴァの体を氷のライトアーマーが多い、氷の盾が目の前に現れ雷の暴風を防ぐ。

「氷河女帝は視界内全てのモノの温度を奪絶対零度の世界へと帰る。急いで逃げないと氷漬けになるぞ？」

「くう、体が凍えて動きがっ」

「ナギ、急いで魔力を身に纏いなさい！」

アルが周囲に魔法障壁を張るが、それでも気温の低下は止まらない。ナギと詠春はそれぞれ魔力と気を体に纏うが凍結を止めるのが精一杯で反撃に移ることができない。

「氷には炎じゃ！燃える天空！」

「おもしろい、魔力勝負か！真祖の魔力に抵抗できるかな？」

ゼクトの燃える天空が周囲に広がるが、エヴァの氷河女帝と拮抗しエヴァまで届かずせめぎ合いになる。

「くううう。これは無策じゃちとキツイぞ…アル、どうする？」

「そうですね、一度撤退してもいいと思いますが…」

「お師匠！やられっぱなしで逃げるっていつのかよ！」

「ナギ！現実を見る！帝国も連合もこの騒ぎじゃ退かざるを得まい。一度ワシらも引くのじゃ！」

「くっ！覚えてろよ！」

「二流の悪役の台詞だな。もっとオリジナリティのある台詞じゃないと覚えてられんな」

ゼクトを最後尾にし、撤退をする紅き翼の面々。こうしてオステイア争奪戦は、予想より少ない死傷者で両軍撤退という結果に落ち着いた。

その日両国の首都に『殲滅者』タージュ・ヴァレンティンから以下のような書状が届いた。

『殲滅者は戦争を止めるため、魔法世界に再び舞い戻った。今後、

戦場で会うときは再びオスティアのような結果になるだろう。不毛な戦争は無駄な死しか生まない。これ以上の死者を出さないためにも停戦をするよう両国に願う』

連合首都、メガロメセンブリアでは、元老院がこの書状を握りつぶしていた。

「殲滅者だと！歴史の遺物が今更何をでしゃばりおって！」

「しかし議長、実際あの声明は帝国を馬鹿にしています。ここは一度帝国と会談を設けるのも良いのでは…」

「ふん、我々正義の魔法使いが亜人共と何を話すというのだ！」

「そうだ。殲滅者なぞ恐れるに足らず。このような書状は無視すべきだ！」

一部の穏健派は被害の少ないうちに停戦の流れを作ろうとしていたが、多くの主戦派がそれをさえぎった。結局現状維持の方針で会議は終わる。

一方ヘラス帝国首都では、第三皇女テオドラが必死になって停戦を呼びかけていた。

「父上、コレを機会に連合にもう一度使節団の襲撃犯を引き渡すよう求めるべきです！連合と帝国が争えば魔法世界が滅ぶことになります！どうかお考え直してください！」

「くどいぞテオドラ。連合の亜人蔑視をこれ以上我慢すれば、わが国で暮らす国民に害が及ぶ。そのことが何故わからん！亜人が犯罪を犯すたびにヘラス帝国の責任だと騒ぎ立てる連合には、一度力を示さねば収まらんのだ！」

「かといって戦争までするのはやりすぎでしょう！亜人蔑視は一部の元老院の思想で連合全てがそうではないことくらいわかっているでしょうに……」

「テオドラよ。国民が望んでいるのだ…被害が大きければまた話は変わるだろう。ただ、現状ではさしたる被害もでていない。これではこちらから停戦交渉などではしないのだ、わかってくれ。近衛兵！テオドラを自室に連れて行け」

「父上！まだ話は終わっては……」

「姫様。さあお部屋にどうぞ。これ以上父上の邪魔はしてはなりません」

テオドラは自室に戻り、ドアを閉めたあと思い切り蹴飛ばした。

「父上の言うことも一理あるのはわかっておるのじゃ。でも、戦争なんかしても何も生まれないのも事実なのじゃ…。エステルおばあ様、妾は無力なのじゃ。しかし、タージュ・ヴァレンタイン…どこかで聞いたことがあったような。どこじゃったかのう…」

『完全なる世界』 アジト

『デュナミス、連合と帝国の被害状況はどうなっている？』

「は、先のオスティア争奪戦で両国に大きな被害がでるという予想でしたが、殲滅者の横槍によって人的被害はかなり小さくなりました。今後もこのようなじゃ意が続けば戦死者は予定より少なくならざるを得ません」

『我の救済を邪魔するか、殲滅者め。デュナミス、フェイトをここに呼べ』

「お呼びですか、造物主」

『フェイトよ。貴様はこれより殲滅者を探し出し始末しろ。この戦争では互いに多くの死者を出してその魂を救済せねばならん。それを邪魔する殲滅者を倒すのだ』

「御意に…」

造物主の間を出たフェイトは思いがけない再戦の機会を得て人知れず闘志を燃やしていた。

「大樹、今度こそ君を倒す。ソレが僕に下された命令だ…」

フェイトは気付かない。

自分が人形で意志無き存在なのだとしたら、闘志を燃やすなど有り得ないことを。

大樹に拘ることが有り得ないということ。
フェイトはソレが感情だと気付かない。

第21話（後書き）

赤き翼がかませ犬に…

そして戦争を止めるための武力介入っていうのもなんだか風呂敷広げすぎたかなあと不安になってきた（汗

大樹の両国への書状の文面も上手いこと考え付かんかったし…

殺さずに戦争を止めるっていうことはなかなか難しいことなので、それならいっそとこういう形で戦場を荒らしてみました。

ぶっちゃけ本文でも書いたけど、死んでなければ魔法でどうにかできるならこういうのもアリだと思うのですよ。結局生きて祖国に帰れるわけだし。

その瞬間は不満だらけでしょうけどね。

長生きしてる二人には、生きてさえいればなんともなるっていうのが結論なんです。

ともあれ、大樹とエヴァはこんな感じで今後も大規模な戦場を荒らしていきます。

いろいろと捏造やらが多いですが、大目に見てくだされば幸いです。
2011/03/06 追記

こおるせかいつて原作の解説読んだら半永久的に凍らすらしいですね（汗

この作品ではある程度の魔法で解凍できるようエヴァたんが術式をいじったとも思ってください、お願いします（汗

補足説明。

完全なる世界の目的は魔法世界の住人の救済である。

魔法世界住民は作られた存在であり、このままだと魔法世界消滅とともに死滅する。

わけもわからず死滅させるくらいなら戦争で死んだほうが人として死ねるだろう。

っていう思考だったのではと捏造設定。

確か原作ではなんで完全なる世界が大分裂戦争を起こすために暗躍したのかって明記されてないですよね？

まさか黄昏の姫巫女を手に入れるためだけにあそこまでするとか無いでしょうし…

長くなりましたが、今回はこの辺りで。

それでは、また。

第22話（前書き）

怒涛の更新に疲れて昨日は死んだように眠ってしまいました…
相変わらず展開が強引な気がします。ですが、続きが完成しましたので、
では、どうぞ。

第22話

オスティア奪還戦から時が過ぎ、1981年が終わろうとしていた。あれから大樹とエヴァは大規模な戦端が開かれるたびに戦場に介入し、その個人の力で戦いを停止させていた。

特にエヴァの氷属性魔法が活躍した。手加減さえちゃんとすれば対象を行動不能にするのにとっても便利であるからだ。

抵抗が強そうな場合、大樹の雷撃で瀕死にしてから凍結させる。二人とも三老師によるバグキャラ効果で雑兵相手に苦労することはほとんど無かった。

ただ、大きい戦闘の場合必ずと言っていいほどの確率で紅き翼とかち合った。

ただこれも攻略は簡単だった。白髪の子供と某老師と瓜二つの青年（双子のようにそっくりで初見の時、大樹は若干腰が引けていた）は何回か作戦らしき行動をとろうとしていたのだが、赤毛の少年が面白いように挑発に乗り突貫してくるのだ。

そこを大樹とチャチャゼロで相手していると、他の三人が助けに入る。その間にエヴァが氷河女帝を発動。以後三人でフルボッコというふうにならってしまう。赤毛の少年は毎度毎度捨て台詞を吐いて引くのだが、語彙が乏しいのかどこかで聞いたことがあるように単純なのだ。（ちなみに、最近では大樹とチャチャゼロが何と言うか予想して賭けていたりする）

そんな大樹の最近のもう一つの楽しみは完全なる世界の刺客、フェイトとのガチバトルである。

こちら赤き翼ほどではないがそこその頻度で遭遇し、そのたびに大樹が嬉々として殴りに行っていた。フェイトの場合、赤毛の少

年と違い挑発に乗ることも無く大樹と殴りあう。しかもその技量は
大樹と同等、攻撃手段も似通っている。結果として千日手となるの
だが、大樹としては自分と同等以上の使い手など老師くらいしか出
会ったことが無かったので、どうしても楽しんでしまうのだ。まあ、
エヴァに任せていればどうにかなってしまふからという理由もある
のだが。

「…で、タージユ。いい加減焦れてきたんだが。毎度毎度戦闘を中
断し撤退させても一向に戦意が衰えんではないか！他に策はないの
か！？」

「悪い。フェイトとのバトルが最近楽しすぎて…」

「まあ、気持ちはわからなくも無いがな。我らのような存在にとつ
て、自分に届く存在と出会えることは何にも勝る幸運だからな。老
師達が仙域から出ないのも結局そこに行き着く。只人は我らにとつ
て儚すぎるからな…。だが、それとコレとは話しが別だ。戦場を荒
らすことで被害は確かに出ていないのだ。一年に渡りお互いに戦果
がすくないんだ。本来なら穏健派や和平派が出てもおかしくはない
はずなんだがな」

「…いい事を思いついた。エヴァ、ヘラスへ行くぞ」

「何故だ？ヘラスに知り合いでもいるとでも？」

「今は知り合いはいないな。…いや、もしかしたらアイツがまだ居
るかもな。とりあえず伝が無くもない。エヴァの言うとおり、現状
維持だと状況が変わらないのならこちらから動いてもいいだろう。
駄目なら駄目でまた考えればいい。無限に等しい時間があることが
俺らのアドバンテージだからな。いざとなったら何年でも膠着させ

てやるさ」

「それもそうだな。しかし意外だな、タージュ」

「ん、何がだ？」

「そこまで干渉することが、だよ。確かに完全なる世界による救済は氣に入らない。だが、私はともかくタージュには魔法世界にそこまでの思い入れはないだろう？何をそこまでやる氣になっているのか、娘としては氣になったのだよ」

そうなのだ。エヴァはアリアドネーという楔がある。無二の親友が残してくれた居場所がある以上、仮にアリアドネーが無くなるかどうかという場合があればエヴァは何とかしようとするだろう。

あのころの思い出はエヴァにとってそれだけの価値がある。たとえば本人が否定しようとも、だ。

一方の大樹だが、彼には魔法世界どころか、旧世界を含めて三老師以外にシガラミがない。古蓮という心残りが唯一だったが20年も前に彼女も逝った。彼はそのようにして何者にも囚われず、縛られずに生きていたからだ。そんな大樹はエヴァの問いにこう答えた。

「俺はな、エヴァ。人間が好きなんだろうな」

「ん？」

「あのか弱くて儚い人間が、きっと大好きなんだよ。もちろん特定の個人がどうかじゃないぞ？個人的な付き合いがあった人間なんて、それこそ片手の指で足りるかもな。人間という種そのものが、きつと大好きなのさ。五十年やそこらで死んでしまい、俺らからし

たらちよつとしたことで死んでしまふ人間が、な。古を覚えているか？

あいつは人間の身で俺に拳を届けた。人間の意志の力をあの時確信したよ。俺はその行く末が見たいんだろうな。人間が種としてどう生きていくのか。その中で時々縁ができた個人の意志の行く末を見たい。滅ぶのならそれでもいいだろう。種としての運命なら、な。

ただ、完全な世界みたいな一組織の意向で滅ぶのはなあ……。いい言葉が見つからないが……そう、無粋だ」

「……ただ粋じゃないというだけでここまでのことを、これからも続けるのか？」

「ああ。結局のところ、俺やエヴァ、老師達だってそうだが、不老不死に近い存在は人生を自分の基準で満たせないと駄目なんだろうな。老師達はただひたすら享樂的に。お前は友のために。俺は自分の意志を貫くため。俺は見届けたい。だから完全なる世界は許せない。それだけだ。なんだか支離滅裂になっちまったが……」

「かまわん。なんとなくだが私にも理解できるからな」

「……話は終わりだ。ヘラスへ行くぞ」

自分の発言に照れているのか顔を赤らめながらそっぽを向き出発を告げる大樹に、エヴァはニヤリと笑って追従するのであった。

ヘラス帝国・首都。久しぶりにこの地に舞い戻った大樹は変わりな

い光景に懐かしさを覚えていた。エステルとの出会いと夜の迷宮でみた夜景は今でも心に残っている。

「タージュ。そろそろヘラス帝国の伝というのを教えてもいいんじゃないか？」

「ああ。確か百年ほど前からヘラス帝国の首都には守護聖獣として龍樹が防衛に当たっていたはずだ」

「それがどうかしたか？」

「おれの伝っているのはソレだ。昔ヘラスの皇族に縁のある龍樹と闘り合ってた。时期的にも関連がありそうだし、ちよつと呼び出して知り合いなら皇族に話聞いてくれるかもしれないだろ？」

「一応聞いておくが、どうやって呼び出すのだ？」

「そりゃあ、ここで魔力を開放する。首都のど真ん中で強大な魔力が突如発生すれば、守護聖獣が飛んでくるだろ」

言葉を切つてエヴァのほうを見ると俯いてプルプル震えている。直後爆発した。

「なんでタージュは時々そう大雑把なんだ！そりゃ飛んでくるだろうが、一戦やらかすかも知れんだぞ！？そもそも、そんな騒動を起こした相手に帝国政府がまともに話を聴くとも思っておるのか！！」

「いや、だって当時も龍樹に競り勝ったし。まあなんとかなるだろ」
「昔のタージユはもつと思慮深く見えたのに…バグ老師に毒されたのか？」

自問自答にふけるエヴァを尻目に大樹は魔力を解放する。少しすると、首都の街中に警報が響きだした。

『首都の皆さん！ただいま市内で突如強大な魔力が現れました！コレに対し政府は守護聖獣を急行させます！すぐに近くのシエルターに避難してください！繰り返します…』

「本当にやったか…私は見てるだけだからな！怪獣大決戦に巻き込むなよ！」

「大丈夫だって。なんとかなるさ。…そうこう言っている間に来たぞ」

見ると周囲に巨大な影が現れ、大樹とエヴァは上を見上げる。上空には帝国守護聖獣が全身から魔力を撒き散らし疾走していた。大樹はニヤリとして浮遊術を使い空を舞う。エヴァは苦笑いしながら障壁を張って離れる。どうやら本当に傍観するつもりらしい。

「魔力の気配はあの時と同じ、か。墓守の次は守護聖獣とは。本当に皇族と仲がいいなあ、龍樹！」

魔力で足場を作り蹴りつける。瞬時に龍樹の懐に入った大樹は呼び出した如八角棍で神速の連続突きをはなつ。吹き飛ばされた龍樹は空中で体勢を立て直し、ブレスを放とうと口内に魔力を集めだした。

「その攻撃は既に知っているっ！！！」

さらに追撃体勢に入り、ブレスを構える龍樹の頭部を頭上から棍で殴り飛ばす。強打された龍樹はブレスを放てず空中でタタラを踏む。

「どうした龍樹？以前俺にブレスも魔法も効かなかったのを忘れたかあ？思い出せないのなら…決着をつけた攻撃でまた沈めてやるよっ！」

そう言つて、周囲に大量の刀剣を具現化、すぐさま投擲に入る。襲い掛かる刃に龍樹は全身をさらし斬撃を受ける。

その刀剣の嵐に続き大樹の高速の突撃が龍樹の腹にぶつかり、たまたま龍樹は地上に落ちるのだった。

「いかん！あの巨体が地面に落ちたら…タージュ！」

「…やりすぎた」

すぐに空中を疾走し龍樹の下に回りこみ、地面に叩きつけられる直前にぶつからないように拾い上げるのだった。
すると突然龍樹から放たれていた闘気が引いていき、理知的な声が聞こえる。

『どこかで知った魔力だと思えば…エステル皇女の付き人か？』

「付き人じゃないんだがな。100年以上前に夜の迷宮でお世話になったタージュだ。思い出したか？」

『今の攻撃で思い出したぞ。我に土をつけたのは後にも先にもあの戦いだけだからな。懐かしいモノだ』

昔を思い出したのか言葉に親しみがこもり始める。そのまま昔語りをしてもよかったのだが、現在地は帝国首都上空である。さすがにまずいと大樹は本題を切り出した。

「んで、龍樹。昔話は今度盃でも交わしながらにしよう。今日はお前に頼みごとがあつてきたんだ。お前今でも皇族と付き合いあるか？」

『うむ。我はエステル皇女との盟約により帝都守護聖獣となった。今でも皇族とはいい関係を築いているぞ』

「なら話は早い。実はな…」

かくして大樹はヘラス皇族と二度目の出会いを果たすのだった。

第23話（前書き）

PV26万、ユニーク26000突破しました。

…この小説、まだ連載開始して二週間なんですけど。

皆さん作者の自己満足小説を読んでくれてありがとうございます。

それにしてもこの小説、女っ気が少なすぎですね。

女性キャラとの絡みが書きたい…

第23話

テオドラの周囲は非常に慌しく動き回っていた。

なにしろ首都に正体不明の強大な魔力が観測されたのだ。あまりに強大に過ぎ首都の警備隊や近衛兵団では対処が不可能と判断され帝都守護聖獣である龍樹の出勤が許可されたぐらいなのだ。

この城にいる皇族は現在テオドラ一人である。父親は前線基地にて今後の作戦の検討、上の姉達は戦場の慰撫に出ていた。

なので場内の者達はテオドラの安全を確実なものとするために奔走していた。仮にだが、龍樹が敗北した場合それ以上の戦力など存在しないのだ。警護する者たちが焦るのも至極当然である。

そこに駆け込んでくる姿があった。どうやら外の状況を伝令しにきたらしいその兵士は警備隊長の元へ駆け込んで行くと息を整えつつ声を発した。

「申し上げます、ただいま龍樹が敗北しました！！！」

周囲のざわつきが一層激しくなる中、警備隊長は無念の様子で一つの決断をする。

「……止む終えまい。テオドラ様を場外に退去させ、何を馬鹿なことを言っておるのじゃ！！！」

警備隊長の言葉をさえぎったのはテオドラ第三皇女その人の声。

「ヘラス帝国の首都を襲撃されて留守を任されておる唯一の皇族が尻尾を巻いて逃げてみる。国民がどう思うか想像ができないわけはあるまい！よいか、皆の者。妾の退去よりも国民の安全を考えるのじゃ！」

そう告げるテオドラの言葉に警備隊長を始めその場にいた人間は皆意識を切り替える。この皇女は守られるだけの存在ではないのだとそこへ第二報が訪れる。

「申し上げます、テオドラ様！」

「なんじゃ！簡潔に述べよ！」

「はっ。襲撃犯ですが、龍樹となにやら念話を行った後に投降すると告げてきました。今から場内に連衡されてきます」

「な、なんじゃとおおー」

首都の喧騒は収まったが、場を城内に移したようである。

「して、お主は何者で、何の目的があつてこのようなことをした？」

現在、ここ謁見の間にて、大樹はロープで縛られテオドラの前に座っていた。エヴァは話が纏まったらそこに行くとか城下町を散策中である。大樹のはっちゃけぶりに疲れたらしい。

それにしても、と大樹は思う。見れば見るほど目の前の皇女様はエステルにそっくりだ。しゃべり方まで同じとなると、もはやあのしゃべりはヘラスの皇族の慣習なのかもしれないと思っていた。

さて、と大樹は意識を切り替える。昔を懐かしむのを一旦止め、目の前の皇女を改めて凝視する。コレからの会話で今後の自分達の行動が変わってくるのだ。気分を入れ替えて大樹は口を開く。

「俺の名前はタージユ・ヴァレンタイン。世間を騒がせている『殲滅者』にして此度の戦争を止めさせようと独自に動いている。今回はそのことについて帝国の皇族にお目通りができればと思い行動した」

すると謁見の間はざわめきに包まれ、大樹に敵意と殺意が織り交ざった視線が集まる。ヘラス帝国の軍隊をことごとく壊滅させてきた人物が目の前にいるのだ、無理も無い。

しかしその視線を制しテオドラが口を開く。

「…なるほど。お主が『殲滅者』か。その実力ならば、囚われる前に龍樹に殺されるとは考えぬことも納得じゃの」

「いや、それについてはまた別の理由でな。俺はあの龍樹と過去に出会ったことがある」

謁見の間にはさらに喧騒が広がり、今度は好奇心といぶかしみの視線が集まる。

「あの龍樹は既に100年以上帝都を守護しておるのじゃ。その龍樹と以前に出会ったということは、貴様も長命種なのか？」

「まあ似たようなものだ。ただその辺の生物よりもよっぽど長生きだが。お前のご先祖様も昔会ったことがあるぞ？」

しれっと爆弾発言をする大樹。周囲は何を馬鹿なことをという空気に包まれ、この騒動の原因をどうするかという話になるうとしていた。

しかしテオドラは大樹の言葉に引かかるものがあつたのか腕を組み何かを思い出そうと首をひねっていた。やがて何かが思い当たつたのか腕組を解いて大樹におそろおそろの質問をする。

「のう、もしやそのご先祖様とはエステリーゼ御祖母様か？」

「よくわかつたな。エステルズのヤツ別れ際の手紙に書いてあつた通り、本当に子供に伝えていたのか」

ほう、とため息を漏らし大樹は肯定する。テオドラは合点がいったとばかりに納得の表情をし、さらに口を開いた。

「そうか、どこかで聞いたことがある名前じゃと思っておったが。タージユ・ヴァレンタイン。エステリーゼ御祖母様から何度も聞いた騎士様じゃったのか…」

「騎士様、だと？」

「ああそうじゃ。自分のためにわざわざダンジョンを共に潜って、あまつさえ龍樹と戦い勝ちを得た。人外の実力を持つ最高の騎士じやったと、御祖母様は何度も妾に聞かせてくださったのじゃ」

祖母から聞いた昔話の登場人物が目の前にいるとわかり喜色満面のテオドラが言う。その姿は見た目相応であつた。一方大樹は騎士様発言に多少驚く。確かに護衛してやつたがそんな対応はしてないはずだ、と。どうやらエステルが話を盛っているようだと一人納得し、話を本題に戻そうと口を開いた。

「それで、テオドラ皇女様。私の話を聞いていただけますでしょうか？」

「うむ。御祖母様の騎士様となれば、妾はそなたを信用するのじゃ。して話の内容とはなんなのじゃ？」

「それはですね…っ」

とたんに嫌な予感に囚われた大樹はテオドラに向かって飛びつき、抱きかかえる。

「なっ！貴様テオドラ皇女に向かって何をする！」

「衛兵！衛兵を呼べ！」

謁見の間は三度喧騒に飲まれるが、今回それを制したのはテオドラの声ではなく第三者の声であった。

「…この付近の衛兵は皆石になってもらったよ。あとはここにいる人間だけだ」

扉を開けて現れたのは白髪の青年、フェイト・アーウェルンクスであった。フェイトは周囲の人間を見回し、次いで大樹が抱えて後ろに下がらせているテオドラの方を見て目を見開く。

「流石だね、殲滅者。僕の敵意を感じ取ってテオドラ皇女を守る位置に移動するとは。それでこそ僕がトドメを刺す男だよ」

「またオマエか。こんな場所まで俺を追ってくるとはご苦労様だな」

獰猛な笑みを浮かべテオドラを自分が匿える位置に移す大樹。テオドラは先ほどとは打って変わった大樹の雰囲気息を呑むが、自分のいる場所が一番安全なのだと直感で感じ取り毅然とした表情を崩さない。

「…僕は造物主の命令によって君を殺さねばならないからね。いい加減君も諦めてくれないかな？」

フェイトのその言葉に楽しそうな大樹の闘気がふっと消え、次いで冷徹な殺気が謁見の間を覆う。

周囲にいたテオドラを含めた人間は大樹の纏う空気の更なる変化に戸惑いを隠せない。

「…すると何か。オマエ、今まで誰かの命令に従って俺を狙ってた、ということか？」

「…ああ。僕は造物主に作られた人形だからね。人形は命令に従って動く」

フェイトの返答が言い終わる前に大樹の拳が頬を穿つ。今までの戦闘でも見せたことのない速度にフェイトはいつ大樹が動き出したか知覚することすらできなかった。

（今まで見たことも無い速度。まさか今まで手加減していた…？）

「おいフェイトよ。俺はオマエに失望したぞ？今まで俺がオマエと殴り合えて楽しんでた気分を全て台無しにされた気分だ…」

「…何を言っている、殲滅者」

「俺はよ、自分で言うのもなんだが世界最強に近い存在だ。それだ

けに互角に戦える存在っていうのが珍しくてなあ。オマエが現れた時、正直心が躍ったもんだ。でもよ……」

言い終えると同時にフェイトの真横に突然移動した大樹にフェイトは目を見開く。向きを変えようとすぐ反応するが、その速度を上回る大樹の回し蹴りが、がら空きの胴体に向かって閃く。なすすべも無くフェイトは吹き飛び壁に激突する。

（また僕が気付けない速度？馬鹿な、有り得ない……）

「そんな楽しかった相手が、自分の意志を持ってない人形だ……？ふざけるのも大概にしろよ。楽しんでいた俺が馬鹿みたいじゃねえか」

大樹は全身から怒気を放ちその場にいまする生物全てを圧倒しつつ、フェイトに近づく。その怒気に飲まれたフェイトは身動き一つできなかった。

「そもそも何が気に入らないってよ、オマエが自分のことを人形だと思ってることが気に入らんね」

「……事実だよ、殲滅者。僕は造物主によって作られた」

「……だとしても、自分の意志が無いように振舞ってるんじゃないよ、このガキが……！」

フェイトに肉薄した大樹はその襟を片手で掴み持ち上げる。先ほど

の二撃で既に戦闘できる状態ではないフェイトはされるがまだだった。

「ただ俺を始末しろといわれただけなら暗殺なりなんでも方法はあるだろうよ。なのになんで毎回俺と正面から殴り合いしているのか。考えたことあるか？」

「…だから先ほどから何を言っているんだい？」

「オマエはとづくに人形なんかじゃない。意志や感情がある存在だってことだよ、フェイト・アーウェルクス。そんなこともわかってない貴様に俺は失望したのさ。オマエはもう少し…」

そう言つて大樹はフェイトを掴みあげた腕を大きく振りかぶり…

「自分を知りやがれ！！！！」

（意志や感情だって…そんなものが人形の僕にあると言つのか…）

そのまま地面に叩きつけた。その衝撃でフェイトの意識は先ほどの大樹の言葉が浮かび、そして暗転する。

「…テオドラ皇女。怪我は無いか？」

「あ、ああ。妾は無事じゃぞ、タージュよ」

「それは重畳。騒ぎになったから後日また話し合いにしないか？連れも待たせているんだ。龍樹の騒ぎの償いとして、石化した人間は俺が責任を持って治療させてもらうが」

「まことか？それなら妾は歓迎するぞ。誰か、客室を二つ「三つ、お願いできるか？」…まさかお主」

「ああ、このガキの部屋も頼む。何なら俺がそばで見張っていてもいい」

「…わかった。誰か、客室を三つ用意するのじゃ！」

（ここは…）

フェイトが目を覚ましたのは見覚えの無い部屋の中であつた。傍らには椅子に腰をかけている大樹の姿。

（どうやら僕は囚われの身らしいね。僕の命もこれで最後か）

フェイトは自分の今後の運命を考える。大樹からみれば完全なる世界に所属している自分は敵で、情報を吐かされた後にトドメを指されるのだろうと推測する。

（どうせ情報を与えるつもりは無いけどね。…命令を果たすことができなかったか）

さらに思案にふけるフェイト。造物主の命令を遂げることができず、大樹に命を絶たれることを考える。

（僕は殲滅者を倒すことができなかった…）

思考がそこに至ったとき、ふと疑問がよぎる。何故そのことが何度も頭をよぎるのだろう。自分は意志を持たない人形で、造物主の命令を果たすだけの存在のはずだ。

なら、何故彼との決着をつけられないことがこんなにも心残りなのか。この胸によぎるものは一体何だ。

「気がついたようだな、人形」

いつの間にか大樹はフェイトが目覚めたことに気付きそちらを向いていた。フェイトは自分の疑問を棚に上げ、大樹に向き直る。

「…これから僕をどうするつもりだい？」

「どうもしねえよ人形。俺はオマエを逃がす」

「？」

大樹の言うことが理解できないフェイト。

（何故彼は僕を逃がす？彼にとって僕は倒すべき敵であったはず…）

「人形。次に会うときまでに自分が何者かを考える。それで今回の件はチャラだ」

「…僕を生かしてどうするつもり？」

「俺が一度でもライバルだと思ったヤツが、自分のことを人形だと思ってるなんざ納得できねえつつうことだ。意志の力は全てを凌駕する。この言葉をよく考えておけ。次会ったときに答えを聞かせろ。ソレによつてはまた名前で呼んでやる。わかったら行け」

「よくわからないけど、礼は言わないよ。殲滅者」

「オマエの行く末に幸あれ、とでも言っておこう」

そしてフェイトは転移の魔法でその場を離脱する。大樹はため息を一つ吐き、思案にふける。

（俺は何してんのかねえ。でもアイツの言葉が気に食わないってことだけは事実だしなあ…）

（彼は何を言いたかったのだろう。僕が何者か考える…か）

「どうした、フェイト。何を思案に更けている」

「デュナミスか。いや、殲滅者についてちょっとね」

「ふむ。そこまで拘るのも珍しいな」

「…僕が拘っているとしても？僕は心無い人形。ただ造物主の命令に答えるだけだよ」

そういうフェイトにデュナミスは薄く笑い、さらに言葉をかける。

「ただの人形ならば誰かの言葉に悩むことなどあるまいよ。確かに主は造物主に作られた存在だが、作られし存在に心が宿らぬと断言できるかは別だ。今の主は実に人間らしいぞ？」

そう告げてデュナミスは去っていく。フェイトはすでにデュナミスのことを気にしていなかった。

（コレが…心？ならば僕の心は何を望んでいる…）

第23話（後書き）

何か記念に外伝でも書いたほうがいいんですかね。
恋姫辺りだったらすんなり書けそうですけど。

そしてフェイトの伏線があらさまな気がしてきた…
まあこのまま突っ走ります。

次回でグレートブリッジ辺りまで書きたいな。

それでは、また。

第24話（前書き）

短いです。そして会話パート。

第24話

「妾を含め帝国に和平派があらぬわけではないのじゃ。でもそれ以上主戦派が多すぎるのじゃ。戦争が始まりすでに数ヶ月。既に帝国内の物価にも影響が出始めておる。はじめのころは民の間でも徹底抗戦の意見が多かったが今では半々といったところか。戦死者が思ったより出ておらぬからの。民からも恨み言などはあまり聞こえてこぬ。その点はおぬしらに感謝しておるぞ。ともかく、妾はこれ以上国に戦の悪影響を出したくないのじゃ…」

テオドラの悲痛な声が部屋に響く。大樹とエヴァは黙ってソレを聞いていた。

フェイトの襲撃の後、エヴァに念話で会談の場を設けることを伝えた翌日。テオドラの私室に二人はいた。城内にも主戦派は存在するのであまり大きな声で停戦について話すわけにはいかなかったのだ。さらに大樹とエヴァに戦闘不能にされた負傷者も収容されていたのでなおさらである。

「話はおおむね理解した。ようするに、停戦を望む声はあるが抗戦の意見を覆すほどではない、と?」

「そういうことなのじゃ。タージュよ、何かうまい方法ないのかのう?」

「…そうだな。いくつかあるが」

「ちょっと待て。テオドラ皇女、いくつか質問がある。まず、この数ヶ月間で抗戦から停戦へと意見を変えた人間はいるか？」

「いるにはいるが、どちらかというと言権の小さい者ばかりなのじゃ。有力者には主戦派が多いのじゃ」

「ふむ。次に国民の声だが、抗戦を望む民とはどのような人間だ？」

「それは…おい、誰か資料をもつてまいれ」

メイドを呼びつけ資料を持ってこさせる。テオドラによると、停戦派は首都の人間を中心にかなりこまめに意見を聞いていて、それをまとめた資料も存在するという。

メイドが持ってきた資料をエヴァに手渡す。エヴァは渡された資料に目を通ししばらくするとどこか納得したような表情をした。

「エヴァ、何かわかったのか？」

「ああ。まず抗戦を望む人間だが、傭兵や拳闘士崩れなどの身元がはっきりしない人間が多いな。しかも地域別のデータを見ると抗戦を望む民は抗戦を望む有力者の領地に多い。人数でみると停戦と抗戦で拮抗しているが、地域によってこれほど大きな偏りがある。これがどういうことかわかるか？」

「…有力者が意見を扇動しているということか。妾ともあろう者がこのようなことに気付かなんだとは」

「さらに、戦争当初から有力者が抗戦意見ばかりなのが怪しいな。」

もう少し理知的な意見……せめて様子を見ると言っただけ程度の意見だっ
てあってもいいはずなのに雁首そろえて抗戦を望んでいる。不自然
だとは思わないか？」

「……エヴァ。裏に何かあるといたいのか？」

「ああ。率直に言おう。私はこの有力者が完全なる世界と手を組ん
でいると考えている」

「何じゃその完全なる世界とやらは？ 妾はそのような名前を聞いた
ことが無いぞ？」

そういえば説明していなかったと大樹は完全なる世界について知っ
ていることを話し出す。

二十年ほど前から帝国と連合の関係が悪くなっていたが、それにつ
いてエヴァが調査をしていた際に出てきた組織。

何度か接触したが、その目的は世界の救済であり。そのために連合
と帝国を争わせようとしているらしいということ。

かいつまんで説明を終えると、テオドラの肩がワナワナと震え、歯
を食いしばっていた。

「……なんということじゃ。この魔法世界を二分するような戦争が、
たかだか一組織によって企まれているというのか？」

「そういうことだ。私とタージュは元々それが気に食わなくて両軍
の戦闘行為を止めていたのだから」

テオドラが呟くように言った言葉にエヴァがうなずく。話が少しずれてきたので大樹が方向修正のため一度区切りを入れる。

「ともかく、エヴァの推測にはうなずける箇所が多い。おそらくそういう人間もいるだろうな。それを踏まえての俺の提案だ」

「何かよい考えが浮かんだのかの？」

「ああ。まず前提としてだが、戦争を継続させるつもりなら一度かなり大きな作戦があるはずだ。それこそスティア奪還を超えるような、な。そのときに主戦派の音頭をとっている連中を戦場になるべく多く引つ張り出す。そうすると帝国内の主戦派は相対的に力が落ちるはずだ。そこをテオドラたち停戦派が謀反の罪でもなんでも掲げて封鎖するなり叩くなりする。国民を扇動している裏さえ取ればそう難しいことではないだろう。このことを皇帝の耳に入れてもいいからな。こうすることで全体の意見を停戦に傾けるんだ」

「なるほど。完全なる世界の影響を取り除くと共に国内の意見を停戦に持つて行こうということか」

「それとテオドラ。それプラス連合へ繋がりのある人間と接触を取れないか？」

「できないことは無いと思うぞ。だがそのようなことが何故必要なのじゃ？」

「簡単なことだ。停戦するならば相手も合意させる必要があるからな。おそらくだが連合内部にも完全なる世界の影響があるんだろう。」

いくら連合の元老院がアハウばかりでも停戦意見がまるでないはずがないからな。そちらにも手助けをしよう。両国の上部が停戦意見で満ちれば停戦にまで持つていけるだろ？」

「なるほど！タージユもなかなか賢いのう」

「師匠の一人があくどいことばっかするやつでな。対処の仕方なら考え付きさ。ともかくこの作戦で行こう。俺とエヴァは今までの活動と、帝国内部の完全なる世界に使われてる奴らの内偵だ。テオドラは中立国や連合に伝があり信用できる人間をこちら側に引き込むんだ。証拠が固まって来たら、先ほど言った方向に話を持っていく以上だ、二人とも。理解したか？」

「ああ」

「了解なのじゃ！」

こうして新たな反撃の狼煙はあがったのだった。

第24話（後書き）

というわけで、原作の紅き翼の行動を先取り！
話の区切りがいいので一旦投稿。

がんばってもう一話今日中に…

第25話（前書き）

今日と明日は暇なので更新ラッシュ…かもしれません。

第25話

テオドラとの会談後、年が明けて1982年。大樹とエヴァは完全なる世界の内偵を進めつつ戦場を巡っていた。

ある時期から紅き翼に褐色肌の大男が加わっていた。赤毛の少年と同じ臭い（＝脳筋）がするその男が加わったことにより、紅き翼はさらに強力になったようだ。というか、戦場で有名になりすぎて地方に飛ばされていたらしい。戦場で出会ってもテンプレ対応をしていたのであまり気にかけていなかった大樹達であった。

そうこうしているうちに内偵も順調に進み、四月を迎えた。このある種異様な素早さはエヴァの眷属である蝙蝠の力であった。何しろこれでもかというくらい至る場所に飛ばして情報収集させたのだ。真祖の吸血鬼がテオドラと共闘していることは極秘事項なので誰も警戒していなかった。

ある程度情報が集まったことで、そろそろ完全なる世界と手を組んでいる人間を一掃するための作戦を提案することになった。グレートブリッジ奪還戦の始まりである。

テオドラの口八丁によって国内の抗戦派の大抵は戦場に向かうことになった。もちろん最前線に行くことはなかったが国内を空けさせることには成功した。

大樹達の作戦は、シンプルなものであった。戦闘が始まってしばらくしたら国内でテオドラの手の者が彼らを告発し、ソレと平行してエヴァが影のゲートを使い拘束する。ソレが終了し次第大樹が戦場に乱入し戦闘を強制終了させる。完全なる世界の存在は大樹達しか把握していないのでとにかく警戒がゆるいため作戦はうまく行くと

思われた。

「エヴァ、俺もたまには紅き翼で遊んでいいか？」

「珍しいな。唐突にどうしたんだ？」

「なんか新しいメンバーが加わったらしいじゃないか。帝国の拳闘士あがりの…」

「ジャック・ラカンじゃな。元々抗戦派が雇った傭兵だったのじゃが、向こうのほうが面白いとかで逃げられたらしい」

「抗戦派も踏んだり蹴ったりだな。なんにせよ、最近フェイトが来ないからな。ストレス発散にはちょうどいいだろ」

「…タージュ。いいか。くれぐれも、くれぐれもっ！やりすぎるなよ？」

「あー、まあ善処するわ。つっても向こうの赤毛は広域殲滅魔法の使い手だろ。だったらこっちもやり返したってかまわんだろ。勿論兵隊は守るが」

「タージュが対軍戦で本気をだすと周囲が焦土になるから駄目だ…本気を出すなら接近戦限定にしてくれ。タージュがやりすぎて帝国軍が後退しても意味が無いんだからな？」

「わかったよ…」

そんなこんなで、グレートブリッジ奪還戦の開幕である。

「おいナギ。オマエこの戦いが始まってからずっと負け越している相手がいるんだって？」

「うっせえよカン！そもそも向こうが正面から戦わないからだっ！」

「ナギ。それも戦法の一つだと何度言えばわかるんだ？」

「そうですねナギ。というか、貴方みたいなバグキャラと正面からぶつかるなんて普通しませんよ？」

「コレだからバカ弟子は……」

グレートブリッジの後方で遊撃の任務を命じられていた紅き翼の面々はナギをイジって遊んでいた。話題は大樹と闘ったびに突撃する脳筋ぶりについてである。

「チクショー！一撃でも攻撃が通ればあんな奴ら一撃だっつーの！つかいくら俺が突撃しなかったってアルの魔法も一切通ってないだろ！」

「まあそうですね。ですが私やゼクトは貴方にもう少し頭を使えと何度も言っていると思うのですが？」

「アルビレオ。言うだけ無駄じゃ。いまだにあんちょ使っているコイツに戦略とかを考える頭があるとおもつか？」

「…ナギ。私が悪かったようです。申し訳ありません」

「ま、まあ素直に謝るなら許してやらなくもないぜ」

「バカにされていることに気づけ、ナギ…」

ぎゃいぎゃい騒いでいると、突然グレートブリッジで爆発が起きた。周囲の兵士が何事かと騒ぎ出す。

アルが会話に耳を傾けていると、どうやら帝国の軍艦が長距離転移で多数出現し奇襲を受けているようだった。

「ナギ。そろそろ出番のようですよ？」

「前線が崩壊しそудとか聞こえるからのう」

「よっしゃ！紅き翼、出陣だ！」

それぞれが虚空瞬動や浮遊術でグレートブリッジに移動する面々。戦場が視界に見えてくると、所狭しと帝国の軍艦が見え、制空権は完全に奪われているようだった。連合軍はまったく奇襲を予期して

いなかったらしく大型の戦艦などはほとんどここになく、小型の艦船で対抗しようとしているが焼け石に水。むしろ撃墜されて被害が増えている有様である。

「まずはナギの魔法で相手の数を減らしましょう。ナギ、頼みます」

「まかせろ！んーっと…百重千重と 重なりて 走れよ稲妻 千の雷！！！」

あんちよこを見ながら魔法を唱え発動させるナギ。その威力は優勢だった帝国足踏みさせるのに十分な威力だった。

「俺も負けてられねえな！アデアット、千の顔を持つ英雄！行くぜえ！！！」

ナギに負けじとアーティファクトを召喚し、無数の武器を手当たり次第に投擲し始めるラカン。

ソレを見たゼクトはため息を一つ吐き、このバグキャラどもめと呟いていた。

「さて、私達も行きましょう、詠春」

「ああ。だが…」

「そうじゃな。いつもだこの辺りで」そこまでにしとけ」…きお

ったな、タージュ・ヴァレンタイン」

突如ナギの前方に現れた大樹は手にした霊符でナギの千の雷をレジストし、ラカンの投擲する武器を叩き落した。ナギとラカンは大樹に気付き殺到し、詠春も追従する。

「ガキンチョ、今日はオマエが苦手なエヴァはいないぞ？本気が出せてよかったな」

「ふん、俺に苦手なものなんてねえんだよ！」

「俺も忘れるなよバカナギ！」

相変わらず突撃してくるナギと大樹とは初遭遇であるラカンを一瞥し、大樹は気を引き締める。

「さて、力が有り余っているみたいだから俺が相手してやる。こいよ紅き翼！」

「言われなくても、今日こそオマエをぶん殴る！」

「なるほど、こりゃ相当強いわ…だが、腕が鳴るぜえ！」

ナギとラカンの同時攻撃。ナギは莫大な魔力を拳に宿らせ、ラカンは両手に構えた大剣に気を通して、それぞれ逆方向から大樹に向か

って突っ込む。しかし大樹は慌てることなくナギの拳を抑え、ラカンの斬撃を八角棍で受け止めた。

「ふん、ガキンチョ。オマエは才能の無駄遣いだ。出直してこい」

ナギを受け止めた手から発勁を放ちナギを吹き飛ばす。ラカンは自分と同格のナギを片手であしらう大樹に驚愕していた。先ほどから大剣に力をこめているのだが、微動だにしないのだ。奴隷拳闘士時代からの戦闘経験をもつても、目の前の存在が理解できない。まるで遥か高みにいる存在を相手しているような…

「筋肉。俺の前で考え事とは余裕だな…」

耳元で大樹の声がする。振り向くとそこには既に拳を振りかぶった大樹の姿があった。

「な、いつの間に…」

「油断しているからそうなるんだ。喰らえ」

言うことは言ったとばかりに鋭い掌底を放つ。わき腹に綺麗に入り、アバラが折れた感触を持ち主に伝える。うめき声を上げるラカンに向かって追い討ちの蹴りを放ち地面に叩きつける大樹であった。

「次は剣士のオマエか…」

振り返ると底には野太刀を大上段に振りかぶった詠春がいた。刀には大量の気がすでに籠められており、青白い光を放っている。

「神鳴流奥義、百烈桜華斬！」

瞬時に刃が乱れ飛び、大樹を切り刻もうと襲い掛かる。回避不可能のタイミングで攻撃したはず、これなら…と詠春は思ったが、大樹は棍を構えて全ての斬撃を迎撃し打ち消してしまった。

「範囲攻撃を用いずに単体攻撃を使っただのは加対象だが、気の練り具合も剣術もまだまだだ。俺に一撃与えたかったらもつと鍛えてからにしろ」

棍で眉間、喉仏、鳩尾の三箇所と同時に突きを放つ大樹。詠春はかるうじて目で追えたが避けることはできなかった。急所に同時攻撃を受けてのけぞる詠春に、大樹は回し蹴りを打ち込む。紅き翼の前衛三人はそろって地面に墜落していった。

「そろいもそろって油断し過ぎだ。お前らは強いが、上には上がいることを知るんだな。…む」

気付くと自分の体がだんだんと重くなっていく。周りを見ると優男の重力球が周囲を取り囲んでいた。

「これだけの高重力下なら、いくら貴方でも多少は動きが鈍るでしょう?」

「その状態でワシの魔法をかわせるか?」

優男と子供が遠くで詠唱をし、大魔法を発動させていた。強大な魔力による『燃える天空』が周囲を灼熱に包み込む。

「前衛は囷か。だが、俺に属性魔法は効かない。水剋火……」

霊符を発動させ周囲の水気を増大させ熱を奪い取る大樹。あれよあれよという間にゼクトの燃える天空はかき消されてしまった。悔しそうな表情をする二人を眺めていると、後方三箇所から殺気が飛んでくる。

「……流石にあれだけで終わるわけではないか。さあ、存分に俺を楽しませてくれよ。紅き翼!!」

エヴァはタイミングを計っていた。紅き翼は大樹が押さえている。このままなら帝国の勝利は揺るがないと掃討戦に入ろうとしていた。

（もう少し。もう少し前線に出て来い…そのときが貴様らの最後だ…）

連合の大敗が確定すれば、点数稼ぎのためにもつと前線に出てくるだろうというテオドラの予感を信じ、今か今かと待ち続ける。グレイとブリッジからは黒煙と火の粉が舞い、前線基地としてはしばらく復旧できないと誰もが見てわかるほどに攻撃されていた。

（あと少し…今！）

視界にめばしい人間が乗っているはずの戦艦がほぼ全て入る。即座に短距離用のゲートを開き、影から影へと連続転移をし続ける。対象の影に移動したら、その対象を自らの影に捕らえ、次の得物へ。移動する寸前に戦艦内の士官を見ると呆然としていた。目の前で艦長や国のお偉いさんが囚われればそうもなるだろう。

（テオドラ！こっちは大成功だ。そちらはどうなっている？）

（エヴァか。今報道をジャックして帝国全土に告発をしておるぞ。一部の傭兵崩れ共が多少暴れておるらしいが、それ以外は比較的大人しいのじゃ。おそらくほとんどの膿は出し切れる。そうでなくとも今後しばらくは帝国内を大手を振って歩くことはできんようになる。大成功なのじゃ！）

（了解した。タージユ、聞いていたか？）

（ああ。俺もそちらに移動する。こいつらとはまた次回遊ぶとするさ）

念話を打ち切り、自分もゲートを使い帝国に戻っていくエヴァ。

同時刻、大樹も前衛三人組を棍で弾き飛ばし、転移する体勢に入る。

「てめえ！逃げるのか！？」

「冗談言つなよ。目的は達成された。ついでに言うと、俺がお前らを見逃してやるのさ。また会うことがあれば、そのときに相手してやるよ」

挑発してから転移する。最後に赤毛の少年と目が合ったのでニヤリと笑ってやった。

一カ月後・ヘラス帝国

この一ヶ月で帝国の政治は激動した。まず国内の多くの抗戦派が捕縛、投獄がスムーズに行われた。コレはテオドラによる告発と証拠

の提供があり、なおかつ容疑のあった全員が城内に簀巻きにされていつの間にか転がされていたためだった。

さらに国民の多くが抗戦へ扇動されていた事実はテオドラ以外の有力者へ疑念を向けることになったのだ。

一度そういうことをされ他直後ならば、アレもコレもと疑うのは当然の結果だろう。そこでただ一人真実を公表したテオドラに民意が集まった。彼女なら裏切らないということだろう。

そうして発言権が強くなったテオドラは帝国からの能動的戦闘をいったん停止した。降りかかる火の粉は払うが自分達から争うことをひとまず取りやめたのだ。（ちなみに現皇帝だが、いろいろとシヨックだったようでテオドラに全てを任せて寝込んでいた。おかげでますますテオドラの仕事は増えた）

こうして激務に追われていたテオドラは一月ぶりの自室のベッドにダイブしゴロゴロ転がっているのだった…

「タージュー、妾はとても、とっても！非常に！疲れたのじゃ」

「そんなもん見たらわかる。というかよく一ヶ月でここまで掃除できたな」

「ふっふっふ。妾をなめてはいかんのじゃ。…ということで、連合側の人間と渡りをつけることに成功したぞ。感謝するがよい」

「マジか！…よくこの一ヶ月で過労死しなかったもんだ」

「当たり前だ。何しろ一時的に私が噛んで吸血鬼化させたからな。たかだか一ヶ月の徹夜程度じゃへこたれんぞ」

「エヴァ、一国の指導者に何してんだ…」

えらく突っ込みどころの多い会話であった。ちなみにテオドラは激務が終わった段階でエヴァの眷属から解放されて、普通の人間にもどっている。

「で、相手はどういった人物だ？」

「今はまだ教えん。相手の意向で信頼できる人間に自分から素性を明かすことになっておるのじゃ。とは言っても会うことができないようじゃ話にならんからの。実は代理の人間が応接室に来ておるのじゃ。ついて参れ」

「わかった。行くぞエヴァ」

「うむ」

そう言ってベッドから飛び降り、応接室に向かう。

テオドラに促されて応接室を開けると、そこには見た目がエヴァと同じくらいの少年とくたびれたスーツを着た中年の男がタバコを吸っていた。テーブルの上の灰皿にはすでにこんもりと山ができている。どうやらかなり待たせてしまったらしい。

「待たせてすまない」

「いや、それほど待つては…ああ、コレか。俺はヘビースモーカー

でね。吸殻の山から思うほど待つてはいない。連合の和平派に用があるという人間は貴方か？」

「ああ。タージュ・ヴァレンタインという。連合の人間には殲滅者のほうじゃ覚えがいいかもな」

「…俺はガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。元MM連合の調査官で、現在はあるお方の代理人だ」

「殲滅者！？貴方がですか！？」

そばにいた子供が大樹の二つ名に反応している。ガトウは少年を嗜め、大樹のほうに向き直る。

「それで、連合と帝国双方に喧嘩を売り続けてる人間が連合の人間に何のようだ？」

「率直に言う。この戦争を意図して起こした組織がある。俺はそれが気に入らない。潰すのに協力してほしい」

「…どういうことだ？」

「帝国内の抗戦派の有力者はその組織の息がかかっていた。連合もそうかもしれんからな。そいつらがいる限り停戦は不可能だ。それだと雇い主も困るのではないか、ガトウ殿？」

「…詳しく聞かせろ。話はそれからだ」

こうして大樹達の作戦は次の段階へと進むことになる。

第26話（前書き）

なんか昨日から環をかけてアクセス数が増えてきてびっくりです。
たいしたことない作品だと思っんですけどね…

今回は大樹とアリカがメインです。

2011/03/12 微修正しました。

第26話

あのあと大樹はガトウに完全なる世界について自分達が知っていることを離れた。初めは一笑していたガトウだったが、話が進むにつれてその顔色が真剣さを帯びてきていた。

全ての話が終わった時、ガトウは苦笑いしながら大きくため息をついていた。

「にわかに信じられない事実だな。世界の救済のために戦争を起すことといい、その手帝国と連合の上層部にまで伸びていることといい……」

「だが事実だ。帝国での経緯を詳しく見てみるか？ 目からウロコがでるぞ。もっとも、協力者たちは本島の目的を把握してはいないようだったが」

「だろうな。流石に国の指導者が宗教に狂ったとは思いたくない。……いいだろう。協力する。俺は何をすればいい？」

「そうだな……帝国内で実際に行った対応をまとめたモノがある。それを見て臨機応変に対応、だな。俺達は連合の内情に詳しくないからそちらにふさわしい内容を考えて実行してもらえれば問題ないだろう。とりあえず主戦派の内偵は必ず行ったほうがいい。エヴァの蝙蝠を貸すからそれで情報を集めるべきだ。グレートブリッジでの大敗があるから数ヶ月は大規模な作戦に出れないだろう。その間に証拠固めを終わらせられたら御の字だ」

「わかった。俺はこれから連合の遊撃部隊に参加することになって

いるから、ソレを隠れ蓑にして調査を行うとしよう。主戦派のリストは数日中に渡すから、そちらの調査報告は共有しよう。あと、定期的に調査の報告はする。それでいいか？」

「かまわない。あと俺達との繋がりや雇いは主以外には極秘にしてくれ」

「当たり前だ。こんな話は素面でも誰も信じないぞ……」

ガトウはそう言うのと立ち上がり、タカミチをつれて応接室を辞する。残された三人はそのまま応接室に残り、今後の相談をする。

「エヴァは送られてきたリストを見て蝙蝠を飛ばしてくれ。あとガトウにも連絡用に一匹つけてほしい。テオドラは帝国内の安定をさらに強固にしてくれ。お願いできるか？」

「「わかった（のじゃ）」」

……そしてさらに三ヶ月が経過し、ガトウの調査は順調に進んでいた。現状で連合内での主戦派の半分以上が完全なる世界と繋がりがあることが発覚し、現在はその証拠を固めている最中らしい。定期報告でガトウがそう言っていた。

大樹が驚いたのが、ガトウが所属する遊撃部隊があの紅き翼だったことだ。グレートブリッジで活躍できなかった紅き翼は再び地方の戦場を転々としていて、ガトウとしては都合がよかったらしい。たまたま大樹が出向いた戦場で鉢合わせしたときは態度に出さないようお互いが必死だった。

ともあれ、そうした日々を送る中、大樹はガトウに呼び出された。なんでも、会ってもらいたい人間がいる、と。落ち合う場所はグレートブリッジ周辺の連合領にあるリゾート地と連絡を受けた大樹はエヴァをつれて急行したのだった。

待ち合わせの都市に着いた大樹達はガトウと合流するべく指定のホテルへ向かった。ガトウが予約していた部屋へ向かうと、そこにはガトウとタカミチ、その他大勢（一部縄で縛られていた）がいた。

「すまん、待たせたか？」

「いや、俺達もつい先ほど来たところだ。……で、後ろにいる赤毛の子供その他は？」

「いや、俺の雇い主がこいつらにも会いたいと言っててな。責任もって抑えとくから……」

「まあ、襲い掛かってきても返り討ちになるだけだから気にはしないが「なんだとテメエ！」……事実だろう、紅き翼？」

「まあまあナギ。私たちは喧嘩をしにきたのではないのですよ？少

しはおとなしくしててくださいね？」

ガトウの後ろにいたのは赤き翼の面々で、縛られていたのは赤毛の子供と褐色筋肉だった。二人を大樹の視界からさえぎるように前に進み出たのは某老師にそっくりな優男だった。

「こうしてきちんと会話するのは初めてですね。私の名前はアルビレオ・イマと申します。このたびはこの戦争の裏事情を教えてくださいださること。お招き感謝します」

「俺は招かれた側だな。……タージュ・ヴァレンタインだ。何度も闘ったから顔は覚えている。よろしく、だ」(しかし見れば見るほど泰山府君とそっくりだな。思わず殴りかかりたくなるくらい……)

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。タージュの被保護者で、アリアドネーで司書をやっていた」

「これは真祖の吸血鬼エヴァンジェリン殿ですか。よろしくお願ひしますね」

手を差し出し握手をするアルと大樹。……ただしアルの視線はエヴァに向けられていた。何か嫌な予感が背を走るエヴァと、苦笑いする大樹。

(……もしかして趣味まで老師と同じなのかつ！)「……アルビレオ殿、

私に何か？」

「いえ、特に何も。貴女を見ていただけですよ？」

「アル！悪い癖をだすんじゃない！……青山詠春だ。サムライマスターなどと呼ばれている。よろしく」

「すまん。こいつはちと趣味が特殊での。ワシのことはゼクトとでも呼んでくれ。あと後ろで師バラているのが……」

「俺の番か！ナギ・スプリングフィールド、人呼んで千の呪文の男だ！オマエにはいつか勝つからなっ」

「千の刃、ジャック・ラカンだ。あらためてよろしくな殲滅者！……ところで、今度サシで闘おうぜ」

「……随分にぎやかなやつらだな、ガトウ」

「俺の苦勞がわかってくれるか？さて、自己紹介も終わったようだ。この奥に俺の雇い主がいる。頼むから最低限の礼儀は考えてくれよ。特にバグ二人」

そう言われて奥の部屋に通された。部屋に入り、初めに目に入ったのはソファ―に腰をかけていた豪華な服を着た初老の男。その男を見た詠春が声を上げる。

「マクギル元老議員！ガトウの上司とは貴方だったのですか？」

「……連合の有名人なのか、アル」

「マクギル元老議員。連合の停戦派のトップです。これはまた大物がでてきたものですね」

「わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

そういわれ改めて手を向けられた方をみると、白いローブを頭からすっぽりと被った人物（体つきからおそらく女性である）だった。

「こちらの方ガウエスペルタティア王国王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア様だ」

マクギル元老議員に祖愉快された女性はフードを取り、目礼する。

「へえ、オスティア王家の王女様か。俺は千の刃の「気安く話しかけるな下種が」……気の強い王女様だなあ、おい」

ラカンの挨拶を無視するような態度をとるありが王女に大樹は眉を寄せ、一歩前に出た。大樹の態度を見たガトウが制止しようとするが、間に合わず大樹が口を開きだす。

「自分から自己紹介もできない無礼な人間が王族とは、オスティア王家も先が思いやられるな」

「……なんじゃと？」

大樹の言葉に反応するアリカ。ガトウは顔を青ざめさせるが大樹の言葉は止まらない。

「今回の件ではお互いに協力を求める立場のはずだ。なのにオマエのその態度……ガトウふざけた茶番なら俺は帰るぞ？」

「待てタージュ、少し冷静になれ」

「悪いが礼儀知らずの下種と会話するつもりは「すまぬ」……もう少し大きな声で言ってもらおうか王女様」

「すまぬ。確かに私は自国のため、民のために協力してもらおう立場であった。……ジャックとやら。先ほどは失礼を言った。すまぬ」

「お、おう。俺様は気にしてねーぜ」

「……タージュ・ヴァレンティン。今回、戦争を止めるために帝国側から協力を願った者だ。今後ともよろしく」

アリカが謝罪の言葉を口にしたのを確認し、帰ろうとする動きを取りやめ自己紹介をする。そのまま手を差し出すと、アリカは大樹の手をとり握手を交わした。

一連の流れを見てほっとしたガトウは改めてしゃべりだした。

「……タージュ、こちらのアリカ王女が俺の雇い主だ。王女はこの戦乱を止める為の活動を開戦当初から続けておられてな。テオドラ皇女が王女を目に付けたのも演説を聞いてのことだったらしい。…アリカ王女、こちらが帝国側の協力者であるタージュです。此度の内偵に多大な協力をしてくれた人物でもあります」

「タージュ、一つ聞いていいか？」

「なんだ」

「そなたは何故オスティア奪還戦より両軍を相手に戦い続けておる？」

「……くだらない人死を防ぐためだ。命さえあれば魔法を使つて助かることができるが、死ねばそれまでだ。他人に踊らされて始まった戦争なんかで人が死ぬのを見るのは耐えられんさ」

「そうか。オスティア奪還戦のとき、そなたのおかげでわが国の死者は非常にすくなかった。ありがとう」

さきほどとは打って変わったしおらしい態度にナギやラカンは啞然とするが、大樹は平然と礼を受けていた。

「それで、今後の話だが………」

あの後大樹達は今後の行動について話し合った。現在連合の内偵は順調だったが、さらなる調査をするためにはガトウだけじゃ人手が足りないのだから紅き翼の頭脳労働組（アルとゼクト、詠春）も加わることでとなり、残りのバグ二人は王女の護衛として行動することになった。どうやら完全なる世界が王女の行動を疎ましく思っているようで最近周囲があわただしいらしく、このまましばらく姿をくまますことになったのだ。

ちなみに大樹はバグ二人と同行することになり、エヴァは帝国に戻りテオドラの護衛をすることになった。もし連合が大規模攻勢に出た場合の抑止力としてもエヴァが帝国にいたほうが動きやすかつたし、大樹がナギとラカンに捕まっていたこともある。

ともかく今後の方針が決まったため会合は解散となり、ガトウはマクギル元老議員を連合首都まで見送りに行き、エヴァはさっさと帝国に戻った。残りの人間は気晴らしにと近くの埠頭を散策に出てきたのだ。

「しっかしおつかねえ姫さんだなあ。ジャックなんか『喋りかけるな下種が』とか言われたしょ」

「何言っただ、その姫さんとキヤイキヤイしゃべっていちやついでいたくせに」

「てめえどこ見て言っただやがる！喧嘩売ってるなら買っぞ！？」

「おもしれー、やるか？」

「仲いいあのバグ二人は……」

「似たもの同士ということでしょう。放置するのが一番です」

ナギとラカンがギヤイギヤいわめいて、いつの間にか殴り合いに発展しそうになっているのを少し離れたところから眺めて苦笑する詠春とアル。ゼクトはバカは相手にするだけ無駄とそっぽを向いており、普段の彼らの扱い方がよくわかる光景である。

「ところで、アル。大樹とアリカ王女はどこへ行っただ？」

「大樹？タージュではなくてですか？」

「ああ、タージュ・ヴァレンタインは魔法世界などで使う名前らしくてな。本名は如月大樹というそうだ。こちらの人間にはタイジュという発音が難しく訂正するのが面倒だから使い分けているらしい。俺は日本出身だからな。さっき教えてもらったんだ」

「なるほど、そういうことですか。タージュならアリカ王女の傍にいますよ。ほら、あちらの方に」

「そうか。……アル、俺達は今まで連合で何をしてきたんだろうな」
「どういふことです？」

「大樹達はこの戦争の裏を知り無駄な犠牲を無くすために行動していた。なのに俺達は連合に踊らされて多くの帝国の人間を傷つけた……。俺は武者修行のつもりでナギと魔法世界に来た。そんな軽い気持ちで行動していたと思うと過去の自分が恥ずかしいんだよ」

「……過ぎたことは今更どうにもできないでしょう。それよりも気

持ちを切り替えてこれからを考える方が建設的です。多分ですが、バグ二人なんか気にも留めていないでしょうし、タージュもそのことについてとやかく言うような人間ではないと思います」

「俺は考えすぎなのか？」

「まじめすぎるんですよ、詠春。その辺りはバグ二人を見習うべきだと私は思います」

まじめすぎる詠春の心労を労わるように言葉をつむぐアル。普段の悪ノリではない真摯な言葉に詠春は気持ちが軽くなるのを感じた。

「……そうかもな。さて、日も暮れてきた。王女様をつれてホテルに戻ろう」

「そうですね」

詠春とアルがそのような会話をしている少し前。彼らと少し離れたところで、大樹アリカと二人で夕日を眺めていた。アリカが静かなところに行きたいと言うので大樹がついていったのだ。どうやら紅き翼の騒がしいノリが少し疲れたようだった。

「騒がしい場所はあまり好きじゃないのか？」

「いや、普段あのような人間が周りにおらんな。ちょっと一休み、じゃ」

「そうか。これからはあのバグ二人と行動するんだ。慣れないと大変だぞ？」

「ふつ。そのときはそなたの近くにおるとしよう。そなたの傍は何故だか心地好い。ざわついた心が静まっていくな」

そついうアリカに、大樹は苦笑して答える。

「千年を超えて生きていると、いくら精神が外見に引きづられるとは言え中身は達観しきった爺さんみたいなものだからな。枯れた空気を纏うのも仕方が無いさ」

「……やはり、そなたは遙か昔に連合を恐怖に陥れた殲滅者なのだな」

「ああ。この火眼金睛の右目がその証拠だな。このような瞳は亜人にも見られないからな」

認識障害を解除する。それによってアリカにも大樹の右目が認識できるようになり、息を呑む。

数百年の昔に多くの連合の人間を虐殺した人間。それが今は連合の重要人物であるアリカの護衛をしていることに、なにやら思いを

馳せるアリカ。大樹も不思議な縁だと内心苦笑していた。

「……何故そなたはそのようなことをしたのだ？」

「聞いてどうする。過去に起こった事はただの事実でしかないぞ」

「このような落ち着いた空気をまとっている目の前の人物と、過去の事実がつかないからな。単なる好奇心と取ってくれて構わない」

アリカの瞳を覗き込むと、本当に純粋な好奇心からの質問のようだった。昔話をするのも悪くは無いかとため息を一つ吐き、大樹は地面に座り込み、当時のことを語りだす。

「……俺の身内を害したからな、当時の元老院は」

「身内というと、先ほどいた吸血鬼か？」

そこから大樹は当時のことをアリカに語りだす。魔女狩りにかこつけて、まだ大して力の無かったエヴァを拉致し拷問にかけた魔法使い達。ソレを助け、二度と自分達に関わることがないよう徹底的に復讐したこと。魔法使い本人たちだけではなく彼らの一族郎党、吸血鬼討伐を命じた上司まで一人残さず殲滅した。下手に情けをかけるると復讐の連鎖が起こるから、徹底的にやったということ。

全てを語り終わり、大樹はアリカを見つめる。

「俺は寿命で死ぬことがない。そんな俺にとって、不変であるもの

をくれた身内は何よりも大切だ。エヴァは俺の娘みたいなものだから言うに及ばず。それ以外にも長い人生で何度か人間と関わったことがあったが、その時の思い出は俺の中で永久に色褪せることはない。真実不変だと思っている。そういった大切なモノを害する存在は何をもつてしても滅ぼすのさ、俺の大好きなものを守るためにな」

一度言葉を切り、懐からタバコを吸い始める。何時だったかガトウに一本勧められてから、考え事をまとめるときにタバコを吸うことが癖になってしまっていた。もっともガトウのようにヘビースモーカーというわけではなく、気分を切り替えたり集中するときのスイッチみたいなものだ。

「俺が見た限りだと、オマエも似たような部分があると見たがな。守りたいもののためなら他のシガラミを捨ててでも行動しそうだよ」

「それはどういう……」

アリカが聞き返そうとしたとき、詠春がこちらを呼ぶ声が聞こえた。

「まあ、年寄りの戯言だとも思っておけばいいさ。さて、そろそろ戻るぞ」

「なっ！ タージュ、私をからかうな！！！」

「そら、早く行くぞアリカ」

顔を真っ赤にして怒鳴るアリカをなだめつつ、大樹は詠春達のところにもどるのだった。

第26話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

アリカフラグ？さてどうしますかねー

こっそり武器の名前を変更しました。あと微妙な無駄設定を削除。
読み返すとそれまで忘れていた設定があったりしてワロス。
つつても所持品程度で大きな影響はなくて安心。

頑張ればもう一度投稿するかもしれませんが適当にお待ちください。
い。
それでは、また。

第27話（前書き）

はてなアンテナとかにリンク張られてた…そりゃアクセス増えるはずだわ…

大戦編もいよいよ佳境。残すところ2〜3話って感じですかね。それではご覧ください。

追記：感想にて突っ込みをいただきました。

敵キャラの呼称がフェイトではおかしいとのことですが、原作259話に明記されているように大戦期の彼は一番目なので、本来なら一番目のラテン語表記をするのが正しいのですが、そう表記しても返って混乱を招くと思いました。

なので、原作フェイトはテルティウムと表記すると思いますが現時点での彼は便宜上フェイトと呼称しております。
以上追記でした。

2011/03/12 微修正

第27話

「ただいま帰還しました、造物主。次の任務は何かありますか？」

魔法世界の辺境にある某所。そこにある完全なる世界のアジトの最奥には黒ずくめのローブの男とフェイトの姿があった。

ヘラス帝国襲撃を失敗してから、フェイトは大樹の妨害任務を外され別の長期任務についていた。そして、先ほど任務を終えてここに帰還したのだ。

『人形よ、次の任務は連合の執政官を暗殺とその替え玉だ。これもしばらくの間は執政官に成りすましてもらう』

「……了解です」

『どうした人形。何か不満か？』

「いえ、そのようなことは」

『……それでよい。人形は自らの意志など必要ない。ただ言われたことをこなせ』

造物主の前を辞し、通路を歩く。向かう先は自室である。すぐさま任務があるとは言え、一度自室に戻ることにしたのだ。

その途中、後ろから声をかけてくる者がいた。このアジト内でフェイトに声をかけるような人間は一人しかいない。デュナミスだ。

「久しぶりだなフェイト。……これからすぐに任務か？」

「ああ。今度は連合の執政官の暗殺を命じられたよ。一休みしたらすぐに向かう」

「そうか。……何か造物主に言われたか？」

「なんでだい？」

「どこことなく普段と様子が違うからな。長年の付き合いだ、それくらいわかる」

珍しく饒舌なデユナミスの口ぶりにフェイトはそんなものかと思
い、自らの思いを話すことにしたようだ。

「……僕はタージュ・ヴァレンタインを追いたいのかもしれない」

「と、いうと？」

「彼を追う任務を外されてから、どうも落ち着かないんだ。以前にはこんなことはなかった。任務を終えて帰ってくるとき、また彼と勝負をつけられるかと思った。でも、次の任務もまた別のモノだった……」

「ふむ」

フェイトの話を聴いて、一考するデユナミス。少し間をおいて、口を開いた。

「私は、オマエの友人でもあると思っている。だからこそ、どういう選択肢をしてもそれを受け入れるつもりだ」

「……どうということだい？」

「人形であろうと、そうでなかつと、自分で決めるのも一興だということだ」

「……？」

意味深なことをフェイトに告げ、長居したなと部屋を去るデユナミス。残されたフェイトは言われたことをしばし考えていたが、やがて次の任務のために自室を去るのであった……

「おいおい……派手にやつたなナギ」

「いや、俺だけじゃねえし。半分は姫さんだぞ？」

「嘘を言うでない。私がやったのは三割がせいぜいだ」

「……どちらにせよ、詠春がカンカンだ。ナギが姫様をそそのかしたとな。大人しく怒られてこい」

「げえ、マジかよ」

アリカの護衛を始めてから数ヶ月が経ち、1982年も残すところあと一月という時期。大樹はナギとアリカが夜になっても帰ってこないと詠春にせつつかれ、搜索に出ていた。

一晩中探し続けた大樹は、翌朝になつて繁華街を歩いている二人を見つけて話を聴いていた。なんでも大樹が出ていたときにアリカが外に出たいと言い出したため、ラカンがナギに押し付けたいらしい。その最中、街中で襲撃を受けたため襲撃犯を追跡。そのまま本拠地を探し出し壊滅させてきたというのだ。……しかもアリカを同行させたまま。アリカが言うには、バカー一人で行かせたら何か重要な資料があつても気付かないに決まっているし、何より襲撃があつたのに一人で置いていくとありえないとのこと。

……どうやら本当にノリノリで暴れていたらしい。随分清々しい表情でナギにフォローを入れていた。

「ナギ、安心しろ。本拠地で重要な情報を見つけた。コレを見せれば詠春も少しは怒りを軽く……してくれるかもな」

「……気休めにもならねえ」

「で、オマエはアリカ様を連れて一昼夜暴れてきた、と？」

「だからー、姫さんが自分からついてきたんだって！しかも俺よりノリノリだったんだ！俺は悪くねえ！」

苦虫を噛み潰したような表情をする詠春にひたすら言い訳をするナギ。ラカンにはニヤニヤしながらそれを眺め、アルはいつもの胡散臭い笑顔。ゼクトは我関せずを貫き、ガトウと大樹は苦笑いを隠せずにそれを見ていた。

あまりにもナギが哀れに見えた大樹は、それとなく詠春にフオロ―を入れることを決め口を開く。

「……まあ、アリカがノリノリだったのは俺も見ただけからな。ナギが言うことも半分以上は本当だろう。だからその辺にしておいてやれ詠春。子供は怒ってばかりじゃグレるぞ？」

「俺はガキじゃねー！！！！タージュてめえ喧嘩売ってるだろ！？」

「俺はフオローしてやってるだけだぞ。なあラカン？」

「ああ、そうだな。詠春、いい加減ガキの扱いになれろや」

タージュの言い分に半笑いで相槌を打つラカン。ナギはプルプル

しながら俯いて、やがて爆発した。瞬動でラカンに接近し、殴りかかる。ラカンはひよいと避けてカウンターでショートアッパーを放つ。

「おいこらラカン！俺をガキ扱いすんじゃないやねえ！大体オマエも似たようなもんだろぅがぁあ！」

「けっ。これだからガキは……凶星を突かれたからって暴れるなやつ！」

部屋の真ん中で殴りあい始めるバカ二人に、周りの人間は全員ため息をついていた。

「……それでタージユ。アリカ様が見つけた情報とは？」

「ああ。見たら全員驚くと思うぞ。コレだ」

「どれどれ……って、本当なのかコレは!!」

「これを見る限り、な。連合はとことん腐っていたらしい」

「ガトウ、それには何が書いてあるんだ？」

ガトウが黙って資料をテーブルの上に投げる。タージユ以外の面々が資料に目を向けると、そこにはMM連合のNo.2である執政官が完全なる世界に関わっているという証拠の数々であった。息を

呑む面々にタージュは頭を掻いていた。

「とにかく、コレを元にマクギル議員に連絡を取って執政官の捕縛の準備をするぞ。あとガトウ、アリカが一度テオドラと会談をすると言っている。一度帝国に向かってもらうが大丈夫か？」

「ん？ああ。帝国のほうが現在落ち着いているからな。それは問題ないが……」

「ガトウ。自国の問題だからこそしっかりするべきだ。頭を抱えるのはいつでもできる」

「……そうだな。すまん、タージュ」

気分を入れ替えてマクギル議員に連絡をとる準備を始めるガトウを見て、ほっと一息つく。アルがすすと寄ってきて小声で話しかけてくる。

「流石長生きしているだけありますね。見事なフォローでした」

「まあこれくらいはな。さて、話が終わったら顔を出せとアリカに言われている。席を外すぞ」

「ええ。バカ二人は私に任せて、ごゆっくり」

そうして部屋を辞し、別室にいるアリカの元へ向かうのだった。

部屋の前で護衛をしているタカミチとクルトをねぎらい（クルトはアリカになついて離れなかったために同行させた孤児で、詠春に神鳴流を教わっている少年だ）、アリカの部屋にノックをして入る。アリカは椅子に腰をかけて本を読んでいた。ノックの音に本から視線をあげ、ドアのほうに目を向ける。大樹が入ってきたことを確認して笑顔を向けた。

「おそかったな、タージユ。何か問題があったか？」

「いや、バカが二人で殴り合いを始めただけだ。例の件だが、ガトウがOKを出した。船は明日までに準備しておく。疲れているだろうから、今日は早く休め」

「すまん。実は眠くて辛かったのじゃ。気遣い痛み入るぞ」

「この程度のことδειいちいち気にするな」

「そうか……。戦争を終わらせることはそなた達に任せる。私は私のできることをしにいくでしょう」

「ああ。安心して行ってこい。何かあっても俺達が助けてやるさ」

大樹の言葉を聴き、アリカは恥じらいながらも華の様な笑顔を浮かべる。それを確認した大樹は部屋を後にしようとする。ドアを開けたそのとき、後ろからままボソボソと何かを呟いていた。

「……その……は、……っっておるぞ」

その後、アリカを帝国領へと運ぶ船を見送った大樹たちは、MM連合の首都にまで出向いていた。マクギル議員が首都を離れることが難しく、直接証拠を渡し、その日のうちに執政官の弾劾手続きを踏むためだ。

マクギル議員に呼び出された執務室へ案内される間、大樹は考え事をしていた。

（おかしい。周囲からどんな人の気配が遠ざかっている。それに、この気配……まさか）

「お待たせしました。こちらがマクギル議員の執務室になります」

到着の声がかかり、大樹は一時思考を棚に上げる。仮に罠だとしてもどうにかなるだろう。このときはそう思っていた。

部屋に入るとマクギル議員はドアに背を向けて外の景色を眺めていた。ガトウが近寄り議員と話をしているが、どうやら雲行きが怪しい。聞こえてくる会話を拾ってみると、どうやら抗戦派の勢いが盛り返ってきておりわざわざ停戦の意見で水をさす必要があるのかともめているようだった。マクギル議員の気配を探っていると、やはりどこかで知る気配だった。そう、昔何度も闘りあったアイツの……

「……おい。その辺にしておけ」

「なんだねタージュ君。今はガトウ君と話をしている。君の出てる場面では……」

「うまくごまかしているが、何度も闘った俺が気付かないと思ったか？」

そう言っただけで瞬動で接近し、いつの間にか呼び出した八角棍を叩きつけようとする大樹。その場にいたガトウ、ナギ、ラカン、は止める間もない大樹の行動に目を奪われていた。

ガキーン！！

「な、マクギル議員。その武器はいつたい……」

いつの間にか手にしていた大剣で大樹の棍を受け止めていた議員にガトウは驚き質問を投げる。対して議員の表情はいつの間にか歓喜に包まれていた。

「……うれしいよ、タージュ・ヴァレンティン。このような場所で出会えたとはね」

「再会の喜びの前に、以前に言った質問の答えを聞こうか？」

「僕は……何であろうと君を倒す。でないと先へ進めないことがわかったよっ!!」

「上等っ!!!!」

瞬時にラカンとナギがかるうじて追えるような速度で格闘戦に入る二人。ガトウは急な事態に思考停止したのか口をパクパクとしている。

「嬉しいねえフェイトよおお!!!!ソレでこそ俺が認めたライバルだっ!!」

「僕も会えて嬉しいよ。でも……今日ココで決着をつけるっ!!!!」

方や神速の棍捌きでなぎ払い、打ち下ろし、突きを繰り出す大樹。方や身の丈以上の刃渡りの大剣でそれに応戦するフェイト。二人の攻撃速度はだんだんと増していき、ついにはナギとラカンの目にも映らなくなった。攻撃の余波が部屋の中の調度品を破壊し、すさまじい衝撃が周囲に広がっていく。

「……おい、ラカン」

「なんだ、ナギ？」

「あの打ち合い、見えてるか？」

「……かろうじて激突の瞬間だけな。遠目に見ているからだろう。実際に戦ったら、避けれるか五分五分つてところだ」

「タージユの野郎、俺らが喧嘩吹っかけたとき手加減してやがったのか」

「ありや同格の相手じゃないと見せねえだろ……」

ラカンとナギが呆然としてみると、そこにさらなる混沌をもたらす事態が起きた。突然目の前に転移ゲートが開き、執政官が現れたのだ。執政官の出現にそちらに目を向けるナギたちに大樹は舌打ちをする。

「バカ野郎！そいつを早く取り押さえろ！」

「なっ！」

「もう遅い。『……ワシだ。マクギルだ。たった今執務室で襲われた！反逆者だ！……うむ、ガ「させん！！！」なっ！」

マクギルの声で電話をしようとした執政官に襲い掛かる大樹。かろうじて名前を告げられる前に電話を叩き落すことに成功した。だが、その代償は大きかった。

「な、大樹。オマエその傷……」

「ちつ。こんな隙を見せたらやっぱり狙うよなあ、フェイト……」

「……タージュ、君にはがっかりだ。こんな形で決着をつけることになるとはね。でも、しょうがないか」

見ると、大樹のわき腹には大きく切られた傷があり、フェイトの大剣は血に濡れていた。打ち合いの最中に突然フェイトから目を離し執政官に攻撃をした隙を、フェイトは容赦なく狙ったのだ。膝をつきフェイトを見る大樹にゆっくりと近寄る。武器を構えてあとはトドメをさすだけという状況に水を差したのは執政官の姿をした者だった。

「待てフェイト。造物主様から連絡があった。この場から今すぐに退避しろとのことだ。なに、すぐにでもここには連合の兵士が退去してくる。他の者はともかく。そいつはその傷では逃走できない。

……行くぞ？」

「……ここに来て、また僕の邪魔をするというのかい？」

「何を言っている。貴様は造物主様の命令に従って「断るよ」なんだとっ！」

「断ると言っている。君はさっさと行くといいよ。彼との決着は僕が自分の手でつける」

「……造物主が言っていたことは事実、か。意志を持ち始めた貴様は廃棄処分だ」

「何を言って……がはっ」

そう言つと何か呪文を呟く執政官。とたんにフェイトの腹は爆ぜた。口から血を吐き倒れるフェイトを尻目に、執政官はさらに呪文をつむぐ。

「ぐう……ガトウ、ナギたちと逃げる。ここは俺が引き受ける」

「タージュ、何を……いいから行け！全員が反逆者になるよかマシだ。エヴァに連絡をつける。帝国に逃げればなんとかなる。……わかったら行け」……死ぬなよ？」

ガトウはナギとラカンの首根っこを掴み、虎の子の長距離転移符でその場を後にした。残された大樹は執政官に向かって棍を投擲する。回避するために詠唱を破棄してしまった執政官は大樹のほうをにらみつける。

「この場を破壊して逃走しようとかさせねえよ。どうせなら素顔を見せろや」

睨み返してそう告げると、大樹は霊符を発動させた。とたんに執政官を雷撃が襲う。まだ余力があったことに驚いた執政官は不意打ちを食らい、幻術が解除されて素顔が露になる。

「……こうなれば道連れだ。長年我らを邪魔してきた殲滅者と相打

ちなら造物主様もお喜びになるだろう。わが肉体よ、爆ぜよう！！！！」

瞬間、執務室は光に包まれ、直後爆音が響き渡った。

第27話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

深夜にもう一度更新できるように頑張ろうと思います。

適当に期待しつつお待ちください。

それでは、また。

第28話（前書き）

なろうよ、私は帰ってきた！！！！！！

というわけで一週間ぶりの更新です。

放置プレイしている間にPV66万、ユニーク6万超えてました。
びっくりですね！。

地震で皆大変だとは思いますが、読んでくれる人がまだまだいるなら頑張つて更新します。

それではお待たせしました。どうぞ。

第28話

「何故タージユを見捨てた！」

アリカの平手がガトウの頬を張る。パシンと高い音を鳴らし、タラを踏んだガトウの頬には手の平状の赤いアザができ、それを見たラカンが苦い顔をしている。タージユをその場に残したのはラカンも同じであったからだ。二人のほうをエヴァが冷めた視線を送り、タカミチとクルトはわたわたしている。

大樹の離脱は彼らに大きな影響を与えていた。

大樹が連合首都で完全なる世界の自爆に巻き込まれた後、紅き翼の面々は連合の勢力圏内にいることに危機感を感じ、エヴァンジェリンに連絡をとった。すると、テオドラがアリカと接触を図りに行ったあと、いまだ帝国に戻っていないことを聞いた。

すぐさまエヴァと連携して彼女らの行方と大樹の安否を確認した。大樹の行方については、最初こそすぐに情報が手に入った。なんでもあの爆発の後の建物は跡形も無く崩れ去り、さらにはどこからか出火したらしい。ようやく火が収まり、瓦礫の撤去をしたが議員や執政官などの死体が一切出てこなかったというのだ。死体が出てこない以上死亡が決まったわけではないが、隠れているとしたら情報を集めることも難しくなったのである。

大樹の安否については現時点ではどうにもならないとアリカたちの行方を捜すことにしたエヴァたちは、かなりの時間がかかったが居場所を特定することに成功した。ヘラス帝国辺境の夜の迷宮に囚われているらしい。早速囚われた二人の救出に向かい、無事に救出することに成功したのだが……

「「ようやく助けに来たか。遅いぞ（のじゃ）」」

「積もる話は後だ姫さん。とりあえず俺らのアジトへ向かうぞ。ほら」

ナギが手を差し出し、アリカはその手をとる。ラカンにはニヤニヤしながらそれを見ていたが、次のアリカの言葉に思わず固まってしまった。

「ところで、タージュはどこだ？姿が見えないが……」

「そうなのじゃ！妾達の危機にあの男はどこに行ったのじゃ？」

「「「「「……………」」」」」」

「それについては後で話す。今はとりあえずこの場を逃げるぞ、テオドラ」

有無を言わせない迫力で告げるエヴァにテオドラとアリカは若干の不信を感じながらも、促されるまま迷宮を脱出する一行。アジトに到着した後、ラカンとテオドラの間で一悶着あったりしたが、ようやく一息つくことになった。

そこで大樹が連合で完全なる世界の襲撃に遭い現在生死不明だということのエヴァの口から告げられたのだ。

それを聞いたテオドラは一笑しありえぬと断言したが、問題なのはアリカのほうだった。さっと表情が失われ、わなわなと震えていたのだ。

そして、場面は冒頭へと戻る。

「ガトウ、何故タージユを見捨てて逃げた！ナギ、貴様もその場に
いて何をしていたのだ！？敵の策略にもタージユが先に対応し、そ
のせいで怪我まで負ったらしいな。無敵の赤き翼が聞いて呆れるわ
……」

「……………」

「……………貴様達には失望した」

そう言つてアリカはその場から立ち去る。詠春が追おうとするが、
アルがそれを制した。

「詠春はここをお願いします。王女は私が」

と告げると、返事を待たずにオアリカの後を追っていった。取り
残された詠春はナギの方を見やると、苦笑いしていた。

「まあ、姫さんの態度も仕方がねえよ。俺がタージュをおいて逃げたのは事実だしな……」

「ナギ……」

「でもよ、考えてみろよ。あのタージュだぜ？俺たちが束になつても敵わない、あのタージュ・ヴァレンタインが、だ。たかだか自爆攻撃程度で死ぬ人間に見えるか？……俺にはみえねえぜ？」

「いや、そう言ってもだな。事実死体すら見つかっていないんだぞ？わかつてるのか？」

「あの野郎は必ず生きてるさ。詠春も、アイツが信じられないんならよ。俺を信じろよ。そうすれば、お前が信じる俺が倒せないアイツが死んでるわけねえって思えるだろ？」

「……いつの間にか難しい言葉を覚えたんだな、ナギ」

「バカ弟子の癖にのう」

「つて、え、今俺がバカにされるところか！？？？」

ナギの科白にいつの間にか、場の雰囲気が和らぐ。平手を受けたガトウもいつの間にか笑っていた。テオドラは初めからタージュの無事を信じているのかラカンに絡んで遊ばれている。エヴァはナギの雰囲気を変えたことにほう、と感心した視線を向けていた。

「ってことでよ。俺たちはアイツが帰ってくる前にできることをしようぜ。連合にはもう味方がいないかもしれねえ。でもできることはあるはずだ。それこそ姫さんが何か考えてくれるさ」

「……そうだな。俺としたことが弱気になっていた。ありがとう、ナギ」

一方、ガトウを張り倒し部屋を出たアリカは自室に戻り意気消沈していた。あの場でカツとなりガトウに手をあげてしまったが、考えてみるとタージュが逃げると言ったのだしその場に残ることはマイナスにはなってもプラスには絶対ならないであろう。手をあげてしまったことはアリカの八つ当たりでしかなかった。

「……タージュ」

「彼がそんなに心配ですか？」

「アルビレオか。何をしにきた？」

「王女の話し相手、ですよ。……タージュがそれほど心配ですか？」

問いかけるアルにアリカは再度自分の感情を省みる。

「タージュはな、私のことを一度も王女と呼ばなかったのだ」

「？」

ふと脈絡のないことを語りだすアリカにアルは黙って耳を傾ける。アルの反応を見たアリカはさらに言葉をつむぎだした。

「タージュは、私に王女という敬称を一度もつけなかった。テオドラにもそうだったらいい。一度興味本位で聞いてみたのだ。『私は魔法世界最古の王家の血を継ぐ王女だぞ。何故王女と呼ばないのだ？』とな。そしたら……」

「そうしたら？」

「……タージュはこう言ったよ。『古いだけの王族に何の価値がある。俺だって二千年以上は生きているがそのことで敬われたことなんて一度もないぞ。アリカはアリカという一個人であって王女という存在はその付随物だろ？』とな。初めてだったよ、王女であること以前に私個人を見てくれた人間はな。まあ、あの男が人間かどうかはよくわからぬが……。そのような男が私の前から姿を消したとき、王女としての仮面は崩れ去ったのかもな。今の私はあの男が心配でならぬ、一人の女だよ」

「アリカ王女……」

アリカの思いを聞いたアルはなるほどと思った。オステイア王家といえば、魔法世界最古の王家で知らぬ存在などいない。それこそ亜人たちでさえ皆知っているのだ。その王家に生まれた人間という事実は一生ついて回る。それこそ魔法と縁を切らない限りは。それ

も王家に生まれた人間にはおそらく不可能だろう。自分個人よりも王女という肩書きが前に出るのは当たり前、そういった諦めをタージュは覆したのだ、と。

確かに彼ならば王族だとか、元老院だとかを気にしないだろう。社会に囚われずとも生きていけるほど突出した存在なのだから。ナギもその辺りは似たようなものだが、今まで生きてきた社会に縛られている部分は少なからずある。そう言った意味で、何者にも囚われず、ただ相対する個のみを見るタージュという存在は非常に稀有な存在なのだろう。

そのような非常に稀有な存在に、初めて自分自身を見てもらったのなら……。それは本人にとって奇跡のような出来事となるのだろう、と。

（これは、旧世界で言うところのフラグというやつですかね。惜しむらくはタージュにその気があるか不明という点ですが……。それにしてもタージュ、このようなフラグを作っておいて姿を消して処理を回りに任せるとは。恨みますよ?」

「……でもな、アルビレオ。私はあの男を信じることにしたのだ」

「ほう。先ほどまで取り乱していたのにですか。なんでまた?」

「私が知っているタージュという存在は、この程度でどうにかなる存在じゃないと思い出した。ましてや今のような姿を見られたら『その程度の意志だったのか?』と笑うようなヤツだった。私はあの男にそのように思われとうない。だから、やれることをやるとしよう。お主たち赤き翼はタージュ以外には無敗なのじゃろう?」

「……ええ。タージュ以外には、という部分が情けない話ですがね」

「連合全てが敵、よいではないか。こちらはたった9人、されど最強に準ずる9人。ならば我らが世界を救う。赤き翼には私の盾となり、剣にでもなってもらうとする。拒否は許さんぞアルビレオ。よいな？」

アルはいつの間にかアリカの発する覇気に気おされていたことに気付く。これが最古の王族のまとうオーラなのか。いや、おそらくは……

（自らが惹かれる相手に見損なわれたくない女の意地、ですかね）

胡散臭い笑顔の裏でアリカを見定める。こうなった女性は強いことをアルは経験から知っていた。ならば自分にできることはナギたちの説得か。いやナギのことだから一足飛びに似たような結論を出していそうだ。

（タイミングが違えばナギと惹かれ合っていたかも知れませんか。今更な話ですが）

「わかりました、ナギにはそのように話をしてみましょう。……元気がでてきたようですね」

「私はそれほど弱くはないぞ？そら、そうと決まれば早くナギのところへ「姫さん！！！！」……噂をすればなんとやら、か」

そして、アリカと赤き翼の面々はこの日を境に反撃の狼煙を上げることになる。

そして、その勢いは留まることを知らなかった。もともと帝国側は完全なる世界の影響を抑えていたということもあり、連合内の敵だけを考えればよかった。そのため頭脳労働派は楽に敵味方の特定ができたし、それさえ済ませばあとは戦闘部隊が獅子奮迅の活躍をするだけで事足りた。

アリカとテオドラのおかげで両国内の停戦派にも徐々に真相を伝えることができ、いつしか停戦を目指すことから魔法世界を救うという目的へと変化していったのだ。

……そして半年ほどの月日が経過した。

その日、オスティアには帝国、連合、アリアドネーの混合部隊がところ狭しと展開されていた。攻撃目標はオスティア空中王宮最深部・墓守人の宮殿。ゲームで言うところのラストダンジョンといえる場所である。

赤き翼の面々は墓守人の宮殿が一望できる場所にいた。

「気付けば三ヶ国混合の大部隊になってんなあ、おい」

「まだこれは斥候みたいなものですよ。帝国と連合からの本隊はいまだ到着しておりませんし」

「それにしても不気味なくらい静かだな。」

「悪の親玉なんてそんなもんだろ」

「結局タージユの行方はわからなかったが、私とその分頑張るとしよう。チャチャゼロ、魔力の貯蔵は十分か？」

「いつでも行けるぜご主人。全部刻んでやるよ」

彼らはこのような場面でも緊張とは無縁であった。……この半年、反撃と平行して大樹の行方も探し続けたがやはり彼の痕跡はまったく見つからなかった。もつとも、それに絶望するような人間はこの場に一人もいなかったが。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました！いつでも行けます」

「おう。あんたらには外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺らが本丸に突入できる。頼んだぜ？」

「ハッ！……それで、あの……ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

「おお？いいぜそれくらい」

「そ、尊敬していきまし「貴様、アリアドネーの人間か。随分と余裕だな」……そそそそ、その声は、ししし司書様ですか？」

油の切れたゼンマイのように後ろを振り向いたアリアドネー魔法騎士団の少女、セラスの視線の先には不適に笑うエヴァの姿があった。

「アリアドネーの騎士団も随分と大きくなったものだ。決戦前にこのような余裕を持てるほどのだからな。……今度戻ったときに一度手合わせを願いたいものだな」

「ま、まさか司書様と手合わせなんて、わわわ私達にはもったいないですよ」

「なに、謙遜するな。世界の命運を決める戦いの前にサインをねだるほど余裕なのだろう？」

「エヴァもその辺にしとけよ。びびって青ざめてるぞ、そいつ」

「ふん。冗談だ小娘。でも……折角だ、名前を聞いておこうか？」

「ひひひひひ！セ、セラスです、司書様！」

エヴァと漫才みたいなことをしているセラスを尻目に他の面々は軽い現状確認をするため向き合う。

「残念な知らせだ。連合のガトウから、正規軍の参戦が遅れるそう。テオドラからも同様の連絡があったから、これ以上の部隊を展開することはできなさそうだな」

「確かに。おそらく彼らは世界を無に帰す儀式をすでに始めていると見ていいでしょう。これ以上の決戦の遅延は不可能です」

「そっか。まあ、なんとかなさ。……待ってるよ姫子ちゃん」

かくして決戦は始まりを告げる。勝利の女神はどちらに微笑むのか……

……同時刻。オスティアから多少離れた密林に二つの人影があった。

「……まだかなり離れているけど、かなりの魔力があふれてる。間に合うのかい？」

「開始の時間に間に合わなくても、途中参加で十分だ。俺とお前が加わればどうとでもなるだろ」

「はあ。なんで僕が君と行動を共にしてるだろうね……」

「決着つきたいんだろ？ つつても結局、あれから一度も勝ててないけどな」

「負けた記憶もないけどね。……それに僕を消そうとした人にやり返さないと気がすまない」

「随分と人間らしくなったもんだな」

「誰かの影響だろうね。たとえば数千年生きた仙人、とか」

「どうだかな。さて、急ぐぞ。決着がどうなっても間に合わんことには結果が変わらん」

ヒーローの登場まであと少し

第29話 挿話之3 くそのころのフェイトと大樹く（前書き）

まずご覧ください。

第29話 挿話之3 ーそのころのフェイトと大樹ー

決戦の日から時は半年ほど遡る。

以前エヴァが囚われていた、ヘラス帝国領にある砂漠の中に存在する流砂の奥深く。そこに存在する地下洞窟に突如影のゲートが現れた。

誰かが転移してきたのだ。

そこから姿を現したのは脇腹が抉れた大樹と腹に穴を開け口元を赤く染めたフェイトだった。

「くう、最後に自爆とか。どこの三流怪人だっつーの……」

あの執政官に化けた敵の自爆、その瞬間大樹はフェイトの首根っこを掴んだ。直後に切り札である”闇”を展開。自分とフェイトの周囲に闇を纏い空間転移を行ったのだ。とっさに行った転移だったので転移先を十分に指定できずランダムに移動した結果、フェイトとの初遭遇した場所であるこの地下洞窟に行き着いたらしい。

「こいつと転移した先がこの場所っていうのも、何かの因縁を感じるな……。さて、俺の怪我もそこそこ深いが」

と、傍らにいるフェイトの傷口を見る。造物主によって取り付けられた自爆装置か何かが原因だろう。腹の傷は致命傷と言っても過

言ではないようだった。

「……なんで僕を助けた？」

「とりあえずしゃべるな。今仙丹で傷を修復する。普通なら即死だが、オマエの体は普通じゃない。人間の体じゃないことに感謝するんだな」

傷の状態を見て一刻を争う状態だということを理解する。すぐさま泰山府君謹製の仙丹を懷から取り出し噛み砕く。砕いたものをフエイトの傷口に流し込み、さらに別の仙丹を埋め込む。最後に治癒術符を傷口を覆うように貼り、自らの魔力を流し続ける。

「これで処置は終了、と。処置の説明をするぞ？細胞の再生を促進させる効果と、心臓の代替となる仙丹を埋め込み呪符で塞いだ。あとは完治するまで俺の魔力を流し続ければ問題ない。恐らくだが一ヶ月ほどはかかるだろうが。……何か質問は？」

「さっきも聞いたはずだよ。何故僕を助けた？」

「あー、んー。オマエが俺と決着つきたいと思ってるように、俺もそう思っているってのもある。だが、結局後付けの理由になりそうだ」

そう言う大樹に、フエイトは表情を変えずに首だけをかしげた。

「よくわからない」

「そうだな。……理解できるかわかんが、自分の感情に理由なんて必要か？感情なんて突き詰めたら理屈じゃねえと俺は思うよ。うれしい、楽しい、興味深い……もちろん殺意や敵意といったモノもだ。特に今回みたいな突発的な判断なんて結局は直感としか言えん。助かったんだから文句言わずにじっとしてろ」

そこで一度言葉を切り、フェイトの反応を見る。フェイトは相変わらず無表情だ。

「……完治したら決着つけてやるからよ？とりあえずそれまで暴れるなよ」

「……僕は君と決着をつけたい。そうでないと、先に進めない気がする」

「そうか」

「だから、今は言つとおりにするよ」

そう言つとフェイトは目を閉じる。寝息が聞こえてきたのを確認すると、大樹はフェイトに当てている方とは逆の手で自らの傷に触れ、治癒を開始する。

（フェイトのが重傷だが、俺も大概だな。仙丹が今のでちょうど切

れたのも運が悪い。治療力の活性化とマナの取り込みでどこまで治るか……)

フェイトに使用した仙丹は内臓の代替として機能するが、それが安定するまでは絶えず外部から魔力を注がねばならない。フェイト本人は負傷のため魔力の運用なんてする余裕はないし、この場から動けない以上助けを呼ぶこともできない。治療を開始した以上見殺しにするのも気が引けるため、大樹は一心不乱にフェイトの呪符に魔力をそそぎつつ周囲のマナを取り込み続けるのだった。

「まあ仙界でマナを取り込む訓練をしたときはそれこそ年単位で微動だにせずやり続けたし……取り込んだマナをフェイトに流すように魔力の流れをいじれば大丈夫、か。無心でいれば数ヶ月くらい余裕だな」

バグ老師、Sに鍛えられた大樹もやっぱりバグだった。

「タージュ、いい加減に目を覚ましてくれないかい？」

「……ん？フェイトか。いつの間に動けるほど回復した？」

声をかけられ意識を覚醒させる。声の方角を見ると立ち上がり手足を動かしているフェイトがいた。腹の傷跡を見るとすでに呪符は

消え、傷跡もほとんど見えない。

「……君は何を言っているんだ。ここに転移してからすでに二ヶ月はたつたよ。言われたとおり体を休めていたら、いつの間にか君が貼った呪符が僕の肌に溶け込んだ、のかな。魔力の流れも正常だし思い通りに動ける。完治したみたいだ」

そう言うフェイトに、大樹は視線を向ける。大樹の目にも魔力の以上は見当たらず、本人が言うとおり完治したのだろう。マナを取り込み続けたせいか大樹の傷も塞がっていた。むしろ久しぶりに自然のマナを長期間取り込んだためだろう、普段以上に調子がいい。今すぐにフェイトと決着をつけても問題ないだろう、が。

「そうか。そいつは重畳。それじゃ勝負、といきたいところだが質問がある。オマエは自分が人形だとまだ思ってるのか？俺を倒さないと先に進めないと言っていたが」

「……僕は自分がよくわからない。造物主の命令に従うだけが僕の存在価値だったはずだけど、君と戦い始めてから優先順位が変わったのかもしれない。まあ、どちらにせよあの時の攻撃で僕と造物主の繋がりは切れたみたいだよ」

フェイトは淡々と語るが、大樹は最後の一言に反応した。

「造物主との繋がりが切れたってどういうことだ？」

「言葉のとおりだよ。以前はどこにいても造物主相手には念話が可能だった。向こうから命令する以外にはほとんど使わなかったけどね。……でも今は一切繋がらない。何回か試したけど無駄だった。どうやら廃棄処分されたことになっているみたいだよ」

「ふむ」

フェイトの言葉を聴き、思考をめぐらす。フェイトのほうは、言うことは言ったと思ったのだろう。じょじょに体から発する魔力の濃度が高まっていた。

「質問は終わりかな。だったらそろそろ……」

思考の淵から戻ってきたのか、はたまたフェイトの魔力に反応したのか。大樹も全身に魔力を纏い、戦闘体勢に以降しだす。気付けば二人がいる空間はお互いの魔力の影響で張り詰めるような緊迫感に包まれていた。

「……そうだな。ここまで来たら、言葉はいらないな。いいだろう。ココがお前と俺の決着をつける場所だ」

「いいね。これほど気分が高揚しているのは初めてだよ」

フェイトが腰を下ろし、足を軽く開く。きっかけがあればいつで

も飛びかけられる体勢だ。

「ソレを一般では楽しいって言うんだぜ？覚えとけ」

負けじと大樹も構えをとる。長き年月をかけて研鑽し、極みに至った自分の武術を余すことなく発揮できるように。

「……この場所は以前吸血姫を捕らえていた場所だね。空間内の魔力の影響を極力外部に漏らさないんだ」

「ってことは、思う存分闘っても問題ないってことだな」

「そういうことだね。じゃあ……いくよ？」

「ああ」

不意に天井から小さな瓦礫が落ちてきた。二人の魔力がとうとう周囲に物理的な影響を与えだしたのだろう。

瓦礫が地面に触れ、砕ける音が響く。その瞬間、二人の姿が掻き消え、別の場所でクロスカウンターをしていた。

「ぐうつ」

「ガッ」

激突から一拍遅れて轟音が鳴り響く。あまりに早い打撃が音の速度の壁を越えたため音がズレたのだ。距離をとるために再び離れる両者。

再び先手をとったのはフェイトだ。全身の動きを連動させた正券突きが大樹に襲い掛かる。が、大樹はそれを左手で無造作に払いのける。一瞬胴体ながら空きになるが、そのような隙を逃す大樹ではない。お返しとばかりに掌底を打ち込む。ソレは自動展開している魔法障壁を紙切れのように突き破り脇腹に減り込んだ。

「ゲフツ」

「武術の腕前も魔力の練りこみも、ここまでハイレベルなヤツはなかなかいないだろうな……でも」

もちろん掌底だけで終わるはずもなく、そのまま体ごと懷に飛び込み体当たり。吹き飛び壁に激突する。

「こと一対一でのハイレベルな戦闘において、魔法使いには強固な障壁は必須だろう。でも、それじゃあ俺の行動は読めない」

土煙の向こうから返事が聞こえ、フェイトが姿を現す。ダメージが抜け切っていないのか若干ふらついていた。そこへ再び飛び込む大樹。

（おかしい、さっきからタージユの動きが一切読めない。以前より

動きが早いわけでもない……)

思考のループにはまりつつ、嵐のような大樹の攻撃を捌き続ける。だが、何度か捌くたびに距離感を図り間違えたり、予想と違う位置からの攻撃が飛んでくる。気付けば初手以外自分から攻撃ができていないことに気づき、フェイトの内心は焦りで満ちていく。

「……例え音よりも早く動くことも、動くことで空気は震える。その震動を読むために中国武術は数千年進化してきた」

さらにフェイトの両手を捌き、その向こうに無防備なフェイトの顔が現れる。

(しまった、ガードが間に合わない……)

「そして、障壁によって外界から遮断されているオマエはそれを感じ取ることができず……」

その無防備な顔に向けて、まるで舞台での殺陣のように崩拳が決まる。

「結果、オマエは俺の動きに惑わされ、動きを読むことすら満足に行えない。逆に俺には全ての動きが丸わかりなのだよ」

たまらずフェイトは膝をついた。ダメージはそれほどでもないた

め、一度間合いを外す大樹からは視線をそらさない。

（今のままじゃ駄目なのか。だったら……）

再び立ち上がるフェイト。何かをぼそぼそと呟き、自分にかけている障壁を全てカットする。

「俺の言うことを聞く気になったのか？」

「君に勝つためなら何だってするさ。障壁を捨てることくらい大した事じゃないよ」

そう言って再び攻撃に入るフェイト。一方の大樹はフェイトの攻撃を裁き続ける。

「ご自慢の魔法は使わないのか？」

「この状況ではどんな魔法だろうと君には届かないからね」

大樹の台詞に応ずる。仮に魔法を使つたとしても、大樹の五行相剋は一对一だとほぼ鉄壁である。そのため高確率で無効化されてしまうのだ。かといって空間に武器を呼び出す攻撃は大樹も同様に使えるため、何をやっても千日手になってしまう。結果、勝敗をつけるとしたらガチンコの近接戦闘以外にないことをフェイトは理解していた。

「だからと言って、今のままじゃ攻撃は当たらんぞ？なにせ長期にわたってマナを吸収したおかげですこぶる調子がいいからな」

「問題ないよ。……僕もその領域まで行けばいいだけだからね」

そういうフェイトの動きは先ほどからどんどん鋭さを増していた。まるで先ほどの攻守を入れ替えたかのように大樹に攻撃を続けている。事実喋っている大樹も内心では冷や汗を流していた。

（こいつ障壁を切ったとたん俺の動きを真似しだすとはねえ。これでも俺の動きは仙術の奥義に近いモノなんだが。……まあ、だからこそコイツとの戦闘は楽しめる！！）

（障壁をカットしたことで周囲の動きが肌で感じれる。コレが彼の言っていたことか。武術なんてただの先頭に使う技術だと思っていただけだ……）

お互いの表情に自然と笑みが浮かびだしていた。まるで遊び道具を見つけた子供のようなのである。いつしかフェイトの一方的な攻撃からお互いが攻撃しあう状況へと変化していく。

フェイトの攻撃を大樹が捌き、カウンターを放つ。ソレがカスツでも表情を変えずに拳を繰り出す。逆もまた然り。

そしてその状況が数分続いた。
やはり状況は千日手となっていた。二人とも同じレベルの体術を

使っているのだ。勝負を決めるには何か違うアプローチが必要にな
ってきていた。

（楽しい時間ももう終わり、ってか。今の攻防で見る限り、一撃の
重さは俺のほうが高そうだが）

（スピード自体は僕のほうが少しだけ上。だったら……）

「そろそろ決着をつけようか」

「いいだろう。先手は譲ってやるよ」

言うなり殴り合いを切り上げ、数メートルほど距離をとる。互い
の攻撃はクリーンヒットこそしていないが、無数のかすり傷をお互
いに与えていた。

「次の一撃、決まれば僕が勝つだろうね」

「ああ。でも、読み切れたら俺が勝つだろうよ」

フェイトは自分の速度を最大限に生かした先の先をとり、大樹は
その攻撃を読みきり後の先を取る戦法を選んだ。今まで以上に二
人の間に魔力が渦巻く。

空気が張り詰め、重い静寂が周囲を包む。その瞬間、二人の眼が
カッと見開いた。

次の瞬間、互いの位置が直前と入れ替わり、いつの間にかお互い

が背を向けている。

「……惜しかったな」

「結局、僕は君を超えられなかったみたいだね」

グラリとフェイトがふらつき、地面に倒れる。その音を聴いた大樹は振り向きフェイトを見下ろした。

「ふん。お互い不老の身だ。今後いつだって相手してやるよ」

「勝者の余裕ってことだね。いつか勝ち越すよ……」

そう言ってフェイトの意識は闇に飲まれた。

「……いい加減目を覚ませっ！……」

「いきなり何をするんだい」

顔に水をかけられ、フェイトの意識は覚醒した。水をかけのは、
勿論目の前にいる大樹である。どうやら陰陽符を使い水を呼び寄せ
たらしい。

（……記憶が混乱しているのか。僕はさっきまでタージュと戦って
いた。確か最後は真っ向から打ち合いになってたはず。）

「現状報告必要か？」

「いや、思い出したよ。僕は君に届かなかった。そうだろう？」

「正解だ。判子でもいるか？」

「何かくれるのかい？」

「ある程度たまったら再戦してやるよ」

「それはいいね」

大樹の冗談にフェイトが真顔で答える。少し間をおいて、どちら
からともなく笑い声が漏れ出したていた。

「なあフェイトよ」

「なんだい。もしかして、もう一度闘うのかな？」

「それもいいが……今後のことだ」

それを聞いたフェイトは気持ちを切り替える。現状大樹とフェイトは連合から逃げる際にたまたま一緒になっただけの関係であって仲間になっただけではない。

「フェイト、俺と一緒に来い。世界を見せてやる。魔法世界、旧世界問わずだ。完全なる世界みたいに絶望や諦めに囚われていない人間の世界を俺が見せてやる。だから俺と一緒に来い」

「……僕としては、君といつでも闘えるっていうのだけで十分なんだけどね」

「バカが。それだけで済むほど世界は狭くねえぞ。オマエが今まで死ぬべきだと思っていた人間にだって別の一面が、それこそ無限にあるんだ。……それを見せてやるよ」

そう言って右手を差し出す大樹。フェイトは瞬きをしてその手を見つめる。

「……お手柔らかに頼むよ」

この時を境に、大樹は生涯の親友を得ることになる。

おまけ

「さし当たつて。今後の行動なんだが」

「恐らく造物主は数ヶ月以内に黄昏の姫巫女をつかたリライトを發動させると思ふけど」

「そうか。だがそれ以前に……さっきの戦闘の怪我でここからの脱出がきついんだよな」

「奇遇だね。僕もだよ。意識はあるけど満足に動けないみたいだ」

「……治療符は手元にないぞ？」

「……癒えるまでここで待機だね。まあ、動けるようになったら軽い組み手でもして勘を取り戻せばいいんじゃないかな？」

「賛成」

以後、組み手をするたびにお互いがヒートアップしやりすぎ、結果としてこの場所に着てから半年ほど留まっていた。

そんな理由で、彼ら二人は決戦に遅刻することになる。

第29話 挿話之3 〱そのころのフェイトと大樹〱（後書き）

と、いうわけでバトルジャンキー脳に一時的になってしまっていたフェイト君と大樹でした。

作者はどうしてもフェイトを仲間にしたかったのでこのような運びになりました。

こんなのフェイトじゃないとか言う方は、どうぞ回れ右をしてくださって結構です。

面白がってくれる読者と自己満足のためだけに、作者は筆を走らせます。

遅れた理由はこんなしょうもない理由ですが、いつでも自然体の大樹なら有り得るでしょう。感想にも書かれてたくらいだし……
まあ、ヒーローは遅れてやってくるものと相場が決まっていますので問題ないでしょう（え

次回、決戦です。……多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960r/>

俺のネギま生活（仮）

2011年3月24日22時59分発行